

---

# セルフ・ディストラクション（改稿版）

白鳥準

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

セルフ・ディストラクション（改稿版）

### 【Nコード】

N0806K

### 【作者名】

白鳥準

### 【あらすじ】

世界は徹底的に壊れている。そこに住む人たちも勿論。そんな世界に住む私の目の前に突然現れた奴。「僕の名前は灰田純一。とある世界の、神さまだ」。無駄に美形なそいつの登場を待っていたかのように次々と現れる『異常者』たち。因果の鎖に縛られた元気な女の子、白椿菊乃。正義を振りかざす悪意の塊、黒住儀軌。そして優等生である私。日常と非日常の境に混在する彼らと私。壊れているのは世界か、それとも私か。壊れていくのは世界か、それとも、私か。

## プロローグ

私とその本を見つけたのは、彼があまりにも寂しそうだったからだ。その本には貸し出し記録がついていなかった。そもそも、発行年月も作者も記載されていない本だ。図書館の所有物なのかどうかも分からない。それでも私はそれに強烈に惹かれて、次の瞬間には本の貸し出し記録に初めて名前を載せることになる。

本のタイトルは『こわれたにんげんの、こわれたせかい』。もうかなりの年月が経っている事がカバーの手触りやページの黄ばみで分かる。しかしその実、ページの耳には人の指紋らしきものは見当たらない。年月だけ経って、ほとんど誰にも読まれなかったのだろう。そう思うと、なんだか妙な愛しさも湧いてきた。千年の約束を果たしに来た想い人が会いにやってきてくれたようだ。とは言え、別に嬉しくもなんともない。

「――彼女には願いがあった。けれどもその夢は彼女の住む世界では叶わない夢だから、彼女の住みやすい世界を求めた……」

第一文目はそんな文章から始まっていた。なんだかとても不思議な始まり方をする本だと思った。そして同時に、この物語はきつと面白くは無いんだらうと悟った。読んでも何の特にもならないし、きつと娯楽の役にも立ちはしない。ただ、私は漠然とこの物語を読みきらなければならぬ。そんな気がしていた。

なんて皮肉なタイトルなんだろうか。この世界は徹底的に壊れている。誰にもその壊れた部分が分からないという点で、救いようの無いくらいに狂っている。世界の誰かが救いを求めてもそれに気付くのは一握りどころか針先に乗せられる程度の数しかおらず、世界の誰かが苦しんでいてもそれを理解することは動物の言語を理解するくらいに難しい。何もかもが不平等で区別され、何もかもが違うもの。そんな世界に、私は生きている。

出来ることなら引越してやりたいとも思う。私の年月は着実に

この詰まらない世界で消費されていつて、いつか無くなっていく。それならば違う世界にでも旅立って、例えばサバイバルとかして命の危機を感じながら過ごしていったほうが有意義なんじゃないんだろっか。

そう思っても、どうせこの世界から抜け出すことは出来ない。いや、別にそこまで現状を打開したいなんて思ってもいない。普通に両親の手によって育てられて、普通に友達と遊んだりして、普通に大人になっていく。それでも良いとも思う。

だから、この本を手にとったことは少しだけ後悔した。何か、別の世界への扉のような気がしたからだ。

——異常。

そんな誇張表現はどうだろう。私を引きずり込むには、十分だと思っ

四月。私は学年を二年に上げ、新しい学園生活のスタートを切った。その初日にこんな訳の分からないオカルト染みた本を手にとってしまうなんて、酷く損をした気分だった。

ただ、なんとなくだけど、こういうもの悪くないなんて、心にも無いことを思ったりした。

## 1話

私は優等生だ。

こう言つとまるで私がナルシストのように思えてくるかもしれないけど、実際そうなのだから他に言葉の表しようがない。成績優秀、運動神経抜群、容姿端麗…… かどうかは他人の評価なので分からな  
いが、そこまで酷い外見ではないことは自負しているし、それなりに身だしなみは整える。加えて学校では人徳もあり、今年度二年四組に属した私は委員長として推薦された。交流関係も悪くない証拠だ。

全ては毎日の努力の賜物だ。生まれて持った才能やその手の類のものと勘違いしてもらつては困る。これは神童のような天才的なものとは違う。私は自ら努力によつて得た地位であり、能力だ。

私が優等生であればあるほど、悦を手に入れることが出来る。両親に褒められて、友人に尊敬され、先生から好評を貰う。誰しもが望むことを私は実践しているだけの話だが、これを完遂できている人物は、少なくとも私のクラスにはいない。

何故なら、私はそれを遂行するために様々な努力をするからだ。ほかの人は、それをしない。

毎朝のランニングは欠かさない。早寝早起きは勿論のこと、自主学習など毎日の日課であり、予習復習は至極是当然の行い。親孝行のためにも、余った時間はバイトに費やす。非常に充実した生活と言えるだろう。不満は無い。

それは誰にだって出来ること。だけど、これを実際に遂行できる人間は本当に一握りしかない。私はたまに疑問に思う。難しいことじゃないのに、どうして皆出来ないのだろうか、と。

例えば私の前の席に座る女の子。教科書で正面を隠しているが、明らかに寝ている。こちらまで微かな寝息が聞こえてくるのだ。そんなに眠いなら夜早く眠れば良い。話に興味が無いなら勉強して興

味を持てば良いのだ。こんな簡単なことなのに、誰も出来やしないいや、だからこそ私は優等生なのだろうけれど。

そんなことを考えながら過ごしていると、四時間目の終わりを告げるチャイムが鳴った。一斉に教科書類を鞆に入れる摩擦音が聞こえてくる。何かがぶつんつ、と途切れたように生徒たちの話し声が立ちこめ、先ほどの静寂はどこかへ行ってしまった。

私の周りにも数人の生徒が集まってきた。

「やっと終わったよ。あの先生の話、聞いててホント詰まんない」

「だよー。あたしなんか半分以上寝てた気がする」

「机寄せとしてよ。購買行ってくる」

一人がそう言って教室から駆け出して行ったのを見送った。

学校は嫌いじゃない。人付き合いも嫌いじゃない。こういう、普段何も考えて無さそうな人も嫌いじゃない。むしろ、私が嫌いなのは先ほど授業をした社会科の教師のような、グダグダと自分の理論や見解を述べて、こっちが聞いてもないようなことを唐突に語り出す奴だ。真面目に聞いて良いのか聞かなくて良いのか分かったものじゃない。

さて、私もお弁当を取り出そう……と思って手を突っ込んだ鞆の中には、その感触が無い。

「まさかね……」

鞆ごと机の上に出すと、周りの子たちが何事かとこちらを見てきたが、無視して中身を漁る。しかしそこにあるのは無駄に色とりどりの教科書と、先ほどしまった筆箱だけ。毎朝母親が水色の巾着に詰めてくれる弁当箱が無い。

「うっそー。もしかして委員長、弁当忘れたの?」

「あたし、一年の頃からクラス一緒だけど、委員長が忘れ物してるところなんか初めてみた……」

実際初めてだ。目というか手を疑いたくなる。でも目で見てもその姿を確認出来ないところ、本当に忘れたらしい。今頃は母親の腹の中か。

「信じられないけど、忘れたみたい。私も購買部に行ってくるから待っててもらって良い？」

「良いよ別に。売り切れになってるかもしれないから早く行ってきな」

「ありがとう」

表情を綻ばせて礼を言い、教室をなるべく早足で飛び出した。

二年の教室から購買部までは三階から一階に降りる必要があるのに、地味に面倒臭い。途中で何人の生徒からか挨拶を貰ったり、私が弁当を忘れたことを珍しく見られたりしながら購買部に辿り着く生徒がごった返しているかと思っただが、意外と空いていた。

良い感じに貫禄の入った皺を作った購買のおばさんの前まで来て、ちらりと一瞥だけでメニューを確認した。

「すいません。この苺サンドとツナサンドを一つ」

人気のありそうなメニューだ。しかし意外にもガラスの向こうには、売れ残り確定だろうサンドイッチが静かに佇んでいる。買う人物が少ないのか他に人気商品があるのかは知らないが、最悪ショーケースの端に追いやられた青汁ジュースよりは売れているようだった。

「あら珍しいじゃない、あなたが購買利用するなんて。はい、四百円ね」

言われた分の小銭を彼女の皺だらけの掌に乗せた。私の手から硬貨四枚分の重量が消え去った代わり、サンドイッチ四枚分の重量が加算された。重くはないが、持つのに苦労する。財布をポケットにしまふのに少しだけ手こずった。

さて、早く帰ったほうがいいだろう。あの子たちを待たせたら申し訳ない。

そうして購買を背にした瞬間、真正面に女の子が立っていた。

「……つと」

ぶつかってしまいそうになるのを堪え、なんとか身体を横にずらした。随分と気配を感じさせない子だ。かなり長いだろうロングヘ

アーをポニーテールにして一つに纏められている。が、一切揺れない。身体が微動だにしていない。穴が開くほど購買の方を見つめているだけで、おばさんに声をかけたりはしない。実に奇妙な光景だ。「苺サンドとツナサンドは一見して人気商品のように見えますけど、実はそんなことはないんです。何せ一つ二百円もするもんですから、だったら一個百円の焼きそばパンとかおにぎりを買った方がお腹にもお財布にも経済的です。貧民学生の心理が良く表れたショークースの中身ですねこれは。因果ですよ因果」

なんか変なことを呟いていた。

「いやしかしですね、恐ろしいことにもう残っているのはその苺とツナサンドのほぼ二つしか残されていないという現実ですよ。一個二百円ですよ？ あたしの財布の中身を氷河期にでもする気なんですか？ でも選択肢なんて一つしかない。マジっすか」

しかも続けていた。そして一人で突っ込んでいた。第一印象は五月蠅いで決まりだろうか。

財布の中身とショークースの中を見比べて百面相みたいに表情をころころ変えて悩んでいる。見ていてなんだか吹き出しそうになるが、微妙に怖い。鬼気迫らんとする眼力で見比べているものだから、その視線を浴びている購買のおばさんが冷や汗を浮かべていた。

女の子の欲しがっているものは私が持っているものとまさに一致する。あの子の真似じゃないが、彼女とサンドイッチを見比べて、一つくらいあげようかどうか悩んだ。人間関係の好感度上昇イベントには全く関係ないだろうが、このままだとあの子の昼ごはんは無いだろう。経済面の圧迫は稀に空腹をも凌駕することを苦学生は知っている。

仕方ない、一つ分けてあげるか。そう思って一步を踏み出した時、私の傍を何かが横切った。

——目を疑った。

後姿は月の女神でも光臨したような後光を放っていてもおかしくないほどの美麗さ。男子生徒の服装が不似合いで、その無造作に流

れる灰色の髪の毛が一層ギャップを増していた。私の学校では髪の毛を染めるのは禁則だ。ということは、地毛なのだろうか。それとも何らかの原因で脱色？ どちらにせよ奇妙な風貌をしている。

あまりに整いすぎた顔立ちには悪寒さえ覚えるほど。しなやかな指先と腕は、女子と見間違えても責められない。

浮いている。私の見ている全ての色形が平面になり、彼のいるそこだけ立体になっているような存在感。臭いがする。空気が彼の纏うものに汚染され、私の鼻腔にその存在を知らせてくる。千本の針を突き刺されたかのような強烈な痛みを伴う香り。そんな気のせいだって分かっているのに、思わず鼻を摘まんだ。

「……」

立ち止まった。理由は無いはずだ。

「何か……匂うのかい？」

微笑している。背中を向けているのに分かる。良いものじゃない。品定めされ舐めまわされる様な視線を感じる。吸っていた空気が突然ヘドロになったような気がした。上手く呼吸が出来ないからだ。泥沼にでも嵌ったか。

「いいえ。少し鼻の調子がおかしかったから、押さえていただけよ」  
「そうか、それは良かったよ。ところで、そのサンドイッチ、彼女にあげないのかい？」

「え？」

見透かされている。私の被ったペルソナが、まるでガラスの仮面かのように見透かされている。

「人の親切はまるで割に合わないくじ引きみたいだと思わないかい？」

灰色の男は突然そんなことを語りだした。

「その親切が相手にとって良いものなのか悪いものなのか、実際に行動に移してみるまでは僕らには分からない。いざくじ引きを引いてみれば外れだったり当たりだったりするのと同じだ。ただ、くじ引きは作る側の趣向によって稀に『異端』<sup>イレギュラー</sup>が存在している場合があ

る」

「貴方、何を言ってるの？」

「ふふっ。君はス力を引くのか、それとも景品番号の書いていないクジを引いてしまうのか。そんなことを想像しながら過ごす一日も悪くない」

今度は認識できるほどの小さな苦笑を漏らすと、彼は靴音だけ残して去っていった。

コツ、コツ、コツ。

思わず生唾を飲み込んだ。一足遅れて悪寒が背すじを走る。自分の触れられたくない部分に、自分が最も嫌う奴が撫で上げてきたような生理的な嫌悪感。吐き気すら催す。

だがしかし、一体何がおかしかった？ 何故私はこんなにも気持ち悪がつてる？ 彼の言動一つ一つに温度が感じられなかった、なんて理論もへつたくれもない意見は自問自答の時点で封じ込める。もう一度、もう一度だけ彼のほうへ振り向けば答えが分かったかもしれない。けれど、その勇気も無ければ、意味も感じられなかった。乱れた思考を掻き消すために首を大きく左右に振る。正面に向き直れば、ポニーテールの少女がまだぶつぶつと何か呟いていた。手に持っているサンドイッチを見る。私はこれを彼女にあげる。そう、それでいい。何も他に考えることなんて無い。

そちらへもう一步踏み出して言った。

「貴女、そんなに欲しいならこれ」

硬くなった頬を精一杯引き上げて、持てる最大限の笑顔で彼女にサンドイッチを一つ差し出した。それを見た彼女は、瞳に星を輝かせて手を取った。

「ままままマジっすか？ いえ、お心が変わらぬうちに頂戴しますっ！ ひゃっほう！ これで今月の昼食代が二百円浮いた！ 日頃の行いが良いからですかね、因果ですね因果」

半ば私から奪い取るようにしてサンドイッチをかつぱらった。とんでもなく図々しい少女だと、第二印象で決め付けた。

どうやらくじ引きは吉と出たようだ。先ほどの灰色の男の言葉に惑わされているようで癪だが、彼女が喜んでくれたのだから別に良いと思う。

そんな勘違いを、まず私はしていた。

\*

気付けば緑雨。若葉は灰色の雲から降りしきる雨に濡らされて芽吹く。開花した花は赤く、まるで花卉の中心から鮮血が噴出しているよう。つつつ、と水滴が視線を横切るたびに、意味も無くそんなことを考える。

曇り空は滔々（とうとう）と雨を地に流し込む。傘を叩きつける水玉の音は激しく、持っている手に振動機付きの傘でも持っているかのような錯覚を覚えさせるほどの震えを作っていた。路面は鮮やかな灰色とはかけ離れた色に変色し、今や空の色よりも黒い。ザーッと排水溝に雨が流れ込む音が五月蠅かった。

登下校は普段、独りですることになっている。普段というのは、何かの誘いなどがあつた場合はそのまま付いていくこともあるということだ。

集団行動というものが私は好きではない。いや、好きではないというよりも『そうしたい』という感情があまり芽生えたことが無いと言った方が適切だろう。誰かが私を必要としてくれているならばすぐに駆けつけるが、私自身が他人を必要とすることは滅多に無い。一人で何でも出来たほうが良い。その訓練をしておけば、いざという時色々と便利だと思う。

だから、靴のが濡れたアスファルトを蹴る音は一つで十分。隣を歩く人の音は私には必要が無い。

なのに……何故彼は私の隣を笑って歩いているのか。ちらり、と私よりも背の高い彼の顔を横目に見上げる。相変わらず直視出来ない顔の造りをしている。微妙に悔しい。

すると彼は、私が見上げているのに気付いたのか、晴れ渡る空のような綺麗な笑顔を広げて「何？」と聞いてきた。

「それは私が問いたいわ……。一人で帰りたいんだけど、どうしてついできたの」

わざと突き放すような冷たい口調で言うが、対する彼は全く気にも留めていないようだ。私から視線を外して、遠くの空を見るように前を向いた。

「あの子に……結局サンドイッチはあげちゃったのかい？」

そんなことを聞くためにいちいちここまでついできたのだろうか。もしそうだとしたら、頬に一発お見舞いしてやってもいいくらい迷惑だ。

「あげたわよ。勿論全部じゃないけど」  
刹那だった。

彼の表情が一変し、瞬き一つ無い間に瞳がこちらにずっと向けられた。何も思考していないような、無垢で残酷な黒い色をしている。口元は筆で一文字を引いたように閉ざされて、どうやら私の言葉に驚いた様子だったが、度合いが異常だった。ホラー映画のワンシーンのような静寂が辺りを包み込み、化物と私だけの狂気の空間を作り出した。フィルムが回らない。どうにかしてくれ。こんなモノと真正面から向き合ったままなんて、正気じゃられない。

しかし、私はその瞳から杭で打たれたように目が離せない。自発的じゃない、相手が無理矢理杭を打ち込んできたという意の強迫観念に似た硬直が私を襲っていた。

「僕は」

異形の化物からとは思えない澄んだ声が彼の口から発せられた。

瞬間、私は映画のフィルムから解放された。

「僕はてつきり全部あげちゃったのかと思ったよ。君はとても良い人のように見えたから」

優しげに笑う。まるで明日ゲームソフトを買って貰えることを楽しみにしているような子どもの笑顔だ。

「幾らなんでもそこまでお人よしなわけないでしょ……」

「そうなのか。いや、そうだね。良く考えてみればそうだった」

本当にそんな下らないことで驚いたのか？ 甚だ疑問だったが、あえて何も言わなかった。

彼は軽快な笑い声を上げて、私の一步先を行った。顔がしかめっ面になっているのを感じながら、私も彼の後を付いていく。別段彼に用があるわけじゃない。私の行く道の先に彼がいるから、というなんともベタな理由だが、実際そうなのだからどうにかしろとか言われてもどうしようもない。

雨脚が強くなってきた。傘から伝わる振動がより一層強くなり、少しかだけ傘を持つ手に疲れが溜まってきた。心なしか、靴にまで染み込んだか、足の指先が冷たい気がする。激しい雨は肉眼で粒を見分けられるようになり、路上駐車している車のフロントガラスに突き刺さるようにして直滑降に滑って行っている。天からの警告かもしれない。

「そつえば、まだ自己紹介をしていなかったね」

前を歩く彼が立ち止まり、こちらを振り返った。何度見ても綺麗な顔が、ほんの少し水に濡れて更に良い男になっていた。それが無性に腹立たしかったのは秘密だ。

「私は――」

「ああいや、君の名前は良いんだ。僕は君のことを良く知っている。君に自己紹介されて、そのイメージを壊したくない。名前ってやつはどうにも人のイメージやその意味を左右するからね」

「面倒臭いわね。だったら早く名乗りなさい」

このタイプの人間は苦手だ。ため息をついて、ほんの少しだけ視線をずらした。

—— そつして、彼は姿を消した。

「……え？」

気付けば自分のものとは思えないほど間抜けな声を漏らしていた。目の前に広がったのは真つ直ぐで先の見えないコンクリートの一本

道。自分の眼球が合わせる遠近感がおかしくなってしまったのかと錯覚させるほどの一直線。端にある建造物はデッドスポットであることを抜きにしても、気配すらも感じられないほどの永久道路。その上には、黒猫一匹すら見当たらない。

誰もいなくなった。

「自己紹介をしよう。僕の名前は灰田純一。とある世界の、神さまだ」

背後から声がして、勢い良く振り返る。しかし、そこにも彼の姿は無い。

一体何が起きたのか、ほとんどシェイク状態にある脳みそで判断するのが難しかった代わり、視覚が捉えた光景をそのまま認識することが答えになるのだと理解した。

記憶と現実の中での間違い探し。二枚の絵を見比べて、私は相違点を探す。

言わなくなつて分かるだろう。一枚目の絵には一本道の上に男子生徒がいたのに対して、二枚目にはいない。誰だって見間違えようの無い答えだ。

それは、ありえることなのか？

絵の中なら可能でも、ここは三次元だ。逃げ出す場所も無ければ、まさか消されたなんてことは無いだろう。例えば百メートルを十秒以下で走れたところでこの現象は説明が付かない。ユニークでも利かせてマンホールの中に落ちたとも思えば良いのか？ そんな馬鹿げた答えなんて誰も必要としていない。

彼の笑い声は微かな響きすら残さずに雨に溶け、彼の姿は陽炎のような余韻すら残さずに消え去った。密室殺人は完了したとも言うべきなのだろうか。

冷や汗が玉になって吹き出し、首筋を伝っていった感触が自我を取り戻し、私を現実に取り戻す。

現実？ 現実って何だ。私がいたはずの日常なのか、それとも今みたいな非日常なのか。水と油は交わらないはずなのに、交わって

しまった瞬間のことを現実と呼ぶのだろうか？

灰色に濁った雨粒が睫毛の上から滴る。知らない間に傘を落としていた。あまりにも呆然とする出来事に我を失っていた。今ここで何が起こったのか、たった一つでも絶対を持って説明出来るだろうか。少なくとも私には出来ない。

ただ、一つだけ覚えていて確かなことがある。

「灰田、純一……」

彼の名前。

自分のことを『とある世界の神』と名乗った、痛々しい野郎。今どき、アニメに影響された中学生だってそんなこと言いやしないっていうのに、灰田は自分に与えられた称号を誇るかのように、そう名乗った。

\*

雨は止まない。窓を叩きつける雨音もそろそろ風流に感じつつあるが、室内にいと幾分か雨は憂鬱にさせてくれる。若葉の緑雨と言えどもここまで攻撃的に降られては参ってしまうだろう。恵みの雨も用法用量を守らないと毒になりそうだった。

帰宅後、私は自室で教科書を広げたまま、集中することも出来ずにぼーっと窓の外を眺めていた。リズム感の無い曇り空のオーケストラも、こうして聴いてみれば中々に素晴らしい。……そう感じるのは、気分がどうにももやもやしているからだろう。ただの現実逃避の手段でしか有り得ない。

「なんなのよ、あいつ……」

全ての原因はあの灰色の男、灰田純一にある。これはどうあがいても否定しようの無い事実だ。意識の外側に置こうとしても、怪奇現象のようにすぐに戻ってくる。彼に恨みも無ければ特別な感情だって無い。胸のうちに根を張るこのもやもや感が恋心だというのは可愛なものだが、残念ながら対極に位置していると言っても過言

じゃない感情だということは分かる。

苛立ちをどうすることも出来ずに、私はついに教科書をしまつてベッドの中に飛び込んだ。さっきまで座っていたからか、生温い温度が手の平から伝わった。

埋めた顔の中身、脳内はやはり落ち着かない。これほどに勉強に手がつかなかった日があつただろうか。青春を謳歌する学生たちが今だけ羨ましく感じる。私の悩みは正体不明かつ、下らなすぎた。まず何だあの灰色の髪の毛は。灰色の地毛なんて聞いたことが無い。茶髪金髪、許せて赤っぽい髪や白髪くらいはある。しかし、微妙に黒の残滓を感じさせる灰色なんて初めて見た。言えば光沢の無い銀髪なのだ彼は。地毛じゃない、という可能性もあるが、学校がそれを許しているとは思えない。まだ四月だから大目に見ているのだろうか。

それに『とある世界の神さま』という格好悪すぎる捨て台詞。思いつきだけで二の腕辺りがむず痒くなってくる。そして、そんな下らないものと分かつているのに気になって仕方が無い自分に一番腹が立つ。これじゃあまるで、ヒーローになりたいと将来を語った子どもの台詞を真に受けて、そわそわしている阿呆みたいだ。

「くしゅんっ」

……風邪でも引いたかしら。そう思い始めたら最後、だんだん体がだるくなってきた。たかだか数分雨に晒されたくらいで風邪を引くなんて、随分と貧弱になったものだ。早めに寝た方が良くかもしれない。

とりあえず適当にお風呂だけ済ませてしまおう。そう思ってベッドを立った時、唐突に携帯電話が鳴った。三秒のバイブレーション、メールだ。クラスの子だろうか。明日は土曜日だから、遊ぼうという旨のメールかもしれない。ピンク色の携帯を手にとって親指だけで画面を開いた。

……何？ 何でこいつからメールが？

無論、教えた覚えは記憶の片隅に散らばる残骸の欠片の一部分、なんていう遠い親戚の話をするような言葉を並べても見当たらない。間違いなく言った覚えはないし、携帯を見られたことすら無ければ、灰田は今日知り合ったばかりの男なのだ。少し気味が悪い。

メールを返して問いただしてやろうかと迷ったが、ここで送り返せば相手の思う壺かもしれない。子どもみたいだが、せめてもの抵抗で無視を決め込むことにした。そも、明日は土曜で休日。せつかくの休みをみすみす訳の分からない男のために費やす必要も無い。しかし。

グーグー。バイブレーターの音は定期的にやってくる。見なくても分かる。灰田だ。何のつもりか知らないが、五分おきくらいにメールを連発してくる。悪戯のつもりだとしたら、風邪気味の私にはかなり性質の悪いものだ。流石に腹が立ってきて、メールを開いた。『今、君の家の前にいる』

ぞくり、と悪い意味で鳥肌が立った。メリーさんの電話の文章。こんな典型的なホラータイプの悪戯に、どうしようもないくらい寒気を感じた。瞬間、部屋にある全てのものに目があるような気がしてきた。生きている。笑っている。どいつだ、どいつが私にこんなメールを送ってきているんだ。

メールの履歴は全てメリーさんの電話と同じ内容。『今、学校の前にいる』から始まり『今、タバコ屋の角のところにいる』が一通前のメール。タバコ屋は自宅から二分もしないところにある。

それよりも家の前にいるだって？ ふざけて貰っては困る。私の部屋のベランダから玄関は直接見下ろせる位置にある。今すぐにカーテンを開けて、本当に灰田がいるか確かめてやる。そしてもしもいなかったら、電話番号を聞きだして罵声を浴びせてやる。

そう思っているのに、足は一步も動かない。恐怖の茨に縛られて足が動かせない。少しでも足を上げれば、茨の棘に刺される。我慢

すれば良いんだ、我慢すればすぐに済む話。頭では分かっている、身体は命令を聞いてはくれない。

再三のメールの着信音。辛うじて指は動かせる。これは幸運じゃない、むしろ不幸だ。私にはそのメールを確かめる権利が与えられている。そしてこの状況で、私がそれを開かない道理も無ければ理由も無い。

『今、君の真正面にいる』

「——っ！」

首を思いっきり上に向けた。

「……そう、よね」

結果から言つて、そこに灰田の姿は無かった。いつもの私の部屋が、静かに佇んでいるだけ。興奮していたのは私だけで、家具には目なんてついていないし、生きてもない。メールを送ったのは灰田だ。今頃どこかで、私がこうしてうるたえている姿を想像して楽しんでいるのだろう。

こんなことに反応してしまうのは風邪気味だからだろう。高熱は幻覚や幻聴を発症させるとも言うし、少し危うい状態なのかもしれない。いつの間にか私を縛っていた茨は消え、自由になった足でベッドまで戻る。うつ伏せで布団の上に飛び込み、脱力した。今夜はお風呂にも入らないほうがいいかもしれない。明日朝一で病院へ行こう。

「やあ、グッドイブニング」

なんて、現実逃避できるほど、薄い存在じゃなかった。

「……ふざけないでよ」

「ふざける？ 僕はいつだって至って真面目さ。まあ性格上、僕が相手を馬鹿にしているような、まるで道化みたいな人間だとは言われたことはあるけれどね。否定はしないが心外だ。僕は——」

「黙りなさい！」

灰田の言葉を遮って、私は怒鳴り声を上げた。

「あたしは幽霊とかUMAとか、あと神様とか、そういうオカルテ

イックな存在はあまり好きじゃないの。今、あんたがどうやってこの部屋に入ってきたのか、詳細な説明を求めろわ」

「それは、常識的に考えてってことかい？」

「当たり前でしょ」

灰田は笑う。心底おかしいことを聞いたかのように、堪えられない笑いを漏らす。

「君はそれを知ってどうするんだい？ どうせ都合の良い答えしか受け入れられない癖に、わざわざ相手に喋らすのも面倒なもんだろ。今僕がここにいて、それだけにしか意味は無いんだよ」

「なら質問を変えるわ。——これは一体どういうこと」

ふむ、と灰田は息を鳴らした。私の椅子に勝手に座り、足を組んだ。

「初めて君を見たときから、君は他人のような気がしなかった」

「……何、告白でも始めるつもり？」

「そうだな、そこにある種の天才がいたでしょう」

全く関係の無い話を始めた。私の問いに答えるつもりどころか、聞く気も無いらしい。長くなりそうな予感がしたので、ベッドの上に背すじを伸ばして座った。

「天才とは常に万人の尊敬と憧憬の対象であり、そうであれと望まれるものだ。そして、それを目指す人間が無謀にもこの世界には溢れている。自分もああいう風になってみたい、ああいう風に尊敬されてみたい、と。息子が父の背中を追いかけるのとは根本的に次元の違うものだ」と理解していながら努力をして、そしてふと気付いた時には諦めているものだ。そう、憧憬とは常に『憧れ』でしかなく、それを目指してみようとは思っても『再現する』とはまた異なるものだ。そう思わないかい？」

「……何、言ってるの？」

耳の右から入って左に抜けるとは、意識していても起きることらしい。

「例えば年間に五十本のホームランを打つ選手がいたとして、ある

男の子がそれをキラキラとした眼差しで、ほんとうに無垢で純粋な気持ちでそれを目指し始める。だが、努力をして気付くことがある。五十本のホームランとは既に『天才』の領域であって、自分が目指すものではないことに。再現できる範囲のものではないことに。すると、男の子は次いで三十本のホームランを打とうと頑張り始める。それでも、野球選手としては結果として十二分なものだ。ただ、それは優秀な選手であって『天才』とは違う。本当に、優秀なただけだね」

「だから何よ。何の関係があつてその話をしてるのよ？」

「——君、五十本のホームランを打てると思わないか？」

そんなの、想像に容易い話だ。

「打てるわけ無いでしょ。たとえばあしが男の身体だったとしても、無理よ」

「……」

灰田はその返答にまたもや笑った。冷たい、切っ先の尖った氷みたいな表情で笑った。何か、自分の失態を嘲笑されたみたいで酷く気分を害した。ぶん殴ってやろうかと考えた矢先、灰田は言った。

「じゃあ、三十本は？」

三十本。野球は良く分らないが、灰田が『優秀』と呼んでいるのだから、結果としては申し分の無い数字なのだろう。だから私は、こう答えた。

「打てる」

「へえ、打てるんだ。三十本は優秀な選手がようやく出せる数字だよ？」

「でも打てるわ。そのくらいなら、努力すれば出来る」

「努力、ねえ……」

試すような目。無謀だと思っているのかもしれないが、優等生の私に言わせれば前言を撤回する必要は無い。私は努力の塊で出来ている。そのことを高く持ち上げるつもりは無いが、相手の前で謙遜してしまうほど低く扱うつもりもない。俗に『優秀』と呼ばれる人

物が出来ることなら、私はなんだって出来ると信じている。いや、実際にやってみせる。

そんな自信満々な私を確認してか、灰田は腰掛けていた椅子から立ち上がり、大袈裟っぽくため息をつく。一つ一つの動作がどうにも道化じみている。演じているというか、むしろ雰囲気を出しているような、ゆっくりとした、相手を焦らせる一挙一動。

「ははっ、いやあ、今日君に会いに来て良かった。本当に良かったよ。この瞬間を逃してしまったら、君は君じゃなくなっていたかもしれないしね」

「私が、私じゃない？」

舞台上。演劇の舞台に無理矢理つれてこられた私は、慣れてもないダンスを踊らされ、結果として醜態を晒す。

「君は……僕のことが悪い人間だと思うかい？」

「当たり前でしょ。勝手に意味の分からない方法で人の家に入りこんできて、仕舞いには訳の分からない話を始めて。私が警察を呼んでいないことがむしろ疑問に思えてくるわ」

「それはそうだね。君が僕を不快に思うのは当然の摂理。自分の領域の中に不適合因子が入り込めば嫌悪する。そんなのは飼いならされた熱帯魚だって同じ。まあ、最も彼らの場合は嫌悪どころか生死に関りそうだけど」

「同じ種族でも食い合うような連中と一緒にしないで」

「——人間がそうではないと言い切れない、なんてね。そうやって危険な発言をする君が楽しいよ」

そうして再び妙に濡れた笑い声を漏らす。

とてつもなく嫌な話だが、灰田は私との会話を心底楽しんでいるように思える。ふと技術士が作ったような酷く整った顔を見上げる。壊れたフランス人形を彷彿させる。心が無い無機物が何を見ているのか分からない。だけど、確かに何かを見ている。生まれてすぐの綺麗な身体だった頃よりもっと欲望的に変貌した瞳。不気味だった。「気持ち悪いなあ……」

私の考えていたことを代弁するように、灰田がそう口にした。

「君は実に気持ち悪い人間だ」

「なっ……」

その台詞を目の前の人間に言われることだけは、私自身が許せなかった。

「貴方、それは鏡で自分の姿を見てから発言して欲しいものね」

「そっくりそのまま返すよ、優等生さん」

「ふざけないで。私は……」

「君の本質が、気持ち悪くて堪らない」

こいつは、本当に――。

気付いてしまったら最後、喉奥から湧き上がる猛烈な嘔吐感に身を屈めた。口内に滲みこむように酸味が広がる。舌の奥と喉が大きく口を開ける。いらない、いらないと駄々を捏ねる子どものように胃袋からものを吐き出そうとする。思いつきり歯を食いしばった。

「僕は……君が欲しい。惚れたよ、どうしようもないくらい」

「ぶっ殺すわよ」

会ってまだ一日も経っていない相手に惚れただって。こんな訳の分からない野郎に好かれた私の気持ちも分かって欲しい。本気だろうが嘘だろうが、身の毛がよだつ。そこら辺の野良犬にでも食わせたい気分だ。

灰田は残念そうに肩を落とした。なんという嘘臭い演技。

「まあ、今すぐには言わないさ。君にだって心の準備が必要だろうし、僕にだって君を受け入れる準備が必要だ。もうほんの少しだけ戯れてから、答えを出してくれ」

「答えなんて今直ぐ言ってやるわ。帰って。そして二度と私の目の前に姿を現さないで」

「ははっ、風邪は万病の元だから、早めに治すと良いよ」

私の言うことなんて全く聞いていない。都合の良い奴だ。

それに私が言葉を返す前に、灰田はベランダの窓を開け放ち、そこからジャンプして飛び降りた。二階と言ってもそこまで高くは無

いから大きな怪我はしないだろうが、心臓に悪い。朝起きたら庭に男の死体があった、なんてことはないでしょうね。

窓に駆け寄って外を見る。知らない間に雨は止んでいた。濡れたテラスに乗らないように、首だけ外に出してみる。勿論、灰田はそこにはいなかった。昼間、私の目の前から突然消えた時のように、そこにいた痕跡や空気させ残さぬまま、姿を消した。

——外れクジだ。

しかも、私がクジの方で。クジは掴んでくれる主を選べない。主にとっては最高の当たりクジだったらしいが、当の私からすれば、史上最悪の手の平に乗ったと言っても過言じゃない。しかも、その当たりクジをマゾだかなんだか知らないが、大事に持っておいている。さつさと景品と交換して捨ててくれれば良いのに、なんて考えるのは、明らかに風邪のせいだ。

「……むかつく」

鼻を嚙ってベッドの中に入る。今日はあまり眠れそうに無い。

## 2話

これは夢だ。そう気付いたのは、この世界に身を置いて数十秒後の出来事。

ひたすらに理不尽な殺戮が、ここでは繰り返されている。死んだのは女の子だった。それも、まだ年端も行かない子ども。目を眼球が飛び出すんじゃないかという勢いで見開きながら、嗚咽交じりの悲鳴と咆哮を撒き散らす。悲鳴、と言うには少し相違が発生するかもしれない。響く高音は女性の嬌声とも似ている。身体が血を噴出す。それも彼女の声だとも言うのか。そして、夢の世界の視界を操作できない私は、それをひたすらに直視する。

知っている。私はこの光景を知っている。

『こわれたにんげんの、こわれたせかい』。この本の第一章を飾るシーンと一致している。女の子がひたすらに死ぬ世界。彼女の流した、涙か血かそれ以外の何かかで染められた真っ赤な鮮血世界。読んでいた時も気持ちの良いものでは無かったが、実際に音と映像を合わせられると、気が狂ってしまいそうだった。

「――」

ふと、女の子の声が止んだ。グギグギ、と機械が擦れるような音を立てながらこちらを向いた。真っ赤に染まった女の子の顔は、やはり真っ赤だ。しかし、引剥いた白目だけはしっかりとした色を主張し、私を貫くような視線で見ている。きつと洗い流してやれば、整った顔立ちで男子生徒にもてはやされたに違いない。傷ついた黒髪は、きつと愛しい人に撫でられるためにあつたに違いない。

「ねえ、飽きちゃったよ」

初めて聞いたその子の声は、驚くほど澄みわたっていた。一体この声が出せる喉のどこから先ほど上げていた咆哮が唸っているのか、想像もつかないような綺麗な声だった。

「もう、死ぬのに飽きちゃったよ。新しい遊びを探さなきゃ」

ぴちゃぴちゃ。もはや小さな池と化してしまった足場を女の子は手で探り始める。何もあるわけがない。文字通り水を掴むような絶望感しかない。見ていてやりきれなくなってくる。でも、夢の世界の私は肉体が無く、彼女に手を差し伸べてやることが出来ない。彼女の虚しい一人ごっこを止めてやることが出来ない。

「あなたが、憎いの」

私のことを言われたのかと思って身体を一瞬震わせたが、彼女の視線は依然として血の池に向いている。水面に写った自分の姿に向かって言っているらしい。

「わたしも、あなたが憎い。いらぬのに、どうしているの？」

「だって最初からいたんだもの。あなただってどうしてここにいるの？」

「わたしだって最初からここにいたの。早くいなくなつてよ」

「あなたこそいなくなつてよ。いらぬじゃない」

「あなただっていらぬじゃない」

繰り返される自虐。いや違う。実際に彼女は、水面に写る自分の存在を必要としていないように見える。女の子は拳を作り、勢い良く水面に振り落とした。血が弾け、形となっていた彼女がぐらぐらと揺れる。そうして揺れが収まった頃、一人の彼女は消えていた。

「——なんだ、わたしもいらぬじゃない」

そうして殺戮が再び繰り返される。目の前で彼女が笑う。笑いながら死んでいく。まるで、自分が死んでしまうことがこの上なく嬉しいことかのように、怖いくらいの満面の笑みで死ぬ。

狂気と狂喜は何が違うのだろう。

こういうものを見ると、私はそんなことを思うことがある。辞書で調べてみれば、「狂気」とは気が狂っていること。また、異常をきたした精神状態のことを言うらしく、「狂喜」とは異常なまでに喜ぶことだと言う。でも、狂喜とは狂うと言う言葉が使われているように、やはりどこか普遍的でない部分が存在するのだろうと思う。そしてそれは狂気ではないのだろうか。

彼女が喜んでいようがいまいが、どちらにせよ狂っている。

そして、それを目を逸らさず見届けることが出来る私も、きつとどこか――。

\*

夢見が最悪だったので、結局病院についたのは昼過ぎだった。そもそも起きたのが十時過ぎだ。普段なら休日でも八時には起きる私が、二時間以上の寝坊をした。風邪気味とは言え、どこかたるんでいるのかもしれない。

病院の名前は『森野医院』といって、名前の通り鬱蒼とした森林の中にある病院だ。空気が良いとかリラクゼーション効果があるだとか、適当な理由をつけて院長が建設を依頼したらしい。院内のデザインも院長の趣味で統一されている。そのせいだかなんだか知らないが、安らぎの空間だとかありがちな謳い文句をつけられて市の名所として雑誌に紹介されたことがある。

だが、私がそこに行くまでに一つ問題がある。

森の中というだけあって、その道のりが普通と比べると険しい。病人に対して安らぎの前の試練とでも言いたいのか、全く持って皮肉な場所に建てたものだと思う。

険しいというのは、一般的に見れば『道路が舗装されていない』ということを使うのだろうが、私にとっては何よりも『森』という存在自体が険しい。

優等生を取りたい私にとって、最も自虐すべき弱点がある。それが『虫』だ。

六本足の昆虫だろうが、それ以外の害虫だろうが、あの小さなフォルムに収まるグロテスクさといったら、言葉にしたら四百字詰め原稿用紙十枚は書けそうなほど。無数の網状の眼球に葉脈のような羽といい、何故あんなにも醜い形に神様は創造してしまったのか、敵ながら同情したい。

そんな悪魔の形相を浮かべる未知の生命体が蠢く森林。季節は春先で、ちょうど活動を始めた虫たちが空をひらひらと舞っている頃だ。私に死ねとも言うのか。むしろ、何故近場にこの病院しかないんだ。救急車とか入れないだろうここ。

頭の中で無限の愚痴をこぼしていると、目先に白い建物が現れた。清潔感漂うとは言い切れないツタの伸びた看板に『森野医院』と乱雑な筆書きで記されていた。この病院が名高いと言ってしまうのなら、大学病院には神でも住み着いていそうだ。

カランカランと引き戸の上に取り付けられた来客を知らせる鈴が鳴る。まるで風鈴のような音で、ここに来るといつも季節を間違えそうになる。

中はとんでもなく殺風景かつ自然的で、ログハウスと名付けるのが良いのではないだろうかと思う。だが、客足はちらほらと見え、伊達に雑誌で紹介されただけではないようだ。

医師の適当な診察と「風邪ですね」という定型化された言葉を頂戴し、診察はつつがなく終了。薬だけ貰った方が安上がりで良いと思うが、何故か毎回診察を受けてしまうのはどういう人間の性だろうか。

病院を出ると、昼間の温かな日差しがいやらしく迎えてくれた。眩しい。一度背伸びして、さあ帰ろうかと思った瞬間だった。

「先輩っ！ おはようございますっす！」

「……」

……誰？ というかもう昼だ。おはようございますじゃないだろう。

目の前に現れた少女は、後ろに一つ結びをするストレートポニーテールを揺らしてこちらに近づいてきた。服装は随分とラフなワンピースを着ている。手には小さなハンドバッグが握られており、今からデートにでも出かけるんじゃないかと思わせる風貌だった。

そして、この子にはどこか見覚えがあった。先輩、と呼ばれたからには間違いなく後輩なのだろうけれど、『先輩』と私を呼ぶ生徒

は覚えきれないほどにいる。顔合わせしたことは間違い無さそうだが、流石の私でも覚えていない。

「えっと……どちら様？」

なるべく失礼の無いように、下手に出つつそう訊いた。

「忘れちゃったんですか？ ほら、昨日に購買部でサンドイッチを分けて貰った貧困民ですよ。財布の中身がいつも千円以下しか無いことに定評のあるあたしですよ！」

「いや、そんなことは知らないわよ……」

が、なんだか記憶の靄がかかっていた部分が鮮明になってきた。

昨日と言えば、私が『神』を自称する痛い子と出会った日だが、そのきっかけがこの少女だったかもしれない。第一印象、五月蠅い。

「あ、その顔は思い出してくれましたか？ いやー、あたしも自分のことなんで薄々勘付いてはいたんですが、結構影薄いっすよね。別に前髪垂らしてるわけでも背後霊背負ってるわけでもないのに、あんまり人から気にされないんですよこれが。社交性とかもへその緒と一緒に切り取っちゃったのか微塵もありませんし、あ！ だからなんです、あたしが友達少ないの。因果です、因果！」

訂正は無い。第一印象は五月蠅いで不動の位置である。

それでもまだ彼女は止まらない。後ろから差している日差しよりも明るくいんじゃないかと思うくらい眩しい笑顔を輝かせて言葉は続く。

「あ、ちょっと引いてます？ 何だこのマシンガンみたいに話す奴は、超きめえとか思ってます？ すいません、あたし普段人と話すことがあんまり無いもんですから、いざ話し始めると背中 of 緊急停止ボタンでも押してもらわない限り止まれない超特急列車なんですよ。いや自分でも自重したいなーとか思ってるんですけど、なんだか止まったら死ぬような気がして。マグロかつつうのマジで。あ、不感症じゃないっす」

一人で突っ込んでいた。そしてそんなことは聞いてない。

昨日の昼休みに見た時も相当危ない子だとは思ってたが、まさかこ

こまで舌がぐるぐる回る子だとは思わなかった。マシンガンみたいに話す奴というのは、存外的を射ているかもしれない。

「ま、待って。少し落ち着きなさい。まず名前を覚えてくれない？」すると、私の注文が意外だったのか、一瞬呆けてからニコツと笑って応えた。

「白椿菊乃（のくはくはな）っていうんですよあたし。マジで不吉だと思いませんこれ。『椿』は首落ちでお見舞いにタブーだし、『菊』は習慣的に葬式にタブーですよこれ。文字面だけ見れば時代劇みたいで格好良いんですけどね、椿あるところに菊あり、みたいな感じで。意味も無いしむっちゃどうでもいいですけど」

自己紹介すらも長い。物凄く楽しそうだが、聞いているこっちは話半分が限界だ。

「そんな豆知識はどうでもいいんだけど、病院に行くならさっさと行ったほうが良いわよ。そろそろ混み始めるだろうし」

「ああいえいえ、本日は診察とかに来たわけじゃなくて、先輩に会いに来たんですよ」

「私に？ どうして？ っていうか、どうやって私がここにいて知ったの？」

「いやあ、一度ご自宅にお伺いしたんですがね、不在だったもんで親御さんに行き先を聞いたらここだって言うもんですから」

「私の家はどうやって知ったのよ」

「え？ いやそりゃあほら、あの日にストーキング……じゃなかった。お礼を言おうと思ってこっそりと後を付けていたんですよ」

「貴女、それ訂正する意味が無いわよ」

「おうっと！ 失態ですね。あたしも何でしたっけ、ケーワイ？ なんか猥談みたいで嫌ですねこの呼び名。まあそんな感じの奴になりたくなかったもんで。ほら、先輩昨日の帰り、男性の方と親しげに歩いていたもんですから」

その言葉に私は顔をしかめた。あの豪雨の放課後、灰田と共に帰宅していたところをこの白椿さんに見られたらしい。どうやら深読

みはしていないみたいだが、あまり私としては放っておける事態でもなかった。何せ、『親しげに』って。本気でぶっ殺すとまで言ってしまった奴に対して使う言葉じゃない。

「白椿さん……で、いいのよね。それは誤解よ。あいつとは昨日会ったばかりで、知り合いでも何でもないわ」

「ほー、そうなんですか。彼氏さんじゃないんですか」

「彼氏？ あれが彼氏だったら今頃私は棺桶の中にいるわ。生涯を死後の世界まで悔いてると思うわ。白椿さんも見たなら、なんだか彼おかしいように見えなかった？」

「やー、あたしそこまで視力良くないんで。千里眼とか持ってたらかいと鼻の穴の細部まで見られたんでしょうけど。あの灰色の方と面識があるならまだしも、遠くから見ているだけで人を判断できたら、今頃あたしは聖徳太子ですよー」

「聖徳太子は別にそんな能力持つてないわよ……」

「あはは、そうですよねー」

頬を掻いて、恥ずかしそうに笑った。

口が回るから頭が良いのかと思ったが、そうでもないようだ。と  
「うか良く分からない発言をする子だ。」

「……それで、私に用があるんじゃないの？」

「ああつ、そうでした！ お礼をしに来たんですよ。ちょうど財布の中身も親からの支給によって持ち直したことですし、何か奢りますよ先輩」

「いえ、申し出はありがたいんだけど、私今日風邪気味なのよ。だから外食はちよつと……」

「おうつと、これは気が回らなくてすいません。冷静に考えれば病院にいるんですから体調が悪いんですよ。先輩と会うことを意識しすぎていたせいで失念していました。因果ですね因果」

「ああ……うん、分かってくれたなら良いんだけど」

素直に頭を下げてくる点、礼儀正しいようだ。多少、いや相当五月蠅い点を除けば良い子なのかもしれない。そう考えると、なんだ

か折角外出用の服も着てきてくれたのに、申し訳無くなってくる。  
このまま返してしまうのは酷というものだろうか。

「じゃあ、明日遊びましょう先輩！」

私の手をぎゅっと握って、相変わらず目には星を携えながらそう  
言ってきた。前言撤回、どうやら随分と図々しいらしい。

「えっと、風邪が治ってたらなら良いわよ」

多分予定は無いはずだ。灰田との一件以来携帯をチェックしてい  
ないので何とも言えないが、何か連絡があったとしてもこちらを優  
先してやろう。

「マジすか！ 明日先輩の風邪が完治する確率は百パーセントなの  
で何の問題も無いですね。あたしが無駄に祈祷とかしておきます。  
やべっ、雨乞いの儀式と間違えちゃった！ とかやらないんで安心  
してください」

「雨降ったら完治しててもちよつと厳しいわよ……」

「おお……ますます気合が入りますね」

身体をわなわなと震わせながら、手の平を何かの形に作るうとし  
ている。いや、印とか関係ないと思う。馬鹿なのだろうか。それと  
もわざとなのだろうか。出来れば前者であって欲しい。

「じゃあ、明日連絡するんで、ケータイの番号とメアド教えてもら  
って良いですか？」

「ええ、別に構わないけど……」

ポケットの中からケータイを取り出して、白椿さんのものに赤外  
線送信する。白椿さんはうへへっ、と奇妙な笑い声を上げて、画面  
を舐めるよう見ていた。なんだか気持ちが悪い。

「じゃ、じゃああたしは儀式の準備をしに家へ引き上げます。先輩  
はしっかりと滋養なさって下さい。調子がちよつと良くなったから  
ってゲームとかやつちゃ駄目ですよ。意外とああいうのってぶり返  
すらしいですから」

「子どもじゃないんだからそんなことしないわよ。ゲームなんか持  
ってないし」

「なら本とか読まないで下さいよ。あ、そういうの防止するために、あたしが先輩の家まで着いていつて寝るまで見張るってのはどうでしょう。お粥くらいなら作れますよ。クソ不味いですけど」

不味いのか。せめて美味しいのなら考えたのに。

「い、いや、気持ちだけありがたく受け取っておくわ。貴女は早く帰ってその儀式とやらの準備をしたほうがきつと人生楽しく過ごせると思うの。私も」

「そうですね！　じゃあ、明日楽しみにしてます！」

ビシッと敬礼すると、マシンガンこと白椿さんはロケットのように走り去って行った。

\*

翌日、白椿さんの名前はマシンガンやロケットに加えて、ブラックホールという異名をつけざるを得なくなった。兵器から宇宙まで昇華していた。

地元にあるファストフード店に昼頃入った私たちは、微妙に客が込み合っていたのでそれぞれ違うレジで注文と会計を済ませたのだが、私の目の前に置かれた食料はどう見ても二人分では無かった。私は簡単に四百円程度で済ませられるものを頼んだというのに、白椿さんは暴飲暴食という言葉が帽子を投げて逃げ出す量を机の上に陳列させている。何気にサラダも忘れていないところに謙遜が感じられるが、正直見ていてこっちが吐き気を催してくる。

「そ、そんなに頼んで食べきれんの？」

彼女は目をキラキラさせながら頷いた。

「余裕ですよこんなの。腹八分目ってやつです。まあ、こんな頼んでから財布の中が万年氷河期なんでしょうけど」

「そう……お腹壊さないの？」

「大丈夫です。あたしの胃袋は基本的に全ての食物が別腹別腹、まるでゴミの分別みたいですけどそんな感じに果てしない銀河系が広

がつてるんですよこれが。俺の胃袋は宇宙だ、なんて屁でもないですよ」

「なら本物の胃袋には何が入るのよ」

「酸素ですね」

それは肺だろうにと突っ込みたかったが、きつと不毛に終わるだろうと推測してやめた。

白椿さんが一つ目のハンバーガーに口をつけながら、上目遣いに言った。

「それにしても先輩も貧欲ですよー。折角あたしが奢りますよーって言ってるのに、そんなセツトメニューだけなんて。あ、今からアイスクリーム一品追加頼んでおきましょうか？ いや、太るのを懸念しているのなら大丈夫ですって。先輩スタイル良いですし、運動していれば万事解決ですよ。っていうか、毎朝ランニングとかしちやってるんじゃないんですかその肉体美。服の上からでも分かりますよ。因果ですな因果」

食べている時すらも口の減らない娘だ。

私も話していても食が進まない、ハンバーガーに口をつける。

ジャンクフードはあまり好きな類ではないが、味が良いというのは保証できる。かなり久々に食べたけど、中々悪くない。

私が口をつけるのと同時に、白椿さんの手からハンバーガーの姿が消え、代わりにストローを吸っていた。左手にはテリヤキがある。口がべたべたになるのを怖がっているのか、どこから食べようか迷っているように見える。

「ところで……貴女のその『因果ですな因果』って口癖、随分と特殊だけど、何かの真似？」

「あたしのですかあ？ いや、別に誰の真似でも無くオリジナルなんですけどね。これでも自分で変だなとは思ってるんですよこれが。まず高校生の分際で因果なんて言葉やたらと使う時点でおかしいじゃないですか。まあ、簡単に言ってしまうとあたし、運命って言葉がむっちゃ嫌いなんですよ。それに、やっぱあたしには乙女チ

ツクなものは合わないなあと思って。ほら、ちよつと背伸びし始めた素人作家が『概念』とか『観念』とかやたらと使って格好よさアピールしちゃってるのと同じようなもんですよ。だからあたしも『因果』とか使っちゃってるんです。実はあんま意味分かってないんですけどね」

「まあたまに聞くわねそれ。中高生とかがやるって」

「ですよー。こう、『ハンバーガーが二段であることを誰が決め付けた。それは観念だ』とか言ってメガマツク生み出したみたいなあ、こんな話してたらメガマツク食べなくなってますね？ 因果ですね因果」

「ならないわよ……。特に、今の貴女の状況を見てたらね」

「あははー」

申し訳無さそうに頭をかくて、テリヤキマツクバーガーを胃袋に放り込む。ちなみに三つ目である。同時に頼んであるジュースが、ずずずつ、と音を立て始めていた。

「先輩って、運命とか信じちゃうタイプ……なわけじゃないですよー」

言葉の尻を切らせて、何故か嬉々としていた表情が沈み込んだ。

そして、私が何か答える前に、どこか遠くを見るような目で語り始める。

「いや分かってるんですよ。最近の女子コーセーってやつも随分とませちゃったもんで、運命を感じちゃったのっ！ とか言ってみて下さいよ。周りの人たちにクソみたいに笑われますよ。先輩もどちらかというと運命なんてクソ食らえって感じですかね。いやあたしも運命なんか信じちゃいないんですよ。原因も何も無いのに、そうなる運命だったなんて。あまりに理不尽すぎてアイスティー吹いちゃいますよホント」

この白椿菊乃という娘、もしかしたら物凄い子なのかもしれない。一見してどこにでもいそうなギャルのような雰囲気をもっていた。いるにも関わらず、何か深いものを感じる。それが何なのかは定かではないが、恐らくは『因果』という言葉を感じた、『運命』とい

う言葉を乱用するようになった原因があるのだろう。ニコニコと笑ってはいるが、そのくせ腹の中で何を抱えているのか検討も付かない。ある意味では灰田と同じく掴めない少女だ。

とは言え、金曜日の下らないことに律儀にお礼をしてくれるというのは素直に嬉しい話で、私は相手に失礼な念を抱いたな、と思って彼女の話に微笑んでおいた。

「あー、笑ったってことは凶星ですか煮干ですか一番星ですか。いいんですよー、あたしも先輩も同類、『夢見ない乙女軍団』ってチーム就任ですよ。あれですかね、今流行のノンレム睡眠ってやつですかね。あー、別に関係ないですけどね。ところで、先輩、箸……じゃないや、手が進んでませんね。あれですか、ダイエット中ですか？」

しかし本当に口の止まらない少女である。これだけ一斉射撃を受け続けていれば手を動かすタイミングも見逃してしまふというものだ。こちらはハンバーガーセットしか頼んでいないというのに、白椿さんに完食のタイミングを越されそうである。

「手が進んでいないんじゃないかと貴女が早すぎるだけよ。もっと良く噛まないで消化に悪いわよ？ …… というか貴女、噛んでる？」

「いやですねー先輩、そんな早食い選手権に出るわけじゃないんですから。最悪ご飯の旨みが口内全体に広がる程度にはしてますよ。」

あー、考えてみるとあれって微妙じゃないですか？ 糖がデンプンに変わるんだしたっけ？ 逆でしたっけ。まあどちらでもいいんですけど、なんかそんなのをくちやくちや噛んでるって正直あまり気分が良いものじゃないですよ、いえあたしのにですけど」

「気持ち分らないでもないけれど、それを言ったら貴女が今食べてるそのジャンクフードだって変わらないじゃない」

「これは別物です。ああやって『ご飯は噛んだ方が良い』なんてことを植えつけてくれやがりましたからに、こんなことを思ってしまうませませさんになっちゃってるんですよあたしは。因果ですね因果」

最後のサラダに手を付け始めながら、得意の口癖を披露する。私もちょうど最後の一口を放り込んだところだが……白椿さんのサラダを見て不覚にも釘付けになる。菜食主義ではないが、あの類のサラダセットというのはどうにも魅力がある。緑黄色野菜とはよく言ったものだ。……赤も混じってはいるが。

「あー、なんですかその視線は。エロいつすね先輩。なんかこう、王の座を虎視眈々と狙うあまり王女を快樂の底に引きずりこんで拉致監禁調教して奈落の底に叩き落そうとしているどつかの鬼畜の目ですよそれは。サラダが欲しいならそう言ってくればいいじゃないですかー。奢りがいがあるってもんです」

「……………私が今まで生きてきた中で嫌な表現ランキング一位をぶつちぎりで冠したわ」

「えへへ、お褒めの言葉光荣です」

不名誉過ぎて非常に遺憾だ。というかただの変態じゃないそれ。そして褒めてない。色々言いたい事はあったが、本人が嬉しそうにするので黙っておいた。

「じゃあ強情な先輩のために一個だけ質問しますから、それに答えてくれたらサラダ奢ります。ちなみにサラダいらないから質問に答えないっていうのは却下の方向で」

「というよりもさっきから質問攻め……に、あっているわけではないのよね……。なんだか貴女と話していると混乱するわ」

「それはご愛嬌ってことで妥協してくださいませ先輩。……で、質問なんですけど」

白椿さんは財布を持って立ち上がる。中々に中身が入ってそうなその分厚さに目を囚われた、その時だった。

視線を、眼球丸ごとと一緒に持ってかれた。その先には白椿さんの視線。二つが一本の鉄線によって繋がれたかのように動かせない。その間に雫が垂れるのを待っている。

何が起きたという問いに対して、何も起きていないと答える。誰がという問いに対して、白椿菊乃と答える。何処だという問いに対

して、ファストフード店と答える。なら、何がおかしいのかという問いに対しては、全てと答えるだろう。

——いや待て。何もおかしくなんてない。ただ見つめられているだけじゃない。落ち着け、頭を必死に冷やせ、疑心暗鬼になるな。相手はそう、白椿さんじゃない。

繋がれた鉄線に雫が落ちた途端、周りの喧騒が激しく耳になだれ込んできた。今までそれを失っていたことに気付き、思わず生唾を飲み込んだ。しかし、対する彼女は依然としてニコニコと笑みを浮かべたままだ。そう、何も起きてはいない。風邪のせいだろうか。胸奥にヘドロが詰まったかのように呼吸が辛い。吐き出したいと胃の辺りが喚いている。黙っている、私は白椿さんと話をしているんだ。

「——彼と、何時何処で何経由でどんな状況でどういった理由で何で放課後に何を話しながらどんな感じに帰ったんですか？」

「……は？」

私が話しているのは、白椿さん？

質問が破綻している。どう答えるというのか。

何時何処で何経由でどんな状況でどういった理由で何で放課後に何を話しながらどんな感じに。並べ立てられた言葉が暴力のように襲い掛かり、私はその拳を姿として認識出来ない。一語一語が思考を殴り、ガクガクと揺さぶられる脳味噌に三半規管が悲鳴を上げる。混乱じゃない。破綻だ。

「……うつ」

急激な吐き気を催した。急いで口に手を当て、嘔吐感を押さえ込んだ。

「先輩？先輩！ど、どうしたんですか、物凄い顔が青いですよ。何かハンバーガーの中におかしなものが入ってましたか？ちよ、何か飲み物貰ってきます！」

視界から白椿さんの姿が消える。

何故消えたのか。いや、そんなことを問っている暇など無いはず

だ。

問題は、『何故私はこんな風になっているのか』にある。それ以外に興味を持つな。彼女の質問が破綻していたことなんて眼中に置かず、私がそれについて過剰な疑問を持ったことも眼中に置かず、冷静になれ。何故、こんなことを考えている。

私の中で何かが破綻した。積み上げた積み木が誰かに蹴飛ばされたように思考が纏まらない。あと一つか二つ積み木の欠片が足りない。私はそれを必死になって暗中模索している。暗い場所にいるわけじゃない。ただ、偽物のピースが多すぎてどれが本物なのか分からない。誰だ、知らない間に形の合わない別物を入れたのは。向かい先の無い苛立ちが無意味に重なり、一つの積み木を形成しようとしていた。

そのうち白椿さんが店員から貰っただろう水の入ったコップを持つて戻ってきた。最初それが何なのか分からなかったが、やっこのことでそちらに意識を向けて飲んだ。冷たい感覚が喉を嚥下していく。体中の細胞に伝わり、ようやくクールダウンした。

白椿さんは私の背をさすりながら、心配そうな顔でこちらを覗き込んできた。

「せ、先輩。やっぱり病みあがりだから調子がまだ……」

「いえ、大丈夫よ……なんとか持ち直したから。ごめんなさいね、折角誘って貰ったのに。一応熱も下がったし身体の調子も戻ったと思ったのだけれど、油断したわ」

「そうですね、因果ですね因果。無理して誘ったあたしが言うのも何ですけど、早く帰って薬を飲んだほうがいいかもしれません」

「ええ。でも、風邪薬くらい常備していれば良かったわ……」

そう思っ て視線を落とすと、視界が少し暗くなった。それが人の影だと気付いて見上げると、そいつはそこにいた。

「――薬ならここにあるぞ」

黒い巨塔とでも言うべきだろうか。

「名乗りが必要そうな顔をしているな。俺の名は黒住儀軋<sup>くろずみぎきし</sup>。何、薬

を持っているというのは嘘じゃない。俺は嘘が無期懲役の次に嫌いだし、嘘つきは泥棒になる前に殺してしまいたいくらい嫌いだ。――無論これに嘘は無いが、主に悪意で出来ている」

そこには圧倒的な高さと、圧倒的な悪意を持った黒ずくめの男が無表情に笑っていた。

\*

目の前に差し出されたカプセルを見た。

私が昨日森野医院で貰ってきた薬と外見は完全に一致する。しかし、カプセル薬なんてものは見た目どれもこれも同じだ。信用するためには残り九十九パーセントは足りない。

黒住という男はこう続けていた。

「俺は薬剤師の免許を持っているわけでもないし、医者でもない。だが、貴様が何故そのように苦しんでいるのか、その理由は分かる。これに嘘は無い。もう一度言おう、これら全てに虚言は含まれていないが、主に悪意で出来ている。故に現在貴様には俺を信用するか否かの選択の余地があり、俺はどちらに転んでもそれは結果なのだと見過ごそう。無論、これにも嘘は無い」

言葉遊びのメリーゴーランドに乗っているような気分だった。嘘は無いと繰り返す癖に、悪意だ悪意だと強調する。やけに大人びたピエロが同席しているようだ。

黒住儀軌。苗字の方はいいとして、とんでもなくネーミングセンスを疑う名前の男。とにかく服装が黒一色で統一されており、ミラーサングラスをかけて髪の毛をガチガチに固めていた。年齢は声と態度から察するに私より少し、いや大分年上なのかもしれないが、おじさんと呼ぶにはまだ若々しい部分があった。そして何よりも、この身長。私も低い方ではないが、勿論男性には劣る。とは言え、ここまで見下されるとあまり良い気分はしない。百八十五は間違いない。私は何だか負けたような気分になって、無理矢理気丈に

振舞った。

「医者でもない、薬剤師でもない。……突然の親切を無下にしてしまつううで悪いんですが、拾ったものは食べない主義の人間なので」  
「聡明な判断だな。人の偽善は受け取っても、人の悪意は受け取らないのが人間の面白いところだ。まあ、元より俺も貴様がこれを手取るとは毛ほども思つてなかった」

笑っている。口元は一文字に引かれたままだが、私には分かる。  
こいつは私が薬を手を取らなかったことを、子どもみたいに楽しんでいる。

——これが、悪意ね。

劣悪ではない。そういった卑劣猥劣と呼ばれる不純の悪ではなく、子どもが力エルに爆竹を仕込むような純粹な悪意。私がこの薬を受け取った姿を想像して『そのまま突然化学反応が起きて死ねば良い』とか『喉に詰まらせてむせないだろうか』とか『私が薬を受け取つてすぐ捨てたりしないだろうか』のような、まるで悪意の無い純粹な悪意がそこに介在していたように思える。最悪でも、親切心なんというのはまるで無かった。半ば好奇心に似たようなもので動いたと表現するのが最も型にはまる。

多分、目の前の薬は本物だろう。信用は出来ないが分かる。だって、嘘は無いらしいんだから。

「これは単なる口実だ。俺はその娘に用事がある」

そう言つて白椿さんのほうを値踏みするような視線で見る。先ほどもそうだったが、身長が高いために軽く見下されているような気分になる。それもサングラスをかけているために効力が倍増。さながら感じの悪いヤクザといったところか。

白椿さんはそれに気圧されることもなく、いつもの調子でそれに答える。

「あたしにですか？ どーでもいいですけど、先輩が苦しんでるタイミングで話しかけてくるつても嫌なおじさんですね。狙ったんですか？ これはいやらしい因果ですね」

「何、突然俺みたいな人間が話しかけてきても貴様等は変質者が何かと勘違いして、会談は終了。俺の行動原理は常に悪意が主だが、それでも自分に不利な状況に働くことなどそうしない。それは貴様も承知だろう？ 白椿」

黒住が白椿さんの名前を呼んだ。瞬間、白椿さんの形相が歪む。何故かは分からないが、今にも爆発しそうな言葉の溜め方をしている。横槍程度に彼女に助け舟を出すでしょう。

「貴方、白椿さんとはこういった関係で？」

するとあの嫌な視線がこちらへ向く。

「どういった関係でもない。というより、貴様にはそもそも語る必要が……」

ミラーサングラスの奥が見えるんじゃないかというほど強く睨まれる。気持ちが悪い。どうしてこうも、私の周りにはこういう奴が集まり始めたのか……。

黒住は考え込むようにふむ、と息を鳴らした。どこか灰田に似ているのかもしれない。だから気持ち悪いのか。納得がいった。

「撤回だ。こいつと俺に因果関係は無い。つまり、知り合いではない。俺が一方的に知っているだけだ」

「……ストーカー？」

「あのような下劣、屑同然と同様に扱うな。ストーカーなら、こんなにこのこと姿を現すわけが無いだろう」

「確かに無いわね。そうね……貴方はどちらかといえばストーカーを追うような立場に近い雰囲気があるわ。不動、炯眼、無関心、追求、そして何かの悟り。警察に近いのかしら？」

「ふん。それは買い被り過ぎだ。それを言うなら貴様のほうが余程に危険な眼をしている。『値踏みしている人間を値踏みする』など、正気の沙汰ではあるまい」

「……」

睨みつけられたら睨み返すのは正気の沙汰だろう。それが私だ。ミラーサングラスの奥、全くこちらからは窺えない眼光が微かに

光った気がした。それがこちらに向けられている間、白椿さんがため息と同時に言葉を吐く。

「それで、そのストーカーさんがあたしに何の用ですか？ 生憎あたしたち暇じゃないんですけど。先輩を家へ帰さないといけなないで」

白椿さんがこの男から逃げようとしている。声の質から一目瞭然、本当に微かだが揺れている。何故なのかはやっぱり私には分からないが、息を荒げるのを必死に抑えている。緊張感や、焦りからくるものだ。そして黒住は恐らくそれに気付いている。

黒住は彼女を凝視する。先ほど私を値踏みしたような汚らしい目、それでいてどこか諦観していて、なのに出来損ないのアヒルの子がいつか更正するのを待ちわびている親のような目。複雑だった。

気付けば店内の人たちが皆してこちらを遠目に見ていた。自分だけはそこに関つてはいけないという危険信号を細胞が出しているのに、そこから目を離せない。人間の怖いもの見たさという性か。しかし、向けられている側としてはあまり良いものじゃない。奇異の目、まるで自分たちと違うものを見ている彼ら。その標的となっている私は、吐き気が出るほどの嫌悪感に晒される。オレンジジュースをこつそりと飲み干して、一息つく。

黙殺されている。ここは一体何処だっただろうか、とそんなもの思考するまでも無い。だが、ただっ広い草原の中心にでも立たされたかのようにここは静かだった。誰も話さない、黙殺する。

勿論それを破ったのは黒住だった。

「……つまらないな。こうして出会えた偶然には感謝したいが、期待した俺が馬鹿だったようだ。最悪怯えては悪いと思ってミラーサングラスまで用意したというのにこの体たらく。見るに耐えないな。そちらのだるそうな娘のほうが『それらしい』というものだ」

「……っ!？」

それらしい？ 私がどのようにそれらしいのだろう。

がたん、と激しい音を立てて白椿さんが立ち上がった。私が『そ

う」言われたことが心外だというように黒住を睨みつけた。

「あんた、何なんですか？ 小娘だからって馬鹿にしてるんですか？ 誰だか知らないけど、あんた何かにあたしのことをどうのこうの言われる筋合いとか無いんですけど」

「怒るな。怒声は好かない。そこには不純な悪意しか含まれていないからな」

「悪意悪意うつさいですね。あんたに向けるものが悪意だろうが善だろうが関係ないっすね。突然現れて何なんですか？ 人に言うだけ言って、謝るつもりもないんですか。最低ですね」

啖呵を切ったように、白椿さんの怒声が飛ぶ。止まらない、完全に白椿さんは怒っているようだ。

それを見て小さく舌打ちした。この男、また楽しんでる。白椿さんの口からはどこからそんなレパートリーが出てくるんだってほどに悪口が飛び出し、もはや相手の容貌など関係の無いところまで及び、黒住はそれを何食わぬ顔で聞き流している。既に彼女には興味が失せたのか、視界に収めてもいなかった。

とりあえず彼女を止めるために、会話に割って入る。

「少し落ち着きなさい白椿さん。この男には何を言っても無駄よ。冷静になりなさい」

出来る限り冷たく言い放つ。案の定、白椿さんはビクツと親に叱られた子どものように身を縮こまらせ、しぶしぶといった様子で椅子に座りなおした。

「申し訳ない。怒りに狂った人間をあやすスキルは備わっていないものでな」

「別に構いやしないわ。今の貴方とは違った種類の威圧だから、やってることは変わらないもの」

「ほう、嫌味か。風邪で体力を失っているはずなのに、大した度胸だ。どうだ、俺と共に世界に蔓延る屑共を片っ端から豚箱に叩き込んでみないか？」

「そのためには貴方をまず叩き込まないといけなさそうね。でも、

難易度が高そうだから止めておくわ。というわけで、お断りよ」

「それは残念だ。勿論これに嘘は無いが、主に悪意で出来ている」  
つまりは残念なんじゃない。馬鹿らしい。

ふっ、と何かの糸が切れる。次第に視線の人だかりが疎らになり、そのうち全く感じなくなつた。日常に戻ってきた、らしい。いつ違う場所に飛ばされたのかは分からないが、少なくとも『ここ』じゃなかったのだろう。今はこの喧騒すらも温かみを感じる。しっかりとした日常に包まれている安心感がある。ようやく肩の力を抜いて私はジュースのカップに残った溶けた氷を啜った。

「……温いな」

突然、黒住がそんなことを言う。いつまでも立っていて疲れないのだろうかと思いつながら、私はそれに返す言葉を考えていたが、先に白椿さんに越された。

「良いじゃないですか、温くて。あたしはこっちのほうが好きです」

「そうか。いや、そうだろうな」

何か疎外されたような気分。温いって何がだろう。私が感じた喧騒の温度を、白椿さんたちも感じたのだろうか。だとしたらとんでもない感性だ。まともじゃない。

「さて――」

黒住がサングラスの向こうから一度だけ私を一瞥したような気がした。

「目的も果たしたことだ。俺はこの辺りでお暇させて貰おうか。この場、黒住儀軋が拝借。再び縁が訪れないことをお互い祈ろうではないか」

黒い巨塔は静かな地響きを起こしながら身を翻し、私たちが何かを言う前に去って行った。

### 3話

枕の下に本を入れた覚えは無かった。しかし、皮肉にも本日瞼の裏に写っているのは『これわれたにんげんの、こわれたせかい』第二章。不可解な鮮血世界から景色は一転し、モノクロが埋め尽くす白と黒の世界。昔のテレビみたいな映像が視界に広がる。やけに鮮明に見えていることから、電波は良好なようだった。

相変わらず世界には何も無い。死ぬことを繰り返していた少女だけがそこに佇み、確かな色を持っていた。肌色、ほんのりと申し訳程度にピンク、瞳の鮮やかな白黒。きつとほかにも彼女を構成する色はあるのだろうけれど、私が夢の中で持つ肉眼では、せいぜいその程度だった。

女の子はその空間から、それぞれ白色の人形と、黒色の人形を作り出した。粘土を捏ねるようにして形を整え、やがて満足したように目の前に置いた。その出来は異常とも呼べるほど精巧で、一見して普通の人間と何ら見間違いが無い。製作の工程をほぼぶっ飛ばしたようにも思える。作ったというより、生まれたという表現が正しい工程だった。

白色の人形にはドレスのようなものを着せた。何色かは分からないが、きつと白か黒だろう。花嫁のような姿に変身した人形。嬉しそうに頬を染めることこそは無いが、その姿は何だか様になっている。

黒色の人形にはタキシードを着せた。造られた肉体美の上にきつちりと着込んだタキシードが、より一層男らしさを感じさせる。さながら花嫁を守るナイトといったところか。

二つの人形、そして女の子は互いに手を取り合った。三つで円を作るように手を握り、まるでそれ以外の全てを拒絶しているようにも見える。外から見ている私には、もう彼女らの表情は窺い知ることが出来なくなった。

しかし、微かだが話し声は聞こえる。お父さんとか、お母さんとか。おままごとでもしているようだ。死ぬことに飽きた女の子は次いでおままごとを始めらしい。白の人形がお母さん、黒の人形がお父さん、そして自身は娘、きつとそんな設定だろう。一見すれば微笑ましい光景だが、私から見ればただの狂気ではない。

人形を相手に笑っている女の子。それも、本当に楽しそうに笑う。自分は目の前の人形から生まれた本当の子どもだとも言いたいのか、その姿が実に様になっている。そんなわけなのに、やけに型に嵌っているのだ。彼女は人形の子ども。その人形は彼女が生み出したというのだ。まるで神。神が世界を創生したくせに、人は神を想像した。そんなあつてないような矛盾がそこにある。

いつまでも終わらないおままごと。何をしているのかは知ることが出来ない。料理をしているのかもしれない。ゲームをしているのかもしれない。

ただ分かることは、このおままごとには、終わりが見えない。それだけだった。

\*

茜色の時間。鞆に本を詰めた私は教室に一人。窓の外からは部活動に励む生徒の声が聞こえてくる。普通授業を終えて、放課後の時間を読書で楽しんでいた私は、外からの光がオレンジ色に染まってきたところで帰る仕度を始めていた。

いついかなる時でも優等生を気取っておきたい私にとって、部活動に所属しないのは矛盾が発生してそうだと思うだろう。だが、元より何か一つのことには固執することはそれこそオールラウンダーたる優等生の意思に反する。私は常に全てのジャンルにおいて平均値以上の結果を出せば、特別何かが長けている必要は無いのだ。部活動なんかに打ち込んでしまえば勉強は少し疎かになるだろうし、日常の時間を失うことも私にとっては痛手になりかねない。スポー

ツも文化系も、趣味程度で良い。

風邪も先日すっかり休養したおかげか、ほぼ完治していた。油断は出来ないが、もうぶり返すようなことはないだろう。今日はそういうわけで、先日の埋め合わせのために白椿さんと待ち合わせをしていた。一学年と二学年は授業終了時刻が微妙にずれているので、教室で時間を潰していた次第だ。別にそんなことをしなくていいと断ったのだが、何度も頼み込んでくるその姿勢に三顧の礼も脱帽、私は彼女にとつてとんでもない特待生のようなようだった。故に無碍に断るのもどうかと、結局その場に流された私である。

鞆に教科書類を詰め込み、白椿さんを待つ。既に窓の外は夕暮れ色に染まり、見ている人を憂鬱な気分させてくれる。これが一種の黄昏というやつであろう。ほどよく光沢の塗られた卓上が曙光を反射させて、自分が恋愛ドラマのヒロインにでもなったような錯覚を覚えた。

「ああそうだね、夕焼けをバックにするのはいつだって感動の一シーンだ。けれどもそれは物語の中の話であって、そんなロマンチックな状況を作り出す人間なんて滅多にいやしない。曙光は常にラストに相応しいが、現状を見ればそれはまだあまりに早い」

そんな私をやけに透き通った声が迎えてくれた。

どうせそんなことだろうと、私は思っていた。

夕日をバックにして現れるのは白椿さんだったはずなのに、その机に腰掛けていたのは灰田純一だった。場違いな灰色の髪の毛が夕日に照らされて、妖しい色をかもしだしていた。当然のことであるが、私は彼の姿を見て激しい嫌悪感を覚える。この出所不明の感情は何なのだろうと毎度のように思う。吐き気などないのに、腐った空気が肺に溜まっているような不快感を身体の中に感じる。

「このままあんたに会えなければどれほど良い一日だったか。彼女を恨みたいわ」

思わずため息が出る。白椿さんを恨んでもどうしようもないことだが、灰田に怒りをぶつけたところでもっとどうしようもない。

「うん？ 彼女とは誰のことだい？」

「後輩の子よ……って、何であんたにそんなこと言わなきゃいけないのよ」

「や、年下に少し興味があるだけさ。気にしないで詳細を話してくれ」

「意味が分からないわね……。ほら、あんたも見なかった？ 先週の金曜日、購買部の前にいた子よ」

灰田がわざとらしく手を叩く。

「ああ、うん、思い出した。さらに言うならば、放課後僕らの後をつけていた子だね」

「気付いていたの？ 知ってたなら教えなさいよ、相変わらずいやらしいわね」

「別に僕は気にならなかったからね。まあ、視線は良いものじゃあなかったけれど。で、その子と待ち合わせでもしているのかい？」

「そうよ。悪い？」

「ふうん。珍しいね、君が他人のために自分の時間を使うなんて。いや、これは僕が持った先入観なのかもしれないけど」

こいつは私の何を知って語っているのか。まるで私が自己中心的な人間みたいじゃないか。

「失礼ね……。まあどうでもいいけど。そうね、私も会って三日足らずな後輩のたけに行動しているなんて信じられないけれど……。なんていうのかしら、あの子はどういう風に見ても嫌な感じがしないのよ。引つ張られるというかなんというか、付き合って得があるかどうかは分からないけれど、間違いなく損はしないだろうって気になるわ。そういう損得無しにしても可愛い子だしね」

「ほう。『君が自分を蔑ろにしてもまで付き合っても良い子』か。興味が出てきたよ」

「蔑ろとは何よ。まるで私があの子のために自分をダメにしてるみたいじゃない」

「決して間違いではないだろう？」

言われて考える。

確かに、白椿さんが今日の放課後に私を誘ったのはほんの少し前のことだ。私はそれが無ければ家に帰って予習でもしていたはず。この予定が狂ったことによって人生が変わったりしないが、私は現にこうして会うはずのなかった灰田と会話している。何かが変わったことは否定できない。

「些細な問題でしょう。私だって自分の立てたスケジュール通りに動かないといけない機械人間じゃないわ。人間には大切な融通ってものがあるでしょう」

「そうだね、臨機応変に行かなきゃならないね」

「そういうわけだから、あんたはさっさと出て行ってくれない？ もうすぐ彼女が来るだろうし、正直あんたとあの子を会わせたくないのよ」

すると灰田は不思議そうに微笑み、居座る気満々で机に腰掛けた。灰色の髪がどこからか吹いてきた見知らぬ風に揺れていた。

「名前だけでも教えてくれても良いじゃないか。友の友は友、敵の味方は敵さ。知っておきたい」

敵の味方は敵、全くもってその通りだ。前者はどうか知らないが、私はそれで帰ってくれるなら、とその名前を口にした。

「白椿菊乃さん。元気な子よ」

「——ほう」

瞬間、私は激しい後悔に駆られる。灰田が醜悪に表情を歪めたからだ。その事象が滑稽で滑稽で仕方が無く、面白い玩具を見つけて、更にはそれをどう悪戯に活用してやろうかと考える。クズだ。こいつは真正正銘のクズだ。

夕焼けの世界に一人の道化が降り立った。私はそれを看過することが出来ない。灰田が言葉を発するまで、私は腹の底で衝動に耐えていた。

「……君は、黒住という奴に出会わなかったかい？」

「——な」

何故、という言葉が飲み込まれる。その様子を悟ってか、灰田は今度こそ最悪の笑みを浮かべた。自然と奥歯に力が入り、鼓動が荒くなる。何故こうもこいつは簡単に私を乱してくるんだ。自分という存在をくすぐられているような気がして、酷く気色悪い。

「音楽家……」

その笑みを浮かべたまま、突然灰田はそう呟くように言った。

「ある一人の音楽家がいたでしょう。ある日、彼は音楽に対して一切の興味を失ってしまった。彼はそのことに疑問を抱いた。自分はこんなんじゃないかった、もっと出来る人間だったはずだと。でも、この疑問はあまりにおかしいことだと思わないかい？」

「また訳の分からない話を……」

「そう。彼は音楽家でありながら音楽家である自分に疑問を持ったんだ。彼が本当に音楽家なら、そんな疑問は持たないはずなのに、彼は分からなくなった。苦悩したんだ」

質問してきたはずなのに、私の答えなど聞くも毛頭も無さそうに続ける。私も諦めて黙って耳を傾けた。

「これに哲学的思考は必要ない。もっと単純な答えが用意されているんだよ」

分かる。

「——スランプ、ね」

灰田は満足そうに頷いた。

「その通り。音楽家だろうがスポーツ選手だろうが画家だろうが、スペシャリストには誰にも訪れる壁。彼はそのことを理解していたはずなのに、自分が音楽を出来ないことに疑問を持った。これは、異常だ」

その瞬間から彼は音楽家を止めた事になる。完全な自己否定だ。

「だから、彼は音楽家じゃなかった。音楽家なら分かることが彼にはわからなかったんだ。ほかの何かだったのさ。そうして嘘の自分を壊して、彼は世界の外へと飛び出す。地獄か天国かは分からない。ただ、彼にとって真の世界であることには間違いがないだろう」

何の話をしているのかは良く分からない。ただ、前よりは耳に響く。

軽い頭痛を感じながら、私は灰田に言った。

「それと……今までの話が何の関係があるのよ」

「『異常者』だよ。異常者は、みんなこういう思考を取る。何故なら彼らは自己というものが酷く薄く、そして局地的にどぎつい色で塗られている。人間の本質をパラダイムシフトする、ある種の天才だ」

「だから何なのよ……また自分が天才で、どっかの世界の神だつてことを強調したいの？」

「さあね。それくらい、自分で見つけたほうが楽しいんじゃないか？」

「殴るわよあんた」

ここまで意味の分からないことを語っておきながら、真相は私任せらしい。

「僕は君が知つての通りいやらしい人間だからね。ギャルとかが嫌いそうな遠まわしな表現しかない。短気な女の子がいたら殴られるかもしれないくらいにね」

「納得するわ。私が短気じゃなくて良かったわね」

「当然君がそんな人物じゃないと知っているからこんな嫌な人間に僕はなっているんだけどね。クイズは嫌いかい？」

私はそれに対して首を横に振った。否定の意であるが、クイズは嫌いじゃないという肯定の意でもある。

「なら良い。今の会話は全て問題文だとして。答えの指定が無い、ね」

「嫌な話ね。一足す一が問題で、イコールが無ければそれを足して二にしているのか分からないって感じがしら」

「そうだね。まあその場合の問題文には大抵イコールの記号はついていないと思うけど」

思い出してみればそうだったかもしれない。

彼はにっこりと、今度は優しい微笑を返して言う。

「また来るよ。君と話するのは楽しい。僕にとって最高の時間だ」  
「私にとっては情眠の次くらいに無駄な時間だけだね」

灰田は身を翻して教室のドアへと歩を進める。そして、最後に予想通り振り返る。

暁光の世界にただ一人、灰色の髪の毛を持った男がいた。名前を灰田純一。背が高く、言動の全てが私の感情をかき乱し、全ての言語が理解不能。綺麗な彼と汚い彼と、まるで白と黒を混ぜ合わせたような色の人物。

——だが違えてはならない。たとえ定義が『白と黒の混ざった色』  
だとしても、だからどうしたというのだろうか。『灰色』は『灰色』  
でしかないということ。

「また明日、会えると良いね」  
足音遠く、彼は去って行った。

\*

状況は最悪を極めて極悪だった。

どうでも良い話であるが、最も悪いを超えるのが極めて悪いというのもおかしい話である。

説明をすれば、灰田純一と別れて数分もしないで白椿さんは教室に現れ、そしてそのまま二日連続のハンバーガーとしゃれ込んでいた。昨日は朝に行ったのでそれほどでもなかったが、夜中は客も多く、窓から見える夜景は闇に光が沈んでいるようで、なんとも美麗なものである。自然のものが最も美しいと日本人は間違いなく感じているのだろうけれど、人工物も馬鹿に出来たものではないと思う。実際にクリスマスツリーなどは完璧に人工物であるが、あれも金をかければ大自然に匹敵するような感嘆の声を上げさせることも可能だろう。勿論、それと今の夜景を比べるには程度が相当低いが。

そんなものもあいまって、更には異分子がここに存在していた。

女子高生二人に囲まれて、真っ黒な服を着た男が一人。場違いにもほどがある。

「いやなんだ、俺もこういうハーレム状態に興味が無いわけではない。無論これに嘘は無いが、主に行動は悪意で出来ている」

「結局嫌がらせなんじゃないですか」

「ふむ。言われてみればそうとも言っな」

「そうとしか言いませんから」

黒住に白椿さんが毒づいた。ジュースを啜りながら明らかに嫌そうな顔をしている。どう考えても黒住の思惑通りとしか言えない状況であった。

店に到着したはいいが、一体どういう縁あつてか、サングラスと黒のニット帽を被った、まさに昨日とほとんど変わらない服装の黒住儀軌と出くわした。彼は偶然立ち寄ったと言っているが、彼の素性からして悪意で動いていたに違いない。つまるところ、嫌がらせに近い。

話を聞いていてわかったことがある。黒住は昨日、白椿さんのことを一方的に知っていると云ったが、それは白椿さんの両親と面識があつたかららしい。それを追っていた黒住が、この店で見知った顔に声をかけてみた、という経路だった。両親の話をされると終始表情を濁す白椿さんであつたが、恐らく家庭の事情の問題であまり深く関つて欲しくないのだらうと思う。黒住もそれを察してか、途中からその手の話題は持ちかけていない。

時計を見た。現在時刻、七時半過ぎ。どうやら学校を出てからここに来て一時間は暇を潰したらしい。その成果は何も実っていないがたまにはこんな蛇足な時間も良いだらう。ファミリーストランだったら途中退場を食らつてもおかしくはないだが、ファストフード店というものは店員が店内をうろつかない為にそういったことが無いらしい。学生が勉強するにもってこいの場所だとは聞いていたが、そういった理由からなのかもしれない。

ジャンクフード特有のなんともいえない臭いと、黒住の注文した

コーヒーの香りが混ざり合って、ここに煙草の臭さが加わったら嘔吐感を催しかねない臭いが鼻につく。その中でも依然として二人は不毛な会話を続けていた。

「大体何を血迷ったら二日連続で、しかも二度目が夕食でこんなとこに来ようと思うんですか。ていうかコーヒーしか頼んでないじゃないですか。ジャンクを食べましようよジャンクを。ところで先輩、ジャンクって考えてみればゴミじゃないですか。こんなに手軽で美味しいハンバーガーをジャンクと呼ぶのにはあたし少し意見の相違が発生するんですけど、どう思います？」

「……私に聞かないで。栄養的にはゴミみたいなものなんだから、別に表現としては間違っていないでしょ」

ふむ、と何に納得したのか、白椿さんは視線をハンバーガーに落としてなにやら考え込む。と、そこで黒住のほうで横槍を入れてきた。

「しかし、外国のジャンクフードは本当にゴミのようだったぞ。構成こそ変わらないが、日本のものよりもカロリーが数倍以上も高いだが、パン、つまり炭水化物、肉、つまりエネルギー、レタス、つまりビタミンや繊維、量の比率に差はあれど、バランス的にはそこまで悪くないと思うのは俺だけか」

「そういう貴方みたいな考え方をする人がいるから、そういう構成にしているんですよ。実際にどうかは知らないし、とりあえず私に聞かないで」

「ふん、ゴミですら気を使う時代か。下らないものになったものだ」

「下らないのはこの会話の方よ。白椿さんじゃないけれど、貴方本当に何をしに来たの？」

「問いに答える前に言うが、会話自体は下らなくは無い。日常の会話とはコミュニケーションを取るに置いて最重要な努力だ。会話の放棄は相手にも雰囲気にも悪い。無駄なことに興味を持つことは若者に必要な事だ。『死や生』について思考するのが思春期というが、それも束の間の出来事。可能性の出来事や、当面の問題でない出来

事に興味を示さないのは愚人のやることだ」

随分と真つ当なことを言うものだから、思わず言葉を失ってしまった。白椿さんはもはや会話することに飽きたのか、食にかぶりついている。相変わらず食欲旺盛らしい。

「調子に乗るが、物事に興味を無くすということは、人間的な死に限りなく近い。人間の世界に娯楽というエンターテインメントが生まれたのは、まさに人が生きるための糧を供給したと言っても過言ではない。俺たちは何かを蹴落としても、楽しさを覚えるための努力をしなければならぬ。それを忘れた人間は、そうだな、『自我が崩壊している』と言っても良いだろう。精神論ではない、単純に自分を失っているという意味合いでだ」

「自我が崩壊している、ね。まあ随分言ってくれたようで悪いけど、私もそこまで言うほど物事に無関心な人間じゃないわ。それに私は貴方が何故ここにいるのかに興味がある、優先順位の問題よ」

「ふん、俺がここにいる理由か。下らない、それこそ本当に下らない。これは偶然だ、何ら因果の無い事象だ」

「それにしてもあまりに出来すぎているような気がするけれどね……」

クラスメイトでもない人物と連日出くわすという確率は限りなく低い。それも同じ場所でだ。加えて相手が黒住なだけに、疑心を抱かざるを得ない。

と、そこに白椿さんがジュースをすすする音と共に口を挟んできた。「何ら因果の無い、ですか。それは危険ですよ、おじさん」

「おじ………ふん、どうでもいい。何が危険だというのだ」

黒住の反応に満足したのか、彼女はジュースを置いて、口元を少し吊り上げた。

「因果が適応されない物事ってのはですね、全てが『運命』なんですよ。ねえ、この言葉って物凄い綺麗に聞こえますけど、反面かなり危ない感じがしません？ 怖いじゃないですか、今まで全く関係してこなかった赤の他人が、ある瞬間を境に自分の人生の一つのピ

「スになるんですよ。つまり、あたしたちとおじさんがここで二度目の出会いを果たしたことによって、何かが起きるんですよ。それが何なのかは知りませんが、こうしてあたしがこんな訳の分からない話をしている時点で、当初の目的と違ってきてるんですから」

確かに、黒住が現れなければこのような会話はありえなかったし、もつと静かに、いや騒がしく過ごせていたはずである。これはある意味黒住に向けての皮肉でもあるのだろう。

「ですけどね、あたしはこう考えているんですよ。いやホントませませんでごめんなさい。あたしだってこんな論理的人間になんかなりたくなかったんですけどね、家が家なだけに、因果ですよ因果。ま、言うなれば、『おじさんと再開したことは、一度目に出会ってしまったことが原因』なんですよ。——ねえ、そうでしょう、『黒住』さん」

ぐつ、と私の喉が詰まった。

これは、見たことがある。昨日、私が吐き気を催した時と同じ瞳だ。相手の首を絞めるような無言の圧殺。三人称を変えたのは、もはやその二次産物でしかない。

その瞬間、私は自分の周りが果てしなく狂っていると思った。いや、気付いた。

白椿さんも……普通じゃ無い？

因果マシガンが見せる表情は時折人間のそれとは異なる。似て非なるものだが、灰田のそれに似ている。疑心の種に水が撒かれて

いる。

黒住においては言うことはないし、灰田など思考することすら無駄に等しい。私の目の前にいるこいつらは、一体何なのだろうか。

黒住は腕を組んだままだとっしりと構え、白椿さんを見返した。

「それは俺の答えられる問いではない。俺の発言には一切の嘘は無く、故に悪意で出来ている。ここにいるのは紛れも無い偶然であるが、そうだな、貴様の言うとおり、『そう定められていたと知っていたから、ここにいる』という見解も決して外れではないのかもしれない

れない。これは予知ではない、どこでどう動いていようが、『結局は俺と貴様は出くわす運命』だったと、そう言いたいのだろうか?」  
その言葉を聞いた白椿さんは、がっくりとわざとらしく肩を落としてため息を吐く。瞬間、私の肩の荷も、どさつと音を立てて落ちたように思える。

「やつぱ嫌がらせなんじゃないですか。……仕方ないですね、もう起こってしまったことはもはや水に流せないなので、今日の夕食代金全部おじさんの奢りで許しますよ。因果ですよ因果」

「なら少しは自重しろ。一体いくつ目だ、そのハンバーガー」

「まだ序の口ですよ。あと十個は胃袋に入れて帰ります。や、無理だと思えますけどね、流石に」

そう言うのと、完全に食べきったトレイを戻して再びカウンターへと歩いていった。

そのタイミングを見計らったように、黒住が机に開いたスペースに肘を置いて、こちらを向いた。

「白椿菊乃とはどういう経路で知り合った」

「彼女とはたまたま学校の購買部で出くわして、何か物欲しそうに右往左往していたところを奢ってあげたのよ。その恩かどうか知らないけど、なんだか気に入られたみたい」

最近はずいぶんメールが鳴り止まない。私が予習で忙しいことなんて頭の片隅にも無いんだろう。迷惑はしていないが、メールが途切れない相手というのも珍しく感じる。

「珍しいこともあるものだ。俺も白椿の家とは長い付き合いがあるが、彼女の家はまさに天涯孤独と言えるような仕事をしているために、友人というのはただの一人たりとも見たことが無かったものだな」

「……一人も?」

私はその誇大とも言える表現の仕方に首をかしげた。

「そう、ただの一人もだ。そもそも彼女の両親が夫婦でしか動かないのでな、社会というものに順応した例がない<sup>ためし</sup>」

「そ、そんなことってあるの？ 幾らなんでも、小さい頃の、ほら小学校とかで知り合った人とか沢山いるでしょう？」

「いいない。彼女は確かに他の人間と変わらず人生を送ってきてはいが、圧倒的に『他の人物』が欠損している」

「でも待つて。そうして学校に通っていたら、嫌でも他人と関わりを持つようになるでしょう？ そんなことは不可能じゃない？」

「何、友人の一人も作らず学校生活を過ごす程度、不可能なことでは無いだろう。それに、貴様もこの話を聞いてなんとなく勘付いているんじゃないのか。たった一人、偶然購買部で出会った、今まで接点の欠片も無かった人間に、これだけ依存している。彼女の中には、『もしかしたら』が存在しているのだろうな」

もしかしたら、私と友達になれるかもしれない、そういうことなのだろうか。

「……だとしたら、彼女は友達が欲しいんでしょう。だったらどうして今まで……」

「それは家庭の事情に絡む」

「両親ね。一体何の仕事をしているの？」

その問いに黒住は言いよどむわけでもなく口を閉ざす。それ以上はプライバシーに関るからだろうか、雰囲気から答えてくれる気は無いと私は悟った。

黒住の言うことに嘘は無い。これは彼の信条云々関係が無くそう思う。ただ、あれだけ気さくな彼女が友人の一人もいないというのは常識的に考えづらいものがある。物語の中の王女様だって、もう少し友人が多いはずだ。一体どういうことなんだろう。

ただ、そんな彼女が——友人を作れることをどうしてか許されていない彼女が——私の家に来て、一緒に食事を取らないかと誘った。一体そこにどんな想いがあったのかは分からない。ただ、それは恐ろしいほどの罪悪感と勇気に満ちていたのではないだろうか。どんな規制があったのかは察せ無いが、親の意志に反した事になるはずだ。それも、十五年も守ってきたものを。

その対象となった私はどういう風にして彼女と接することが最善なのだろうか。彼女の家のことを考えてあえて突き放すのも手ではあるけど、それではあまりに不憫に思える。だからといってこのまま付き合うというのは危険な気がした。そういう意味でも、黒住の語らない彼女の両親の職業が気になって仕方が無い。

「俺は刑事をしている」

黒住が唐突に口を開いた。私は思考を一旦中断して、彼のほうを見据える。未だ半分は残っているだろうコーヒーを嚙っていた。

「言うまでも無いと思うが、公務員ではない。完全に私企業の方だ。所謂『何でも屋』、『自由業』、『便利屋』といったところか。まあそうは言っても一般人から金を貰って依頼を受けるわけではない。自分が選択して色々とする、そんな感じだ」

それは一見してフリーターとか、そういうもののように思えたが、黒住の指すところは恐らく違うのだろう。

「しかし、俺は生まれてこの方、刑事以外をしたことがない。それは何故か分かるか？」

ゆっくりと思考を巡らす。そして出た答えは単純なものだった。

「ずっと……追いつけてる人がいる」

ことん、とコーヒーのカップが机に置かれる音が響く。正解のチャイムのつもりなのだろうか。

「頭の良い人間は理解が早くて助かるな。ただし、それだけでは『刑事』と名乗る必要は無い」

彼の言わんとするところは理解できる。ただ人を追うだけなら、それに順応する職を肩書きにする必要は無い。ならどうして刑事と名乗る必要があるのか。

そうだ、つまり、彼の職業には職業としての意味がある。

酷く面白い結論だった。思わず頬がゆっくりと笑みの形を作っているのが自分でも分かる。

「——貴方は、正義を振りかざす悪意なのね」

私の不可解な笑みに釣られてか、彼もサングラスに良く似合う微

笑を返した。

「悪意とは常に自分以外の気に食わない人間に向かって向けられるものだ。そこには同族意識は発生しない。故に、『悪意とは悪意に向けられるもの』であるパターンが多い。つまり、俺が追っている人間がどのような人物なのか」

「そう、まるで貴方みたいな人間ということね」

間髪いれずにそう言う。が、それが的を射てなかったのか、黒住は酷く不快そうな顔をして首を横に振る。

「それは良い過ぎだ。奴らと俺はまるで違う。例えば天才というジャンルに属する人間がいたとして、スポーツの天才と文学の天才ではまるで話が違う。加えて俺は天才でも何でもないのだから、そもそも生きている世界が違う」

天才。

そのワードに敏感に反応してしまう私がいた。灰田の話をふいに思い出し、そのせいか私の意志とは無関係に、黒住にこう訊いていた。

「ねえ、天才って、どういうものだと思う？」

「——異常者の別名だ」

凍りついた。比喻じゃなく、凍りついた。

黒住は、灰田と同じ事を語ろうとしていることに気付いた。止めさせないといけない。その理論は気持ちの悪いクズだけが使うものだ。

「社会不適合者。この世界のどこにも居場所の無い、異常者の別名だ」

「それが……貴方にとっての天才？」

「そうだ。天才とは才に恵まれた人間のことを言うのではない。才を与えられたがために、人の世界で生きていくことに満足出来なくなった馬鹿のことを言う」

人間の本質をパラダイムシフトしたがために、満足出来なくなった。

途端に黒住の巨軀が酷く恐ろしいものに思えてきた。こいつは何を知っている。白椿さんの事情どころの騒ぎじゃない。私を取り巻くものの真相を知っている。私が巻き込まれている渦を作っている人物を、そのサングラスの向こう側から見極めている。

言葉を発しようとしているのに、私の口からは虚しく空気が漏れるだけだった。言いたいことは沢山あるのに、何かに威圧されてものが言えない。

「お待たせしましたーってあれ、どうしたんですか先輩、顔が青いですよ？　もしかしてこのおっさんに何か言われたんですか？」

「だ、大丈夫よ。コーヒーの香りが少しきつかっただけ」

ようやく出た声は意外にもすっと出てきた。溜めていたものが吐き出されて、少しだけ楽になる。

「それは初耳だ。ならば俺はこの辺りで仕事に戻るとしよう。貴様が苦しんでいる姿を肴にしながらコーヒーを飲み続けるほど悪趣味でもないからな」

黒住が逃げる。追わなければならないのに、身体が全く言うことを聞かない。いや、正確には脳かもしれない。追おうとすら思っていない。

「白椿とせいぜい仲良くしてやれ。決して道を踏み外さない程度にな」

「おじさん、あんた、先輩と何を話していたんですか」

白椿さんが憤怒の形相で黒住の黒服を掴んだ。

「俺の仕事を語ってやっただけだ」

「ならどうしてあたしの名前が出てくるんですか。関係ないでしょう？」

「——それは、本気で言っているのか？」

「……っ」

飛び跳ねるようにして黒住から離れる。掴まれた部分を黒住は整えて、私を一瞥、特に何も伝える気も無いらしく、そのまま身を翻していった。

「先輩、あたしたちも帰りましょう。雰囲気を書しました」

「ついでに気分も害したみたいね。まあいいわ、追加注文したものはどうするの？」

「持ち帰って夜食にでも」

「太るわよ？」

「因果ですね」

その抑揚の無い声が、酷く寂しく感じた。

\*

一つ足音が増えて、一つ消える。

耳を澄ませば数多に聞こえてくる足音を、そのようにロマンチックに聞くことは不可能だ。都会の夜は深い。吸い込まれるような大自然の深さとは違う、飲み込まれるような深さ、それが都会の夜の風景だ。煌びやかな装飾が絶えず闇を照らし、人の賑わう声が静寂を決定的に妨げる。私はそんな空気が嫌いではない。大勢の中にと、自分が孤独に感じないからだ。逆に大人数いるからこそ孤独を感じる人間もいるだろうが、私にとってはそんなもの贅沢だと思う。人の中にいるんだから、もっと直接的に捉えて良いはずだ。

しかしそんな中、ただ一人だけ孤立した人間がいた。

先ほどからいつもの元気はどこへ行ったのか、仏頂面で私の隣を歩く白椿さん。その表情は無に近い。

先ほど黒住に聞いた話を思い出す。

白椿さんの家庭事情、友人を作れない状況と、そうなった原因である両親の仕事。まだ見えていない部分は多いが、やはり彼女も普通の人間でないことは確かなようだった。しかし、そこまで白椿さんの事情を把握している黒住のことを、白椿さんが知らないのはどうにも腑に落ちない。親だけの付き合いということと納得はしているが、黒住はその娘、彼女を確実に見たことがあるはずである。それが遙か昔の出来事であって、白椿さんが忘れているというのなら

ばそれもありなのだろうが、それならば逆もまた然り、黒住が成長した彼女を覚えているというのもおかしい話である。

横を歩く彼女を盗み見る。高校生で順当な顔立ち、薄く化粧ものっており、髪の毛は後ろにひとつに纏められている。傍から見ればどこにでもいそうな少女だ。そんな少女がこれだけの事情を抱え込んでいることに、私はどうしてか……。

——ドンッ。

誰かと私の肩がぶつかった。そのまま無視して歩こうとしたが、後ろから肩を掴まれる。

「おいおいネーチャン、人にぶつかっておいて謝りもしないで行くのは礼儀がなつてねえんじゃねえのか？」

どこにでもいそうな不良がガンをつけてきた。うざったらしいと思いつつも、肩を掴む力が予想以上なことに動けなくなり、私はやむをえなく頭を下げる。

「すいません」

「ああ？ すいませんじゃねえだろうが、どうしてくれんだよ、今ので服の紐が解れちゃったじゃねえか？」

見てみると、確かにぶつかった部分が解れていた。嫌な造りをしている洋服であるとは思うが、恐らく自分で千切ったのだろう。乱雑にされた形跡が見るに耐えないほどはつきりと分かる。見れば、白椿さんが虚構を射殺するような視線でこちらを見ていた。

「おにーさん、どうでもいいんですけど、今あたし機嫌が超悪いんですよ。あたしの先輩にこれ以上迷惑かけたら、ただで済ましませんよ。つーかそれ自分で千切ったんでしょう？ 誰が見ても一目瞭然じゃないですか。それに、謝る謝らないって問題だったら、おにーさんのほうこそ謝ってくださいよ。あんたみたいなクソ汚らしい存在が触れて良い人じゃないんですよ、先輩は」

本気で腹が立っているようだ。声に怒声がたまに混じっている。不良が私の肩を離して白椿さんに掴みかかる。

「テメー舐めてんのか？ ガキがでしゃばってんじゃねえよ」

「ガキはどっちですか。ああもつ、予定がぐちゃぐちゃ。どうしてもくれるんですか、あたしが先輩に嫌われたら、ねえ、本当にどうしてくれるんですか？　今すぐ消えてくれればあたしもゲージ八十パーセントくらいで済むんですよ。でも、ホント、マジこれ以上邪魔するつてのなら、怒るじゃ済まされませんよ？　こんな因果クソ食らえだよったく」

「わけわからねえこと言ってるじゃ——」

「消えろつつつてんのが聞こえねえのかよ。殺<sup>け</sup>すぞ？」

……………。

思わず唾を飲み込んだ。それは私でもあり、不良でもあった。これは一般人が出て良い、違う、出せて良い殺気じゃない。視線を定められない、心臓が掴み取られたかのように自分の内部だけが停止している錯覚。それを間近で受けている不良の心情は未知。この殺気はもう、形容するならば……。

「——嘘」

思い当たった。これを出せる人間が、他にいることを。

「う、く、くっそ、気をつけろよ、ったく！」

最後の抵抗か、白椿さんをアスファルトの上に投げつけて不良は走り去って行った。白椿さんは何事も無かったかのように立ち上がり、服を整える。

私は感じた感情を全て喉の奥に押し込んで白椿さんに近寄って言った。

「大丈夫？」

「先輩、あの不良を見ててください」

「……え？」

言われて私は去って行った不良のほうを見た。本気で恐ろしかったのか、人ごみを掻き分けながら奥に進んでいる。光景は酷く愉快なものだったが、私はそれを見て恐ろしいと思った。

何故なら、白椿さんがそこをただ一点、殺す視線で見つめていたからだ。

「因果つてのは、本当に最悪です。何が最悪つて、その根源にはいつも運命が付きまどつてるんですよ。運命の前には何も無い。ただの不慮の事故でしかない。あたしにも、先輩にもどうしようも出来ないことです。昨日まで元気だった人が突然病魔に倒れる。ただ遊んでいただけなのに死人が出てしまう。こんなことの前には、一体どんな因果が存在していたのか、考えることも億劫ですよ。だつてただの日常のページでしかないんですもん」

「貴女、何を言つて……」

「その中でも出会いつていう因果は最悪です。恋人とかが言うてしよう？ 『どうして私たちは出会つてしまったんだろう』つて。因果なんですよ。『運命』つていう最悪にして最強の鎖に縛られた因果なんですよ。だから私はそれを避けるために、人との出会いを必死に避けてきた。必要無かつたんじゃないし、必要であれば作れたんです。先輩がおじさんから何を聞いたのか知りませんが、あたしはそういう状況に不満なんて一つも無いんです」

その瞬間、物凄い音がその方向からして、私は思わず耳を塞いだ。不思議なことに、視線だけは瞬きすらなくそちらを向いていた。車のクラクションが塞いだ耳の向こうから聞こえてくる。人のざわめきが増す。周りの人間の顔が一齐に、奇妙なくらいにそちらに向けられる。一瞬にして変貌した都会の夜。変わらないのは不気味に町を照らす蛍光灯と、そこには沢山の人がいるという事実。

悲鳴を上げる人、救急車と叫ぶ人、呆然とそれを眺める人、傍観に徹してまるで興味すら湧いていない人、そして当事者。

「——こんな場所で、あんな風に走つてればそりや交通事故も起きますよね」

白椿さんは、街灯に照らされた笑顔でそう言った。

因果。つまり、原因と結果。

あの男が足元も覚束なくくらいの焦りで走り去つたのはどうしてだろうか。白椿さんに出会つてしまったからだ。彼女の到底人間のものとは思えない威圧にやられてしまったからだ。

最強にして最悪の因果の鎖。今さっきまで、今度はどこに遊びに行こうかとも考えていただろう男は、この少女を怒らせてしまったがために事故を起こした。前触れなんて何も無い。こんなものを因果と呼ぶのか、それとも運命と呼ぶのかも分からない。

ただ、白椿さんの言葉によって固定された私の視線。彼女は事故が起きることを予知していた。意味が分からない。目の前の出来事が事実なのか虚実なのか、日常なのか非日常なのか区別が付かない。それとも、その間、水と油の混ざり合った場所にも私は迷い込んでしまったのか。

「ごめんなさい先輩。気持ち、悪いですよ。いえ、最初から分かってたんですけどね、やっぱり、人にはどうしても隠せない部分があつたりするんですよ」

「私は……」

「良いんです。大丈夫です。やっぱ、あたしにはこっちが合ってるんです」

えっへっへ、と茶化すように言った。今のざわめきの中で、彼女の表情は酷く場違いだ。

白椿さんは私の手を取った。夜の空気に当てられたせいか、痛いくらいに冷たく感じた。

「帰りましょう先輩。明日も学校ですし、風邪は治った直後が一番危ないらしいですからね」

繋がれた手が因果の鎖だというのならば、彼女は私に何を求めているのだろうか。孤独が嫌いじゃない彼女に、孤独は良くないものだということを伝えるなど無意味にもほどがある。せめて私が彼女の傍に居てやれば良いのだろうか。

お節介にもほどがある。これじゃあただの偽善者だ。悪意を名乗る黒住よりもよほどに悪質で無力な存在。優等生たる私が、たかだか『悪意』ごときに劣るとでもいうのか。

これ以上深入りするべきなのか、私は選択を迫られていた。人に話せばあまりに荒唐無稽な目の前の現実に、少なくとも私は驚愕し

ている。まるで他人事のように思っていた殺人事件に出くわしてしまったような不幸。私はその犯人と、笑いあう未来を選択しようとしている。

——嘘だ。

本当は分かっているはずなのに。

これがただの偶然だって、本当は分かっているはずなのに。

\*

目の前で人が事故にあった。生死は分からない。ただ、人生で中々出会えない稀有なことだ。普通だったら人の価値観一つ、簡単にぶち壊しかねない出来事。しかし、私はそれに感情を揺さぶられたりある種の絶望感に苛まれたりはしなかった。淡泊だとかそういうものの以前の問題で、赤の他人が死んだところで同情するような精神を持ち合わせていないだけの話である。

どちらかという問題は白椿さん。

正直わけが分からなかった。あの予言めいた言葉はどこから出たのか、そしてその通りになってしまった現実。これが困惑せずに何をしろというのだろう。まるで放っておいただけの紐が絡まってしまったように嫌らしい複雑難解な思考の乱れが脳内を埋め尽くしていた。

結局その後は終始不気味なほどに笑顔を絶やさなかった白椿さんと帰宅し、自室に籠もっている。母親が干したばかりであるう太陽の臭いがする。下の階からは両親が話す声が聞こえる。おかえりとただいまを言う仲。それはいくら親不孝な子供でも知っていることだ。

しかし白椿さんはどうであろうか。

彼女は他人を拒絶しているわけじゃない。ただ、拒絶しなければならぬ理由があるだけだ。まさか自分と関った人物が死ぬからだとか、そんな理由じゃないだろう。そうだったら私は今頃天国のパ

ラダイスでくつろいでいるはずだ。両親が原因であんなことになってしまっているというのならば、勝手なことでありながらあまり睦まじい仲とは想像しがたい。本当の意味で、彼女は孤独かもしれない。かかった。

『出会い是最悪の因果』。

彼女はそう言った。だから自分は今の状況に不満など無いのだと。ならば、その鋼で出来たキープアウトのテープをいとも簡単に潜ってしまった私は、彼女に何を求められているというのか。

「……………面倒くさい」

枕に顔を押し付けた。途中で息が出来なくなつて、顔を上げた。視線の先には滅多に使わないテレビがあった。十四インチほどしかない小さなテレビは、何故か清掃が行き届いている。恐らくたまに母親が掃除をしてくれるからだろう。銀色の型に、埃一つ被っていないことに今更気付いて驚いた。

私はおもむろにテレビのスイッチを机の上から取った。そして、グリーンとブラウン管に電力が通る音がし、映像が出てくる。十二チャンネル、バラエティ番組がやっていた。そこでは見たことも無い芸人が芸を披露して、いるのかもわからない観客からの笑い声が飛んでいた。

そこで私は黒住の言葉を思い出した。

『人間の世界に娯楽というエンターテインメントが生まれたのは、まさに人が生きるための糧を供給したと言つても過言ではない』

それに間違いは無いと思うのだが、私はこういう番組を見ていても面白いと感じられないことが多い。昔はお笑いブームというものに乗っていた時期もあったが、いつの日からか、そういった娯楽に興味がなくなってしまったのは事実であつた。そういった意味合いで見れば、私は黒住から見て『崩壊した人間』なのだろう。認められない事実であるが、認めるしかない事実だ。

チャンネルを変える。娯楽が好きではないからと言って、別段ニユースなどの堅物が好みのわけでもない。NHKをつけて、ニユー

スアウンサーがちょうど記事を読んでいるところに出くわした。

「今日未明、東京都××区で連続殺人事件がありました。犯人は家宅に侵入し一家を殺害、その後その家宅の周辺住民までもを巻き込んだ、かなり猟奇的殺人だと思われます。被害者は既に百名を越え、周辺住民には避難勧告が出ております。警察は厳重警戒態勢を取っており、××区は今日夕方五時を境に完全立ち入り禁止となりました。まるでゴーストタウンのような不気味な雰囲気包まれており

……」

カメラで取られているのか、警官が三人一組辺りでその区をうろついている映像が流れていた。ニュースキャスターの比喻は的を射ていて、本当にゴーストタウンのような不気味な静けさがそこを包んでいるように思える。人がいるというのに、この虚無感は些か異常過ぎる。住人がいなくなるだけで、家というものはこれまでに空虚なものになるのかと私は目を見張った。

××区はここから近くは無い。ただ、連続殺人犯ならばその行動範囲を増すということは容易に想定できる事態だ。私は自分がこんなところで暢気<sup>のんき</sup>にテレビなんて見ていて良いのか心配に眉をひそめた。下には親がいる。それを失ったことを考えれば、これは区内だけでなく、東京都全域に避難勧告を出すべきだ。

——そう、思え。

「……………」

私の心情はそれとは裏腹に、酷く冷めたもので、映像に流れてくるゴーストタウンとは私の心の中ではないだろうかと思ってしまうくらいだった。死に対して恐怖が無いわけではないが、危険に直面しているわけではない現状に対しては人間はあまりに鈍感と思えるほどに興味を示さないものだ。

ならば、私が今こんなにも冷めているのは何故だろうと自分で自分に問いを投げかける。ただ、返答は帰ってこない。あまりに抽象的過ぎる自己分析に、脳がついていけないのかもしれない。

「連続殺人事件、ね」

口に出してみたが、やはり実感は湧かない。こういうのは実際に身近な人間が被害に合わなければ危機に気付かないところが性質が悪い。私はスイッチを押して、テレビを消した。

『殺すぞ？』

静寂が訪れた瞬間、酷く重い声が頭の中で再生される。私の先ほどの感情など比べるのもおこがましいほど冷たい脅し。

あの白椿菊乃は、一体誰だったのだろうか。あれこそまさに殺人者のような、それも刑事物に登場するような殺人者じゃなく、もつと狂気の世界とファンタジーに溢れたような世界に登場する人のものさしでしか計れない存在だった。それで人が一人死んだのだというのだから、あながち馬鹿に出来たものではない。

テレビの画像を思い出した。ゴーストタウン、人が蔓延る無の空間。それは何故そのような感想を私にもたらしたのだろうか。

答えは簡単だった。

その街はとても孤独だった。温かな団欒も街角の会話も消え去り、その街にとつての仲間はどこにもいなかった。警察が包囲し、外部者を許さず、そもそも中身が何も無いっていうのに、あえて何も仕入れようとしない。必要ならばすぐに中身を作ることが出来るのに、作らない。それは、意識しなくてもあるものを髣髴させる。

あそこに似合う人間がいたとしたら、私の記憶の中には一人しかない。

同類。類は友を呼ぶ。あの街には彼女が、彼女にはあの街が互いに許容できるだろう。

——そうだ、あそこで殺人を犯すとしたら、私は彼女以外に有り得ないと思う。

その瞬間猛烈な吐き気が私を襲った。

「う、おえ……」

突如やってきた胃袋の反感に抑えるタイミングすら与えられず、私はゴミ箱に向かって勢いよく吐しゃ物をぶちまけた。

（私は今、何を考えた？）

口の中に広がる不快な酸っぱさ。意図と反して出る涙。荒くなる息。その全てを殺したくなるくらいに自分の愚考に吐き気を催した。氾濫した川のように襲い来る吐き気をかみ殺し、拳が砕けん勢いで壁を殴った。骨に衝撃が響き、肩まで痛みが走った。今だけ、その痛みが心地の良いものに思え、次の瞬間にはその程度で自分を許そうとしていることに再び怒りを覚えた。

「ふざけないで……。何が、何が優等生よ」

他人を連続殺人犯として想像することのどこがまともだ。全てにおいて模範、オールラウンダー。決して常識の範疇から外れず、絶対的な普通を守る。それが私のやり方であり、絶対に崩れない『持論』だったはずだ。

「その私が、何も、何もしてない白椿さんを『殺人者』ですって？ おかしくなるのも大概にしないさいよ私……」

何の証拠がある。何の理論がある。クラスで騒ぎがあつたら、真っ先に不良を疑ってかかるようなものと何ら変わらない。馬鹿らしさを超越して愚かしさすら感じる。

「おかしい、おかしい。こんなの、私じゃない。何を考えてるの……」

ゴミ箱の中を見る。そこには吐いたものなど何も無く、自分がその気でいただけなことに気付く。それを見た直後、やりようのない腹立たしさが湧いてきてゴミ箱を思わず横に殴り飛ばした。捨てられていたゴミが床にぶちまけられる。

その中の一つ、紙くずがごろごろと床を転がっていく。

音も立てず、その紙くずが拾われた。

「ああ、始まってしまったよ。異常という名の変化が、形を持って姿を持って現れてしまった。前に言ったから分かっているだろう、君も。『自分がおかしいと気付いたその事こそがおかしい』ことがあるということだ」

「なっ……………」

男は音も無く私のテリトリーに足を踏み入れた。背後には扉があ

った。まるで、そこに彼が誘うような形で。顔を上げられない。無駄に長い髪の毛だけが視界に写る。

「おかしいと思うことはおかしいと思えば良い。そうであると思えばそうであると思えば良い。自分の思考を一般常識と単純な概念に置き換えてみれば良い。それが出来ない人間が、天才であり、そして異端者なんだよ」

「あんた、一体どこから……」

「自己崩壊——」

言霊は暴力だった。意識を直接殴られ、一瞬にして平伏す。

「天才とは……異常者とは、自分自身にすら見放された完全な孤独者だと、そう思っただろう？」

——そうか。

そうだったのか。

灰田純一はとてもおかしい。人の家にはどういう方法で勝手に上がりこんで来るし、一度会話を始めれば混沌に満ちた内容の霧散した戯言しか吐かないし、そのくせ人の話なんてちっとも聞きやしない。けど、こいつと話すと毎回吐き気を催すのに、そのくせ私は彼とまともに会話をしようとしている。

なんて、笑える話。

「……あんた、今まで友達一人も出来たことないでしょう？」

「おや、良く分かったね。外見には自信があるのに、どうしてか僕には友達が出来ないんだ」

「そうだと、思ったわよ……」

自虐しているわけじゃない。こいつは本音で、そう喋っている。

馬鹿だ。私が人生を謳歌してきた中で、一番馬鹿な奴だ。馬鹿が度を過ぎてしまったせいで、むしろ気持ち悪い。私の本能が自己防衛を果たしていたくらいに嫌悪感を与えてくる馬鹿だ。

「……あんた、名前はなんて言っただかしら」

「僕は灰田純一。とある世界の神さまだ」

彼の名前は灰田純一といった。それは彼以外には有り得ないし、彼以外認めるわけにはいかない。

訳も分からないまま、私は身体を床に倒した。もはや立ち上がる力も、瞼を開く力も残っていない。不思議とそれに疑問は無かった。腑に落ちないだけで、それはそれで良いんじゃないかと思った。

「最後に、眠ってしまう前に問おう。——君にとって、優等生とは何だい？」

その声に答えられるわけも無く、私の意識は闇の奥へと落ちていった。

## 4話

あれから一週間も経った頃のことになる。

五時間目の授業。見慣れた教室風景は、最近の刺激のある生活に對して一層億劫なものに思える。誰かがシャーペンを走らす音と、時折聞こえる人の声が悪い意味で心地良い。満腹も相まって、幾ら私といえど結構な眠気に晒されていた。黒板の字を虚ろ虚ろとしている意識で追いながら、私は今朝のことを思い出す。

夢を見た。それも、私の人生で数えて最もリアリティがあつて、最悪な夢だった。起きた瞬間、まず聞こえてきたのは自分の心臓の音だった。高いところから落ちた時のような妙な浮遊感。そして胸の奥に微かに残っている痛覚。覚えている。明確じゃないが、今回の夢はおぼろげに記憶が残っていた。

殺されていた。先日までの夢が『これわれたにんげんの、こわれたせかい』に乗っ取った内容だったのに対し、私はまるでその世界觀に取り込まれた登場人物のようだった。夢は何かを暗示するといふが、これがそうだとしたら笑えない冗談だ。まず、それを理由にして今朝から私の気分は最悪だった。

そしてもう一つ、重大な問題。

先週から白椿さんに一切会っていない。メールも何通か送ったが、一つも返ってこない。音沙汰無しというやつだ。授業に集中出来ない理由の大半をそれが占めている。あの日を境にしているのだ、幾ら彼女と言えども落ち込んでいるのではないか——というのは自分を騙すための表向きの理由。本音はただの『嫌な予感』でしかない。何の嫌な予感なのかも分からないが、薦が絡みつくような感覚がいっになっても離れない。

少し前に、お節介かと思いつつも彼女の同級生らしき一年生に白椿さんのことを聞いてみたことがある。すると、やはり一週間前辺りから無断欠席が続き、学校には一度も顔を出していないというこ

とが分かった。ただし、それ以上の情報を聞こうとすると、皆して「彼女のことは良く知らない」の一点張りで、どうやら彼女に友人がいないのは本当のようだった。

これ以上踏み込むべきか否か。彼女のことが心配でも、特に行動を起こさなかったのは迷っていたからだ。いや、今現在も迷っている。人に言えばおかしいことを考えていると思われるかもしれないが、私にはこれ以上白椿さんと関ると、何か『違うところ』へ行かなくてはいけないような気がして、少しだけ怖い。何の刺激も無い日常から一步踏み出して、ちょっとだけ冒険してみよう、なんて軽い気持ちで関って良い存在なのかどうか。先日の白椿さんは異常だった。それは確かに私たちとは違うもので、そして、だからこそ私は彼女のことが気になっている。

……私が優等生だから、手のかかる後輩を心配しているのか？ いや、違うだろう。幾ら私だってそのくらい分かる。たった二日三日遊んだだけの子にここまで気をかけるのは親切心からじゃない。もはやこれは義務感とも言える。白椿さんによって手を繋がられてしまった私の、強迫観念的な義務感。ただし、それに従うかどうかは私の手に委ねられている。

下校時刻になった。今日は誰とも話す気になれなかったので、軽い挨拶だけ済ませてさっさと帰りの仕度を終わらせ、校門に向かう。そしてそこに、私の選択肢は立っていた。

「乗れ」

黒塗りの車の前に、黒住がいた。下校中の生徒が物珍しそうに見ているのにも関わらず、そいつはいつもの仏頂面で私を呼んでいた。

「傍から見たら変質者みたいに見えるわよ」

「お嬢様を迎えに来た執事という線はどうだ」

「そう思われないなら、その風貌をどうにかすることね」

冗談は、いらないか。

「用件を話さない」

「中に白椿菊乃が乗っている。置いておく場所が無い。貴様の家で

何日か預かって欲しい」

「乗るわ」

「ふん。現金な奴だな」

「友達想いと言いなさい」

車に乗り込むと、中にはただっ広い空間が待っていた。長い座席の一つに、白椿さんが寝かされている。白い毛布をかけられており、見るからにただ事では無さそうだ。黒住が正面の運転席に座り、車のエンジンをかけた。微振動が身体に伝わると同時に、私は白椿さんの横の席に腰をかけた。

毛布が少しはだけていたので、かけ直してやる。と、そこで彼女の服が学校の制服だということに気付き、そしてそれが真っ赤に染まっていることに気付いた。

「……黒住。状況を説明して」

車が発進する。バックミラー越しに黒住を睨み、言葉を急かせた。「安心しろ。白椿菊乃が傷ついているわけではない。それは他人のものだ」

「それは安心したわ。でも、私が聞きたいのはそういうことじゃない。一体これはどういうこと？」

「××区が封鎖された事件は知っているな？」

「ええ。最近ニュースで持ちきりよね」

先週のあのニュースを境にして、ここ一週間特集を組んでマスコミが事件を追っていた。警察はほとんど何も明かさず、××区以外に警戒態勢を敷いてもいない。一つの都市が丸々閉鎖されるという大規模な事件の割には、その真相は全く明かされないまま時間だけが過ぎていく。内部が果たしてどうなっているのか、それすらも定かじゃないのだ。報道では死傷者が多数出たと言っているが、近辺の病院にそれらしき患者が運ばれた形跡も無いらしい。最近では何かのガセではないかとの疑いもあるくらいだ。

「俺は数日前から白椿の動きを嗅ぎ取って調査をしていたのだが、その際、××区の中に立ち寄った。その時にこいつを拾った」

「白椿さんが、あの中にいたの？」

「元々白椿の家は××区にある。別にいてもおかしくはない。が、分かるだろう？ そこにいるのは明らかにおかしい」

そりゃあそうだ。いくら住居がそこにあつたからといって、警察が中を徘徊しているというのにそこにいるのはおかしい。見つければ即刻退場だ。まさか警察から逃げながら生活していた訳でもないだろう。そんな理由も見当たらない。

「血……この返り血はどういうことなの？」

「さあな。俺が来た時にはもうその状態だった……まあ、大方『自分の親の殺人風景でも見て気絶したんだろう』」

黒住をミラー越しに見る。茶化して言っているようには見えない。「……白椿さんの両親、何の仕事をしているのか、今なら教えてくれても良いんじゃないの？」

「何、単純なことだ。『人殺し』を仕事にしているんだよ、白椿は。——無論、この発言に嘘は無いが、主に悪意で出来ている」

声質から腹立たしさを感じ取れる。何かの因縁か知らないが、黒住は白椿さんの家と無関係なわけでは無さそうだ。

「人殺し……」

「そうだ。人殺しだ。詳しくは本人から聞くと良い。俺があれこれと話せば、激昂して殴りかかってきそうな事情だからな」

「そうね、そうするわ」

光景は容易に想像出来る。彼女は黒住を酷く嫌っているようだし、きつと自分のことを勝手に語られるのを嫌がるだろう。白椿さんの寝顔を見て、そう思う。安らかに寝息を立てている様を見る限り、今はかなり安静のようだ。この空間には言いよの無い安心感がある。それは黒き巨塔たる黒住がいることと、その黒住の所有物の中にいるからだろうか。良かったわね、と小さく呟いて、白椿さんの柔らかな頬を撫でていた。今だけは、彼女に黒住を恨んで欲しくない。

「黒住……貴方は、どうして白椿さんのことを助けたの？」

「何故助けた？ 心外だな、その言葉回しは。まるで俺が白椿菊乃を助けることが意外のようだ」

「だって、何だか貴方と白椿さんは仲が悪いじゃない。だから、私はてつきり過去に何かあったものだ……」

「前にも言っただろう。俺は一方的に白椿菊乃を知っているだけで、そいつ自身に俺に対する面識は無い。仲が悪いわけじゃない。単純に嫌われているだけだ」

「言つて悲しくならない、それ？」

「何、そいつに言わせれば因果というものだ」

ふっ、と小さく笑った気がした。

「俺が用件があるのは、そいつの親だけだ。子に罪は無い。屑の親から生まれてきた子が、屑とは限らないだろう」

台詞に若干の棘を感じるのは気のせいじゃない。黒住の声色がほんの少しだけ変わった。

「黒住、貴方、前に自分は『刑事』だつて言つてたわよね」

「そうだな」

「貴方が追つてたのは、白椿さんのご両親なの？」

「……………」

黙殺。だが、それは即ち肯定だ。違ふのなら否定すれば良い。否定しなかったということは、何も言い返せなかったということだ。

図星か。

私がそう確信を得たのが向こうにも伝わったからなのか、黒住は大きなため息をついた。彼にしては珍しく、自分の失態を認めたようだ。いや、私に負けでも認めたのだろうか。どちらにせよ、黒住のキャラには似合わないため息だった。

「聡明な人間は嫌いじゃないが、遣りづらいな。貴様も所詮は白椿と関わり合いになれた異常者ということか」

「私を異常者だなんて変な称号で呼ぶのは止めて。私はただ、優等生であるうとしているだけ。頭が変に働くのはその成果よ」

「優等生……か。テストで九十点以下を取ったことは？」

「無いわ」

「だろうな。そうだろうと思った。無論これに嘘は無いが、主に悪意で出来ている」

馬鹿にされたのか？　こういう変な言葉遊びは得意じゃない。

「そんな優等生に質問だが、人殺しという存在についてどう思う」

「人殺し、ね。どんな理由があれ、人を殺すことは良くないことだわ。でも、そうせざるを得なくなった状況というのには、ほんの少しくらい同情してやっても良いかもしれない。そのくらいの存在かしら」

「模範解答だな。詰まらなさ過ぎで逆に面白いくらいだ。では、人殺しの状況が、同情出来なかつたら、どうする」

私はその同情出来なさそうな人殺しを頭の中で想像する。

「快樂殺人だとか、そういうものかしら。同情は出来ない。ただ、それが人間の本質的に持っているものだとは思いたくないわ。たとえそうだとしても、それが覚醒するには何かしらのきっかけがあつて……」

「——違う」

言葉を遮られた。別に驚きはしなかった。私だつてこれが回答だなんて思つてはいない。本質をいつまで経つても説明しやがらない面倒くさいエンターテイナーから言葉を引き出すためだ。意味の無い禅問答は時間の無駄だと分かっているのにやりたがるのは灰田と同じなのだろう。いや、少し違うか。彼らは一つ一つの問いで私を試している。質問というものが、本来そういうものであることを私は知っている。本当に、面倒くさいものだ。

「貴様の、常識的な脳味噌で考えられない人殺しが、この世界にはごまんといる」

まるで、そのほとんどを見てきたのかのような口調。

「例えば？」

私はそれに、試すような言葉で訊いた。

「人を殺すことが本質的に悪だということを、『知らない』人間だ」

知らない。黒住はその部分を特に強調したように思える。

分らないんじゃない。自覚してないんじゃない。そもそも、そういう常識が存在しない。アダムとイヴの時代、彼らが林檎を食べるまで『罪』というものに全くの無知で無関係だったように、人を殺してはならないという歪んだ常識が存在しない。倫理観とは何だ。まともな人格とは何だ。そんなものは、彼らにはそもそも存在しない。

——なんて人が、この世界にいても思うのか？

「人間は普通、倫理観を成長する際に植えつけられる。だが、それが無かった場合はどうだ？ 何かをきっかけにして生み出された一発屋のようなものではない人殺し。そんなものが世界にはいる」

「理解が難しいわね」

「何故、俺たちは人を殺さない？ 殺してはいけないという強迫観念が植え付けられているからだ。それはどうして植えつけられた？

周りがそうしているからだ」

「まさか……」

「周りに誰もいなければ、それは存在しないということだ」

天涯孤独の白椿家。そして人殺し。

なんてことだ。嵌るはずが無いと思つて端に退けていたピースが嵌ってしまった。出来上がった形は酷いもので、見た目何を書いてあるのかは全く分からなかったが、それでも、形は出来た。

「優等生。明日、××区で俺は『刑事』生活にケリを付けに行く。

どうだ、俺と共に世界に蔓延る屑の一人を豚箱に叩き込んでみないか？」

「相手がどんな人なのかも知らないで、私がそんなこと出来るとでも思う？ 貴方のことは決して信用してはいないわけじゃないわ。私には分かる。貴方が口癖のように言っている『嘘は無い』って言葉に、嘘が無いことを」

「ほう。なら何が不満だ」

「貴方みたいな悪意の塊に手を貸すほど、私もお人よしじゃないっ

てことよ」

「……くっ、はっはっはっは！」

黒住が腹の底から楽しそうな声を出した。私も釣られて少し可笑しくなり、頬が緩むのを抑えられなかった。

「明日の午後一時。それまでにどうするか決めることだ。止めるなら止めに来い。貴様が優等生であるならば、それらしい行動をしていればいい。俺はそれを否定しない。——無論、これに嘘は無いが、主に悪意で出来ている」

いつの間にか車は止まっていた。窓の外を見れば、見慣れた自宅の外観が目に入った。都内の住宅街の中では大きめな、豪勢な家。自宅の場所を伝えてないのに、本当についてしまった。そのことに對して、気持ち悪さとかは感じなかった。どうせ黒住のことだ、車を走らせた時点で自宅の場所を知っていることは検討が付いていた。どうやって調べたのかは分からない。ただ、なんとなく、『刑事』だから当たり前かと思ってしまったのだ。

「送ってくれてとても感謝してるわ。それで、悪いんだけどもう一つ良いかしら。白椿さんを私の部屋まで連れて行くの、手伝ってくれない？」

「面倒だな。車を止めるところが無い」

「今の時間なら母親もいないだろうから、菓子の一つや二つは出るわよ」

「歩きながら食べれるものか？」

「お饅頭とかなら」

「仕方ない。車を止める場所を探すから少しうつくぞ」

「貴方、現金な人ね……」

「正直者と言え」

謙虚さが無いのと正直なのは少し違う気がする。

車はしばらくして通りに止まり、白椿さんは黒住によって私の部屋に運ばれた。眠りが深いのか黒住の抱え方が良かったのか、その間一度も目を覚まさなかった。

その後、黒住には軽い礼とお茶菓子を持たせて帰らせた。どこで食べるのか知らないが、結構に満足していた。今度会うときは同じものを持って行ってやろうとか、ほんの少し悪戯心混じりに思った。とりあえず白椿さんの服を着替えさせよう。血みどろのままじゃ格好が付かないし、私のベッドも汚れる。学校のジャージがあつたはずだ。サイズが合うか分からないけれど、彼女だったらきつとそれでも納得してくれるだろう。

友達なんて、そんなものだ。

\*

「おはよう白椿さん」

白椿さんが目を覚ましたのは、午前十一時を回ってすぐだった。夕方頃に黒住に届けられてから、丸半日以上寝ていたことになる。

寝ぼけ目を擦りながら身を起こすと、白椿さんは私の方を見て大袈裟に飛び跳ねてリアクションを取った。

「おおうつ！ 何故ここに先輩がつ！ っていうかここはどこですかあたしは誰ですか、ってか、今いつですか？」

「私と貴女が最後に会った日からちょうど一週間と一日。そして現在午前十一時十分よ。加えておくならここは私の家よ」

「せ、先輩の家？ や、ヤバイっす。知らない間に先輩の家にお呼ばれしてたとか、その瞬間の記憶が無いことが悔やまれて頭の奥のほうがむっっちゃ痛くなってきました」

「夢も希望も無いことを言つと、貴女は黒住に連れてこられてきたのよ。今度会つたらお礼でも言っておきなさい」

「本当に夢も希望もありませんねそれ」

現実を知ったからか、白椿さんは落ち着きを取り戻して肩の力を抜いた。

「はあ……どーして先輩の家に連れて来ちゃいますかね、あの人は」「何、嫌だった？」

「いいえー！ とんでも無いです。この家ごと食べて胃袋に収めちゃいたいくらい嬉しいですマジで。ここはあれですか、平民が決して立ち入れないと聞く王宮ですか。なんて神々しい光景なんでしょう、っていうか、あたし先輩のベッドで寝ちゃってます？　つかこれ、先輩のジャージじゃないですか。え？　マジで？」

「少し落ち着きなさい……別に王宮でもなんでもない、ただの一軒家よ」

「す、すいません……」

しゅんとして白椿さんは頭を下げた。

私は白椿さんの隣に座って、おもむろに足を投げ出した。昨日は親から借りてきた寝袋で寝たためか、肩と腰の辺りが若干痛い。いざこうしてベッドに乗ってみると、その快適さが良く分かる。スプリングを少し軋ませてやると、白椿さんがちよこちよこ前に出てきた。その腕の中には何故か私の枕が抱きかかえられている。体育座りのスタイルなので、自動的に顔を少し埋める形になっている。別に抱えるのは構わないのだが、あまり臭いとか嗅がないで欲しい。「さて、さっさと本題に入っちゃおうと思うんだけど、良い？」

「……」

黙殺。黒住とは違う、否定の意だ。あまり触れて欲しくは無いんだろう。私の家に来なくなかったのも、きっとそれが理由だ。ただ、そうだと分かっている、私は聞かなければならないと思う。だから私は、彼女がそうして欲しくないのを分かっているながらも話を進めることにした。

「昨日、黒住からある程度は聞いたわ。貴女の家事情がどんなものか、詳細は本人に訊けって言われたけどね」

「聞いたんですか……あたしの、家のこと」

「触れる程度だけだね」

「どうして聞いたんですか。先輩は頭の良い人だから、なんとなく分かってたはずですよ。いえ、先輩も『そういう人』だから、分かっていたはず。あたしの家の事情は、簡単に踏み込んで良い領域じゃ

ないって」

そう節目がちに言う白椿さん。

どうして黒住に、彼女のことを聞いたのか。話の流れで聞いてしまったと言えばどうしようもなくなるが、あながちそれも嘘じゃない。つまり、私はあの時点で迷っていたつもりであって実は既に結果を決めていたのかもしれない。いや、それも仕方の無いことだ。だって私は優等生だから。

「白椿さん。私はね、そこまで言うほどお人よしじゃないし、誰彼構わず親切心を振りまくような偽善者でもない」

「じゃあどうして……」

「人に助けてって頼まれたら、貴女は断れる？」

私のちようと横にいる白椿さんは、目を見開いてこちらを向いた。綺麗な瞳が一直線に貫いてくる。それに目を合わせた私は、彼女の睫毛の一本一本まで明細に感じられる。苦しくなるほどの、期待に満ちた目だった。

「あたしは、そんなこと頼んだ覚えはありません。そんな因果は、存在して無いです」

言葉は否定だった。一語一語を区切るように言い、綺麗な目は私から逃げて行った。本当に可愛らしい子だと思う。こんな後輩だったら、何人でも面倒が見れそうだ。思わず頬が緩み、私は白椿さんの頭に手を置いた。

「因果は、確かに存在していたわ」

「……え？」

「私と貴女は確かに出会った。あの購買部で、偶然にもね。誰の差し金でもない。本当に偶然の産物で。そしてその後、貴女は私に近づいてきた。たかだかサンドイッチを一つあげたくらいでね」

理由としては間違っていないだろう。初見の人から物を貰って、後日何のお礼も無いなんてのはそれこそおかしい話だ。だからあの日、彼女が私にお礼をしたいと私の所を訊ねてきたことには何ら不思議なことは無い。

ただし——普通は私が病院に行っているところまでは来ないし、風邪気味だと言っているのに翌日の約束を取り付けようだなんて強い押しの仕方もしない。あの時、彼女はきつと焦っていた。今だからこそ分かる。彼女はどうしても、私との因果を繋ぎとめて置きたかったのだろう。

「白椿さん、貴女に何があったの？」

「あ、あたしは……」

「——話さない。白椿菊乃」

それ以上の言い逃れも、嘘も許さない。私はノロノロと進む話は嫌いだ。もうこれ以上ことを伸ばすことは、私が許さない。

「あたしの……」

箒は外れた。あとは水の流れに任せるだけだ。

「あたしの家のことは、どのくらい黒住から聞いたんですか？」

「貴女のご両親が人殺しだということくらいね」

「うわぁ……一番根っこの部分じゃないですかそれ」

乾燥しきって今にも割れてしまいそうな笑顔を見せる。私はそれに水をやるように、髪の毛を梳く感じで頭を撫でた。

「……人の世界って、どこもかしこも真っ黒だと思いませんか。利害だとか、自分への見返りだとか、そういうことばかり考えて生きる自己中心的な人ばかり。人間は蓋を開ける前から悪臭が匂ってくるくらい、酷い生き物だと思いませんか」

「とても悲観的な考え方だと思うけど、間違っではないかもしれないわね」

「あたしの親は、元々宗教人だったんですけどね、結構っていうかかなり熱狂的でして。それで、毎日のように人の姿に絶望していたらしいです。何様だって話ですけど、本人たちからすれば結構重大なことだったらしくて」

宗教は人の生きる糧でありながら、度々人を狂わす。白椿さんの両親もその被害者の一人なのだろうか。悪徳宗教や、その手の類のものを想像しながら彼女の話しに耳を傾ける。

「それで、考えたらしいんですよ。どうかしてこの世の人々を救ってやりたいって。その結果、思いついたのが『浄化』みたいなものだったんです」

「『浄化』？」

突然飛んできた突拍子も無い言葉に、私は思わず鸚鵡返しにした。

「はい。先輩も何となく分かってくれると思うんですけど、『浄化』って抽象的過ぎませんか？ 逆に悪に染めてしまふのなら分かりやすいんですけど、正義に戻す、っていうんでしょうか、それってとても難しいし、どうしていいか良く分からないと思うんですよ」

「確かにね。人を悪の道に陥れるのはどうにでもなるけれど、更生させるとなると私も最善の方法なんて考えつかないわね」

「それで、辿り着いた方法が、『人を真っ白にしてしまおう』」

「……真っ白？」

私は撫でていた手を止めて白椿さんの表情を窺う。彼女の表情は思いのほか軽い。恐らく溜めていたものを吐き出せる感覚に酔っているのだろうと思った。

「人が真っ白になるって、どういうことか、分かりますか」

その瞬間、私の知性がある一つの答えを導き出した。その考えを丸々代弁するように白椿さんの口が動く。

「白っていう色は、絵の具じゃどうやっても作れません。黒は他の色を混ぜればいつかは出来上がるのに、白はどの色をどう混ぜても出来上がりません。白はそれしかないですよ。黒が他の色々なものを含んでいるのに対して、白にはそれしかないですよ。じゃあどうすればいいのか」

真っ黒な人間を白に戻す手段とは何か。人生の中で良い事悪い事、全部吸収して色を混ぜてきた人間の色を、どうやったら真っ白に出来ようか。どれほど白を加えたところで焼け石に水、多少黒が薄くなるだけで、直ぐにまた戻ってしまう。一度戻せたところで、二度三度蘇る。

ならば、と彼らは考えたのだろう。

「——死んじやえば良い」

ぽつんと、言葉が零れ落ちた。

ある意味では、死は人にとって究極の救いなのかもしれない。自分という器の中に際限なく溜まっていく悪性の液体は、もしかしたらそうでなければ取り除けないのかもしれない。

「……親が、人を殺したのは一度や二度じゃありませんし、あたしがある現場にいたことだってありました。むしろ、親はあたしがこの仕事を継いでくれるとも思ってるみたいです。笑えますよね、ホント」

少しも笑えやしないっていうのに、白椿さんはそう言う。笑えない。全然笑えない。

「あたしには分かります。あたしの中にはあの人たちの血が流れている。想像出来るんです。自分が例えば誰かを殺した時、どうなってしまうのか」

「どうなるの……？」

「きっと、どうもしませんよ」

——何故なら彼女もまた、異常者だから。

「人が死んだって何も悲しくない。人を殺したからって罪悪感なんて無い。だっておかしな話じゃないですか。どうして人の『死』が悲しいことなんです？ たかだか持っていた玩具が壊れるくらいの話じゃないですか。だってあたしの親は沢山の人を殺してきたのに、あの人たちの泣いている姿なんて一度も見ることが無いんです！ その程度の話でしかない！ なら分かるじゃないですか、そういうことに持つ感情なんて、何一ついらないんだって。そんな考えが自分の中にある。ほんの少しの動機で人を殺してしまえるだけのものを私は持っている。そんな人間が、友達なんか作れるわけが無い——因果ですね、因果」

いつもの調子で口癖を呟いた彼女は、泣いていた。人殺しの子とは思えないほど綺麗な瞳から、悲しくないと云った言葉とは裏腹な涙を流していた。

出会いという因果は最悪だと彼女は言った。何故彼女は、そんなことを思うようになったのか。私は昨日、そのことについて考えていた。

白椿さんの最初の出会いは何だったのか。想像するまでも無い。自分の両親だ。彼女が生を受けて一番最初に出会ったのは、自分の親なんだ。それは彼女だけじゃない、ほぼ全ての人間がそうだ。その親から人として沢山のことを学ぶ。親から子は出来る。言葉だつて親から学ぶというのに、ものの考え方を学ばないわけが無い。彼女はその点において、最悪とも言える因果を引き当てた。私には想像することすらおこがましい人生を歩んできたのだろう。友達の一人も作らなければ、親は殺人鬼。そんな人生を私が測れるわけが無い。同情なんて、出来るわけが無い。

だが、いやだからこそ、私は彼女の領域に土足で踏み込む必要がある。彼女の郷になど従えない。狂いに狂った、壊れた世界の郷になど従えるわけが無い。礼儀など知ったこっちゃ無い。ここは壊れた人間の世界じゃない。郷に入ったのだから、郷に従ってもらおう。「白椿さん。貴女はどうして私に近づいてきたの」

結論を急ぐ。もはやこんな話をする必要は無くなった。白椿菊乃が私と出会い、私に求め、そして私はそれに答える。

面白いと素直に思った。これが、『因果』なのだろうと。

「あたしは人を殺したくなんてない。今まで我慢し続けてきたんです。両親が私に教えてくれる、数々の殺害方法とか、そういうのにもしもあたしがそれに屈してしまつたとき、友達がいたらその子が悲しんでしまう。もしかしたらその子を殺さなければならなくなつてしまうかもしれない。だから友達を作らなかつた」

彼女は泣いていた。嘘なんて一パーセントも配合されていないし、悪意も感じられない、ただただ純粋なもの。

「先輩に出会つた時も、本当は無視しようかと思った。お礼なんてしても何の意味も無いし、ただ自分が苦しい状況に置かれるだけだ。けど、あたしはやっぱそれは友達とか関係無しに返すべきだと

思った。本当はお礼だけ言って帰るつもりだった。でも、その日、ある出来事を境に賭けてみようと思ったんです」

「ある……出来事？」

「はい。それは……——先輩が、灰田純一と出会っていたから」

一枚の巨大なピースが音を立ててはまった。驚きは無かったが、身の毛がよだつほどに鳥肌が立った。分かっていた。分かつてはいた。彼女の口からその名が飛び出すまで、意識しなかっただけで、どうせそんなことだろうと思っていた。あいつは舞台の脇役じゃない。主役でもない。舞台の奥で私たちが必死になっているのを見ている、監督なんだ。

出会い是最悪の因果。人によって捉え方は色々あるだろうけれど、私はそれに今猛烈に同意したい。全部、あいつが繋いでいる。私は白椿さんのことに関してしていたつもりなのに、あいつと繋がっている。糞みたいな因果の鎖が、私を捕らえているようだ。

「……なさい」

「え、何ですか？」

「言いなさい！」

罵声に近い怒鳴り声を上げてしまう。白椿さんは身体を一瞬震わせると、怯えた目でこちらを窺ってきた。らしくもない。貴女はいつも通り、期待に満ちた目で私を見ていればいいのよ。

「私に何をして欲しいのか、その口で、しっかり言いなさい！」

「——」

時計の針は十二時を回っている。だから何だ。私は優等生だ。出来ないことなんて、何も無い。

「先輩、あたしを、助けて……！」

もう私は、人の踏み込める限界領域の一步先に両足をついている。

## 5話

××区の最寄り駅に私は来ていた。駅を出てすぐ、黄色いキープアウトの TeeP が目に入る。群青色の制服をきた警官が十数人うついていた。駅が封鎖されていないのが不思議だが、それは通勤やら電車のダイヤの影響だろう。ともかく、黒住を探す必要がある。

白椿さんは家に置いてきた。彼女自身は付いていくと言い張ったが、もしかしたらのことを考えると彼女が居合わせるのはあまり得策とは言えない。黒住が相手を逮捕するだけで留まってくれるなら良いが、彼の言う『刑事』とは言葉遊びの一環であって、それ以上の意味を持たない。つまり、相手を捕まえて牢獄に叩き込むための職業的な存在ではないのだ。

最悪、殺してしまうかもしれない。そんなことを私は考えている。昼の直射日光を浴びながら、張られた TeeP に沿って私は街を歩く。ここに来たことは無いが、同じ東京都の街には到底考えられない静けさ。家宅が立ち並ぶ住宅街だというのに、所々に埋められている木よりも生命を感じない。この中に残った命は、唯一植物だけかもしれない。自分の足音がここまで大きく聞こえる場所が都会にあるとは思わなかった。何台ものパトカーが本来街であったものの景観を妨げ、その空間に異常性を作り出している。まるで万里の長城並みに長く作られた黄色い TeeP も同じだ。こんなことは、普段有り得ない。

「実に奇妙な光景だろう。まるで違う世界に来たみたいだと思わないか」

真正面、その景観を妨げている原因の一人がどこかを見据えて立っていた。相変わらずの黒に統一した服装、そしてサングラス。きちんと着替えているのか問いただしたい。

「テレビでしか見たこと無かったけれど、実際に来てみると、なんというか、本当に奇妙ね。この TeeP の先に手を入れてみたら、違

うところに繋がっていきそうだな」

言った通りにしてみたが、やはり何も起きない。当然だ。本当だったらむしろ反応に困る。

「貴様がここから一歩先に踏み出した瞬間、非日常の世界に足を踏み入れるとしたらどうする」

「何よ突然。異常な光景に気でも触れた？」

「……」

私の冗談は聞く耳を持たないらしい。

「どうする、と聞かれてもね。日常と非日常って、水と油みたいな関係でしょう。決して混ざり合わない、みたいな。きつと入ったら呼吸が出来なくなるわね」

「そんなことはない」

てつきり乗ってくると思ったのに否定されたので、軽く肩透かしを食らった気分になった。黒住は依然としてどこかを見つめたまま、言葉を続ける。

「日常と非日常とは、水と腐った水だ。一見してその違いは分らないが、飲んでみれば一目瞭然。混ざり合うことも出来るし、どちらもどちらに介在することが出来る。そんなに離れた関係でも無い。呼吸は恐らく出来るだろうが、貴様が今から吸う空気は実際腐っているだろうな」

黒住は服の袖を巻くって腕時計を見た。銀色に輝くそれは、妙に高級感を漂わせている。こんなんだからヤクザっぽく見えるんだと言ってやりたかったが止めておいた。

「腐った水、ね」

言われて見れば、目の前の空間が淀んでいるような気もする。きつと、それはただの気のせいなのだろうけれど。

「さて、時間も押している。そろそろ行こう」

「……待った？」

この時、きつと私は凄くいやらしい顔をしていたらう。

「いいや。今来たところだ。無論これに嘘は無いが、主に悪意で出

来ている」

先ほど駅の時計で時間を見てきた。一時を回って十五分過ぎていた。ここまで少し歩いたことを考えれば、もう半は過ぎているだろう。ここに今来たことは嘘じゃないだろう。そして彼が待っていないかったというのも嘘じゃないだろう。ただし、きつと怒っている。あの仏頂面の奥で、私に文句の一つでも垂れていると面白いな、とか思ったりした。

\*

世界は腐っていた。まさか消費期限が切れたわけでもあるまい、正確には腐らされていたと言うのが正しいんじゃないだろうか。外観だけやつと保って、中身はすかすか。その原因たる病原菌を探るべく、私は黒住の後を歩いていた。

立ち入り禁止の向こう側。こんなに簡単に入れるとは思っていなかった。警察から逃げるスリルでも味わうんじゃないかと期待していたが、黒住が「通るぞ」と言っただけで、警官は通してくれた。どういう繋がりがあるのか知らないが、納得出来なかったわけじゃない。今なら黒住が個人的に核を所有していても納得しそうだ。予想外だったのは、どう見たって無関係な私も通してくれたことだ。一端の高校生でしかない私を連れた黒住の姿はどう見てもまともじゃない。今この場、周りに人がいないから良いものの、これが普通の日中の街角だったら、本当の意味で警察に捕まりかねない。それでも毅然としているのが黒住だろうけれども。冗談は通じるが、どうにも面白くない奴だ。

「どこに向かつてるの？ まさかこの封鎖された全体から探すわけじゃないわよね？」

「当たり前だ。既に白椿は押さえている。それより、おかしいと思わなかったか。区が全域立ち入り禁止になることは決して不可能ではないが、キープアウトのテープを使うというのは些か面倒なこと

だと」

「言われて見ればそうね。大体殺人事件が起こったのだから、誰も普通に近づかないわよ」

「あれは所謂目印だ。ここから先に進まない方が良い、というより進むなという警告のな」

それこそ当たり前だと思っただが、どうやら私の考えている領域よりも少し先のことを黒住は考えているような気がする。

「先に確認しておくが、今回のこの連続殺人事件と、そして××区が全域封鎖されたこと。貴様はこれが『現実』だと思うか？」

「自分の頬を抓れば分かること？」

「貴様はどうにも冗談好きらしいな。調子が狂うから止める」

「イニシアチブを相手に渡したくない性分なのよ。諦めて」

勿論、私だって黒住がそういう夢や現実のことを語っているわけじゃないのは分かっている。

目の前の光景を改めて視界に収めてみる。私が普段見ているものと別に大きく変わったところじゃない。静寂の成分が八割ほど増されただけで、ほかは何も変わらないのだ。天井から降り注ぐ太陽の光も、かすかに香る木々の芳香も。現実から拒絶された空間だと考えるには、あまりにも普通過ぎる。

「現実かどうかと聞かれれば、現実と答えるしかないでしょう。私は実際ここにいるわけだし」

「そうだ。ここは現実だ。だが、この状況は現実か？」

「どういうことよ。回りくどいのは面倒だから止めて」

「過去、通り魔などで十人単位が殺害された殺人事件が無かったわけじゃない。その時、街の封鎖は行われたか？」

黒住は歩くスピードが速い。私は少し駆け足になって、彼の横に並んだ。

「記憶が薄いけど、そんな大々的なことはしなかったわね。でも、その時は犯人が現行犯逮捕されていたわ。今回は犯人は捕まって無いんでしょ？」

「貴様は何を言っている。先ほど俺が言っただろう。白椿は既に押さえた」と

そういえばそうだ。なら実質上犯人は捕まっていることになる。ならどうしてこのエリアを封鎖する必要があるのか。既に殺人鬼の脅威は去っているというのに。

「まだ、この中にいるから？」

「それもある。白椿の二人はまだ警察の方には届けていない。三日ほど前から拘束しているだけだ」

「三日前？ 白椿さんが貴方によって発見されたのは昨日よね？ 貴方もしかして……」

「関係の無い話だ」

本当に関係の無さそうな顔で言うものだから、思わず無視しそうになった。

「ありがとう」

「何故礼を言う」

「白椿さんは、貴方にはお礼を言わなさそうだから。昨日のことも含めて、私が代わりにね」

「ふん、律儀な奴だ」

私の礼は受け取ってくれるらしい。本当に嘘をつくことはしないみたいだ

「警察に渡さずにここに拘束しているのには二つ理由がある。一つは、普通の事情徴収では全く意味を成さないから、俺が直接しなければならぬこと。もう一つは、この空間が都合が良いことだ」

前者の意味は私にも分かる。彼らの業界で言う「異常者」というやつだろう。まともな人間で会話が成立するとは思えない。黒住はそういう人たちに対する態度が慣れているような気がする。実際に彼と異常者が話している姿を見たことは無いし、そもそも「異常者」というのが何なのかいまいち分かっていないから確かなことではない。ただ、『浄化』などと時代錯誤なことを言っただけ人殺しを行う白椿さんの両親がまともとは言えない。そしてそのまともではない人

物を追い続けている黒住も、きつとどこかまともじゃないんだろう。だから話が通じてしまう。そんなこじつけた。

「この空間が都合が良いって何よ？」

「異常者にとつて、普通の世界は純度の高すぎる水でな。少々腐らせないとまともにも息も出来ない奴らなんだ」

「××区を封鎖したのは？」

「腐った水を瓶詰めするためだ。全く持って面倒なことだ」

魚だつて海水魚から淡水魚、淡水魚から海水魚への進化を遂げてきたというのに、四十年以上の年月を生きながらまだ純水に慣れないらしい大人。確かに面倒だ。世話の焼ける老人よりだつて素直に人の言うことは聞いてくれるのに、それすらしてくれないらしい。

「この、腐った水を作ったのは白椿さんの両親じゃないんでしょう？」

「ほう。何故そう思う」

「そんなことが出来るくらい、やり手には思えないからよ」

「辛辣な評価だな。だがそれは的を射ている。この空間は白椿よりもっと腐った奴が作り上げた副産物だ」

「へえ、誰？」

「……」

何故か黒住が黙ってこちらを見た。相変わらず背の高い男から見下されるのは気に食わない。ミラーサングラスがまた一層その威圧感の度合いを上げているから性質が悪い。

黒住は歩くペースをそのままにして、答える。

「——世界を作る天才だ」

その言葉の後に、出来ればいつもの口癖が欲しかった。この言葉に嘘は無いが、主に悪意で出来ていると。

「こつという話を知っているか優等生。外国の話だが、とある小学校の遠足で、数十人の子どもと先生を乗せたバスが帰ってこなかったというものだ」

「知らないわね……ただの行方不明じゃないの？」

「違う。その後、一番最初に運転手が帰ってきた。彼の証言によれば、記憶はバスがトンネルに入った瞬間からそのあと無くなっていたそう。ちなみに、その時のバスはそのトンネルの近くの森で発見されたそう。」

「落下、事故とか？」

黒住はそれに横で首を振る。

「ある日、乗っていた子どもたちと先生が帰ってきた。どこに帰ってきたと思う。全く無関係な家の、庭に突然現れたらしい。」

「……どういうこと？」

事故の後、自分たちで街まで歩いて帰ってきて、そこで力尽きたということだろうか。いや違うだろう。それなら、黒住の口から『突然』なんて言葉は出てこない。私はそのまま黒住の言葉に耳を傾けた。

「運転手と同じように、全員記憶を失っていた。そして、自分が何故ここにいるのかも分からないという。まるで、別の世界から帰ってきたように、そこに現れたのだ。」

まるで、まともな経路を通ってきたとは思えないように、彼は私の目の前に現れたのだ。

「そして、調べによれば、子どもは一人足りなかったらしい。一人だ、たった一人だけ足りなかった。他は全員帰ってきたというのに、一人だけ。」

「その子が、世界のホストだったって言いたいのか？」

「真相は分からないが。だが、真相が分からないことが、この世界にはあるということだ。」

話を聞いた直後から、私の目の前の風景が本物なのか疑わしくなった。腐った水を入れて出来たアクアリウムの中のモニメント。ここは、私が住んでいた純水の世界と同じもので構成されている。値段も同じだし、形も色も変わらない。ただ、ほんの少しだけ不気味に感じる。水の微かな濁り方が、景色の明暗を左右している。私がおここから外に出たとき、私は記憶を持っているだろうか。時間は

余計に経つていないだろうか。そんな有り得ないことが心配になってくる。何だか黒住に上手く乗せられた気がして悔しいが、ちょっとだけ怖くなつたのは否めなかった。

「さて、着いたぞ」

黒住がその巨軀を揺らして立ち止まった。結構なペースで歩いてきたから、足に疲労が溜まった。やせ我慢せずに歩くペースを緩めてくれと言えば良かった。

一件の家宅が正面に立ちはだかっていた。立ちはだかっていたと言うのは、私とその舞台に多少の震えを感じていたからに他ならない。二階建ての一軒家。新築なのか、まだ真新しさを感じる。門の傍に備えられた花壇には一輪の花も咲いていない。門の煉瓦と相成つて、土色が強い。表札を見た。石の上に黒く彫られた文字は、「白椿」と書いてあった。

「自宅に拘束するなんて、中々優しいのね貴方」

「ちなみに娘はの中で発見し、保護した」

「……そう」

つまり、家の中で気絶するほどショックなことがあったということだ。私もある程度心を決めておかないといけないかもしれない。

「貴様はこの中に入らなくて良い」

私が一步踏み出そうとしたところを、太腕で止められた。私は黒住を見上げて、抗議の声を上げた。

「何ですって？ それじゃあ私が来た意味が無いじゃない」

「それこそ何だ。貴様が中で奴らと話でもしようと言うのか？ それこそ無駄なことだ。そもそも貴様はここに何をしに来たのだ。俺を止める訳でも無いのだろう？」

「私は……」

「白椿菊乃を助けたいという想いが少しでもあるならここにいろ。そして、もしも白椿菊乃がここに来た時、決して中に入れるな」

「いえ、彼女は家に置いてきて……」

「それで来ないという確証がどこにある？」

無い。そんな確証はどこにも無い。

「それどころか、俺の予想では白椿菊乃は必ずここに来る。その時、邪魔をされないように貴様を用意したのだ」

昨日私に対して挑発的なことを言ったのは、これが理由か。流石悪意の塊だ。確かに嘘は無かったが、私はまんまと騙されたようだ。白椿さんを助けるためと言われたら、従わざるを得ない。確かに黒住の言うとおり、この中で彼女の両親と話をしたところで何の解決にもならないだろう。そんなことで解決するなら、とつくにこの問題は終わっている。

でも。

「……分かったわ。ここで待つ。ただし、貴方が今から何をしようとしているのか、それだけ聞かせて」

「――奴らを殺す」

笑ってしまうくらい、予想は的中だった。黒住に宿るものは本気だろう。彼に纏わり付く空気が変わった。もう私はこいつに一步でも近寄りたくない。私まで殺されてしまう気がするほど、黒住は本気だ。

「それが、白椿さんを助ける方法になるの？」

声だけは辛うじてはつきりと出せる。言葉で黒住に対抗することはまだ出来るようだ。

「……親に死んで欲しい子どももいる」

「貴方にそれが分かるの？」

黒住は答えられない。分かっている。そういうことじゃないっていうのは、私だって十分に承知なんだ。でも、だからこそ聞いておかなければならない。

「私は、貴方には多少のエゴを感じるわ。私が心配なのは、貴方が自分のために行動していかないか否かよ。貴方がずっと追ってきた人たちがこの中にいる。でもそれは何のため？ もしも貴方が自分の満足のためにそれを行うのだとしたら、私は意地でもここで貴方を食い止めるわ」

「何が言いたい？」

「貴方がここで今から行くことは、全て白椿さんのためだと誓いなさい」

「俺の事情を酌む気は無いのか？」

「無いわ。貴方が今しようとしていることは、人殺しよ。私は本来、ここで百十番に電話をかけてもいいくらい素直に犯罪なの。でもそれが、白椿さんのためだっていうのなら、私はこのまま貴方を行かせても良い」

「それは優等生的にはどうなんだ」

「優等生が信用しようって言うてるのよ。素直に頷きなさい」

主導権は決して渡さない。私は、常に人より上に立つ。

「俺が素直に貴様の言う通りにする意味が無い」

「誰かを殺すことによって救われる何かの方が、もっと意味が無いわ」

黒住が小さく舌打ちした音が聞こえた。そして続くように、上着の中に手を入れ、何かを取り出して私に差し出した。

「持っておけ」

拳銃だ。詳しくないから良く分からないが、ずっしりとした重みが手の平に伝わる。初めてこんなものを持ったが、とてつもなく物騒だった。今にも火薬と鉄の香りが鼻腔についてきそうな重厚なフォームをしている。

「いらないの？」

「武装で制圧するのは性に合わないことを思い出したただけだ」

「そう。なら預かっておくわね」

ズボンの後ろポケットに無理矢理詰め込んで、確かにそれを受け取った。

黒住は門を潜り、家の玄関に手をかけた。そこでピタリと止まると、振り返らずに言った。

「これからの行動は全て白椿菊乃のためだと誓おう。——無論、これに嘘は無い」

「確かに聞いたわ。行つてらっしゃい」

これで、一応は大丈夫だろう。黒住は扉の向こうへ消え、私は一人になった。

寂静。風の吹く音すら聞こえない。微かな耳鳴りと共に、ゆっくりとしたペースで心音が鳴っている。何か音を立てていないと、静寂に食いつぶされそうな気さえた。靴をアスファルトにぶつけて、気を紛らわす。首を曲げたりして、自分の実感を保つ。深呼吸を三回。これから起こることは想像に容易いのに、意外にも私は落ち着いていた。

——さあ来い。準備運動は整った。

「今君は、この状況は寂しいと思うかい？」

灰色が降り立った。僕の庭へようこそ、そんな呟きも聞こえた。

胸糞悪いほどに美形の顔が、私の前で微笑んでいた。

「子どもじゃないんだから、この程度で寂しいなんて思わないわよ」

「君が寂しいかどうかなんて聞いてないよ。この状況のことを聞いているんだ」

「……まあ、物寂しいとは思わ」

私は素直にそう感想を漏らす。物は沢山あるのに、何も無い。どこかの国のたとえ話みたいだった。

「でも、白椿の望みを叶えていくと、最終的にはこうなるんだよ」

まるで事情を知り尽くしているかのように、簡単にその名前を出してきた。意外では無かったが、やはり胸糞悪かった。

「笑える話だね。彼らは初めから孤立していたというのに、仲間を求めた結果、周りにはさらに誰もいなくなるんだ」

「仲間を、求めた？」

しつくり来ない言葉に思わず聞き返した。

「彼らが宗教人であるということは、彼らは他者を善い方に導こうとしているんだよ。ただ、その善いとは何を基準にしている？ 彼らの中の善いだよ。自分たちの善いへ、導こうとしている。それはつまり、自分たちの元へ来て欲しいんだよ」

あまりにも悪性に満ちた世の中で、白椿は自分の思う『善い』へ人々を導こうとした。人に黒い部分を持たない奴はいない。つまり、世界には白椿にとっての更正対象、つまり敵しかいなかった。故に彼らは初めから孤立していた。味方のいない世界から、全ては始まった。

「孤立している人は大変だ。何せ誰もいないのだから、その考え方は常に独りよがり。独りであることはつまり、全行動権が自身に託されていることに他ならない。全部自由なんだよ。考えるのも自由だし、行動に移すのも自由だ。誰も止めない。誰も彼らを知らないのだから。すると、どうなるか」

「――歯止めが、利かない？」

灰田は満足そうにそれに頷いた。

「孤立すると行動に対して歯止めが利かなくなり、自分では何でも出来るんだと、勘違いを生む」

「ま、待つて。でも、実際には孤立してる人は人に出来るだけ干渉しないような生き方とかをしてるんじゃないの？ いじめられっ子とか、静かな子くらいしかないでしょう？」

「まずその考えを正したほうが良い。『物理的な孤立と精神的な孤立』は大きく違えるし、いじめられっ子は単なる『逃避』でしかない。人が一般的に使う孤立は逃避なんだよ。孤立はそんな生易しいものじゃない」

今度ばかりは極論だと片付けられない。彼の言の葉はどんどん紡がれていく。

「僕は、そんな孤立のために生きる存在なんだ。類は友を呼ぶ、だが、その類が少なければ友は呼べない。だから作る。集める」

「それが、白椿家で言うところの浄化なの？」

灰田は数秒黙り込んで、静かに首を縦に振った。そして、続けてこんなことを言った。

「まあ、どうせ増えやしないけどね」

そう。今や白椿家にとって友とは死者だ。しかし死者なんて傍に

いてくれるわけがない。彼らの孤立は、一生かかっても解消されない。

灰田は正面から私の横に来て、塀に背をかけた。黒住ほどではないが身長が高いために、私は自動的に見下ろされる形になる。ほんの少しだけ身を引いて、灰田との距離を開けた。

「異常者って、何なのよ」

灰田がどうしてか黙ってしまったので、私は以前から気になっていた質問をぶつけた。横目で彼を見ると、こちらを向いてニコニコと笑っていた。不覚にも悪い意味で胸がときめいてしまったので、急いで視線を外した。

「僕や、白椿のような人間を言うのさ。ある種の天才。常軌から逸してしまった思考回路。自問自答を繰り返し、『自己破壊』を行う孤独者さ」

白椿の中には殺人に対する常識が存在しない。それは、彼らが自らの中にある自分を殺してしまったからだ。世界には私のようにペルソナを被って生きる人もいれば、普通人間が持つ仮面を何一つ持たずに生まれてきた人もいる。仮面とはもう一つの自己に他ならない。それを徹底的なまでに破壊してしまう。それが異常者だった。

「黒住は……彼は異常者じゃないの？」

挙げられた名前にその名が無いことを疑問に思っ、私はまた灰田に聞いた。

「立派な異常者だよ。ただ、彼は物好きなんだよ。ちょっと事情を知りすぎて、その上で僕らみたいな奴らがこの世界からいなくなればいい、そんなことを考えている純粋な悪意の塊だ」

「そう……」

ここにはいなくなった黒住は、やはりそんな存在だった。そりやそうだ。こんな場所に来られる奴が、まともなわけがない。

私は少し落胆しながらも、それを受け入れた。

「ねえ……」

灰田を見上げる。微笑を浮かべているのは、楽しんでいるからじ

やないだろう。

私は白椿さんを救いたいと思う。まるでそれは白椿家と同じ考えのようだと自分で自分を馬鹿にしたくもなってくる。一人が一人を救おうだなんて大それた話、どこかのヒーロー物語の中でしかない。ただ、異常者の話を聞いてやはり思う。彼女は助けを求めている。『自分を殺すこと』に躊躇を覚えているんだ。ならばそれに答え、彼女の望むようにしてやるのが優等生の仕事なんじゃないのか。

「あんた、ちょっと前に私に聞いたことがあるんじゃない？」

「何のことだい？」

知ってて聞いているのはすぐに分かった。本当にいやらしい奴だ。殴ってやりたくなる。

「私にとつて、優等生とは何か、とか」

「覚えていたんだ？ 予想外だね、てつきり話半分、忘れてしまっているのかと思ったよ」

「今、少しだけそれについて答えてあげても良いとか思ってるんだけど、どう思う？」

「是非拝聴したいね」

灰田は声を弾ませてそう答えた。瞬間、私は彼の舞台の上に乗った気がした。フィルムが動き始めた。まただ、今度は私が聞かせてやるって言ってるのに、私はまた彼の舞台に招待されている。でももうそれも構わない。まず、舞台役者がアドリブを利かすことが出来ることを、この馬鹿野郎に教えてやる。

「私はね、結構負けず嫌いなものよ。何事も他人に劣りたくない、自分優勢で話を進めたい、そんな欲求が強い奴なのよ」

「良く分かるよ。君はとても気丈な人だからね」

「でもね、あんたなら分かるでしょう。世界には天才がいる。どのジャンルにおいても優秀者を大きく上回る天才がいるのよ。どう足掻いたって勝てない相手がどこの舞台にも存在する。私は、それにどうやっても勝てなかった」

例えば学校の勉強。例えばスポーツ。例えば美術関連や歌。小学校の頃からそうだった。勉強は出来るのに、一番を取れない。足は速い方なのに、かけっこで一位を取れない。美術や音楽の授業では常に最高評価を取れるのに、賞は貰えない。何もかもを持っていたはずなのに、何も貰えなかった。

「悔しかったわ。でも、その頃から物分りも良かった。頑張っても追いつけない領域に手を伸ばしても無駄だっということを理解してしまった。だから私はね、全てやりきろうと思ったのよ」

「まるで、苦手科目の存在しない優等生のように、かい？」

「そうよ。だから、今ここで言ってやるわ」

私は灰田に詰め寄り、その胸倉を掴んでこちらに引寄せた。端麗な顔面が一センチ先くらいまで近づき、鼻がぶつかってしまいそうな距離。このくらい近くじゃないと、きつとこいつには届かない。

「あんたたちが異常者だろうが何だろうが私には関係ないことだわ。天才はどんなに努力をしても優等生には敵わない。それを教えてあげる」

「それは、どんな風にだい？」

「耳をかつぽじって良く聞きなさい。私は全てやり切る。黒住の好きなようにはさせないし、白椿さんも救ってみせる。——そして、こんな壊れた世界にご招待してくれたあんたを必ず殴る」

「——なら、少し急いだほうが良いんじゃないのかい？」

灰田の口元が大きく吊りあがる。あまりの不気味さに咄嗟に掴んでいた手を離して飛び退いた。灰田の黒目が私を捉える。気が狂ってしまいそうなほど歪んだ視線に、思わず拳を握り締めた。下心満載の下衆のオヤジみたいだ。その欲望に満ちた目に、私は身震いを抑えられない。

「黒住からここの門番を頼まれていたっていうのに、君ったら僕と世間話に華を咲かせちゃって。人から頼まれたことも出来ないように、優等生として失格だと思わないかい？」

「何を……」

「その話の熱中ぶりと言ったら、まるで僕と君の二人の世界を形成していたみたいだよ。ああ、恥ずかしいったらありやしない」

「あんた、まさか……！」

急いで家の玄関に戻る。扉は開いているはず。黒住が閉めていなかったからだ。彼の決戦の舞台へと続く廊下が、外からも見えただった。

しかし、扉は固く閉ざされていた。侵入者を許さんとする本来の家の姿があった。誰が閉めた。今この場には私と灰田しかないければ、風すらも吹いていないというのに、どうして閉まった。

家の扉を閉めるのは誰だ。家主に決まっている。幾ら本人が意識しても、家の玄関を閉めてしまうのは習性だ。なら、誰が入った。決まっているだろう。

「白椿さん……！」

どうして彼女が来たことに気付けなかったんだ。私は家の塀の前に立っていたのに。分からないはずが無い。左右上下どこから来ようが分かる。隠れて玄関の近くから出てきたとしても、この静けさだ、音で分かる。本当に私は灰田との話に熱中していたというのかいや、違っだろう。

「待っていてくれ。僕の世界に君を迎える日は近い。願わくば、その日まで君が君でいられますように」

灰田の声を背中にして、私は白椿さんの家へと突入した。

\*

そこはまるで、『こわれたにんげんの、こわれたせかい』のようだった。延々と続く血の池地獄。足の踏み場も無いほどに赤に染められた廊下は、私が一歩進むたびに水音を立てた。壁には人の悲鳴がそのまま張り付いたような血痕。これが、日常生活で見られるものとは思わない。本の世界だ。ここは本の世界なんだ。そんな現実逃避すらしたくなるような現実。血液の生臭さが鼻腔を付く。私は

涙目になりながら、リビングへの扉を開けた。

「嘘……」

飛び込んできた光景に、思わず息を呑んだ。

死体。沢山の死体。腕の折れている死体。口が裂けている死体。白目を剥いている死体。真っ赤な死体。机の上、椅子の上、床に折れるように転がったり、壁に張り付くように倒れている死体。あの世界で、殺されていた女の子と同じ、真っ赤な死体。山積みになれた大量の肉体は、白椿家の異常性をそのまま表している。その前で呆けたように突っ立っている白椿さんもまた、真っ赤だった。

白椿さんがこちらを振り返る。頬に飛んだ血液が痛々しい。瞳が色を失い、精巧に作られた人形のようなだった。

「先輩……来てたんですね。いなかったからどこにいるのかと思ってました」

「黒住は、黒住はどこに……」

「おっさんですか。その辺に転がってるんじゃないんですかね」

抑揚の無い声でそう言う。左右に視線を走らせて見ると、黒い服が血で染まってしまっている黒住が倒れているのを見つけた。傍にはバットが転がっている。私は白椿さんを強く睨み付けた。

「貴女がやったの？」

「そうですよ。だって、このおっさんったら馬鹿みたいにあたしを解放してくれて親に頼み込んでるんですもん。そんなこと無駄だって分かってるのに、見ていて痛々しかったので殴っちゃいました。因果ですね因果」

「黒住……」

奥歯を噛む。ちゃんと黒住は彼女のために親を説得しようとしたというのに、その当人から邪魔されるとは思ってなかっただろう。私の失態だ。彼女を家に入れることを許してしまった私の失態だ。死体に足を取られながら、私は黒住の傍まで行く。重い身体を抱き起こしてみると、意識が無いだけで死んでいるわけではないのが分かった。息をしている。良かった、と素直に安堵した。

「先輩、想像出来ますか。自分の家に帰ったら、家族の数よりも死体に溢れているって状況に出くわしたあたしの気持ち。気持ち悪いとか、悲しいとかじゃないですよ。もう目の前の光景があまりにも理不尽すぎて、脳味噌が潰れちゃうくらい怒りましたよ。あたしのことなんてやってる場合じゃないでしょうマジ。黒住はここに来て、まずあたしの親を殺せばよかったのに」

真後ろに白椿さんが立った音がした。ぐちゃ、という聞きなれないものだった。

「貴女のご両親は……」

「もう殺しましたよ」

「——っ。どこ、どこにいるの！」

「その辺に転がっているんじゃないんですかね」

実の親を、まるでゴミのように扱った。私は彼女の両親の顔を知らない。こんな有象無象の死体の中から探すのは不可能だ。立ち上がって、彼女の肩をがっしりと掴んだ。彼女の目は確かにこっちを見ているのに、どこか違うところを見ているように虚ろ虚ろとしていた。

「何がしたかったんでしょね、あの人たちは。仲間が、仲間が欲しいって叫びながら周りの人を殺しに殺しまくって、それで自己満足も出来ないで、結局何を待たんですかね」

血が流れていた。多分それは涙だった。

「遅いですよ先輩……私より先に出たのに、どうして私より後に来てるんですか」

「それは……」

灰田のせいだ、なんて言い訳みたいなことを言えるのか。言えない。これは私の責任だ。

「殺しちゃいました。あたしのお母さんも、お父さんも、黒住も死にました」

坦々と述べるような言葉なのに、やけに感情的に聞こえた。そして、

「我慢、出来るわけじゃないですか！」

白椿さんが吼える。私は蛇に睨まれたカエルのように身を縮こまらせた。彼女のどこから今のような声が出た。あの日、私に絡んできた不良が事故にあった日のことを思い出す。あの時見せたような威圧が、今私に襲い掛かってきている。

「こ、こんな状況見てっ、まともでいられるわけじゃないですかっ！ 何ですかこれは。動く殺害スプリンクラーですか？ 出会った人間がひたすらに死んじゃう因果ですか？ 先輩、説明してくださいよ……」

「落ち着きなさい白椿さん……」

「こんな奴に友達なんて出来るわけ無い。そう思いますよね？ 誰が許してくれるんですか、こんな状況。ははっ、笑っちゃいます」

彼女に友達がいなかったのは、彼女が作れなかったからじゃない。こんな元気で良い子が友達を作れないわけが無い。彼女は作らなかつたんだ。わざわざ、有り得ないと分かっている親の言うことを聞いて。確かに自分が人殺しの子どもだから、遠慮していた節はあるだろう。でも、人間はそんな強い生き物じゃない。誰とも関わらずに生きていくことなんて、絶対出来ないはずだ。

白椿さんは、おかしいと分かっているにも両親を信じ続けたのかもしれない。それは、それでも彼らは家族であって、自分に正しい道を示してくれるものだと思っていて、運命に身を任せていたからかもしれない。しかし今、彼女の目の前に広がる光景が、崩れ去った理想に現実を押し込んだ。そして……

「先輩、ほら見てくださいよ。何も悲しくない。人を殺したからって、何も悲しくない。あたしの中には逃れられない運命があるんですよ。ねえ、あたし、今なら先輩のことも殺せる気がします。絶対やれます」

「……私を殺すの？ 本気で？ 貴女が？」  
「はい」

ゆらりと身を動かすと、落ちていたバットを拾い上げた。

「先輩はあたしを助けてくれるって言いました。なら、あたしを助けてください。もうこんなことで悩むのは嫌なんです。今ここで先輩を殺せば、あたしは立派な人殺しになれるんですよ」

本気だ。思考が錯乱しているのか知らないが、白椿さんの目には迷いが見られない。黒住と両親を殴ったことで何かが外れてしまったらしい。

「……やってみなさいよ」

「え？」

「やってみなさいよ。貴女が私を殺す？ 馬鹿言わないで。私は優等生よ。貴女ごときが殺せる相手じゃないわ」

「……っ！」

バットを振り上げるモーション。それが振り下ろされるより早く、私は彼女の脇下に潜り込み、一気に腕を捻り上げた。白椿さんは痛みで悲鳴をあげ、バットを簡単に手放した。

「離してっ！ あたしは、あたしはもう嫌なんです！ こんな世界になんか生きていたくないっ。あたしは、先輩を殺して自分を殺すんです！」

それは自己殺害。どこかの誰かが言っていた、異常者の条件。

「貴女……っ」

私は何かを言おうとした時、後ろで声がした。

「人を殺し、人が殺され、人が死んで……そんな世界に、悲しみが無いのは幻想だ。それは、ただ悲しみたくない人間が作り出した幻想世界だ」

黒住が巨軀を持ち上げて、ゆっくりと立ち上がった。血みどろになった服を軽く払い、汚れたサングラスを外した。

「俺は優等生でも天才でも神でもないから分かる。本当の人間というものは、いかに自分を殺せたとしても、結局は悲しみ、後悔し、間違いを肯定し、成長していくはずだ。違えるな白椿菊乃。貴様は天才でも何でもない、ただの人間だ」

「じゃあこの状況をどう説明するんですか！ あたしは確かに親を

殺して……」

「俺は死んでいない」

生に満ち満ちた目で、そう言った。初めて見る黒住の瞳は、予想よりずっと綺麗だった。それに射抜かれるように白椿さんの言葉が詰まった。

「力加減を間違えたか？ 痛くも痒くも無かった。ならどうだ、そこで寝ている貴様の親は本当に死んでいるのか？」

「だ、だって、あたしはバットで頭を」

「人間を舐めるな白椿菊乃。バットで殴られたくらいで、そう死なないんだよ」

黒住がのそり、とこちらに詰め寄ってくると、白椿さんの身体がぶるりと震えたのが手に伝わった。私は決して逃がさないように強く、精一杯の握力を込めて彼女を止める。

「白椿さん」

「せ、先輩まであたしをいじめるんですか。もうこれでいいんです。もういいんですってば」

私に助けてと頼んだのは貴女でしょう。今更撤回なんてさせない。今すぐ救急車を呼びなさい。まだ貴女は人殺しじゃない」

「嫌っ！ こんな腐った親なんかいらないんですよ！ このまま死んでくれたほうがあたしは良いんです。あ、あたしを助けてくれるつもりなら、このままにしてください……！」

「——私の友達が、人殺しなのは嫌なのよ」

涙で濡れた瞳が私を見上げた。重いパンチのように、彼女の気持ち直撃する。それが零れだす瞬間、白椿さんは私の拘束を振りほどいて逃げ出した。簡単に外されてしまった私は追おうと身体を乗り出すが、ふと気付いて足を止めた。

「黒住、救急車を……」

「その必要は無い。奴らは死んだふりをしているだけだ。ただかバットで殴られたくらいでくたばる口か。おい、いい加減起きたらどうだ。それとも無様な姿を娘に見られて動けなくなったか？」

死体の山の中から、二つの身体が起き上がる。特徴も何も無い、ただの男と女。こんなどうでもよさそうな奴らが白椿さんを苦しめていたのだと思うと、無性に腹が立ってきた。

「まさか、菊乃が私たちを殺そうとしていたとはな。予想外だった」男のほうは頭を軽く掻きながら言った。

予想外。自分たちのことが全く分かっていないことでしか発言出来ない言葉。何をどう勘違いすれば、自分の娘が自分たちを好いていると思うのだろうか。実際目の当たりにして分かる、彼らの異常さ。これが、灰田の言う異常者であり天才？ 有り得ない。こんなのはただの馬鹿でしかない。

「黒住。娘は、お前の差し金か？」

「そんな悪趣味は持ち合わせていない。むしろ、俺が貴様らを殺す上では邪魔なくらいだ」

「ふん、娘を解放しろとやたらと頼み込んできたお前の台詞には聞こえんな。どうせ、娘を盾に使って私たちを脅すつもりだったのだろっ？」

「そう思うのならそう思えば良い」

毅然として黒住は答えた。首を軽く鳴らしている。バットで殴られたのは意外に効いているようだ。

「アナタが、最近菊乃が良く話している先輩ね？」

血で穢れた女が、私のほうを今始めて気付いたというように見る。「そうなんじゃないんですか」

「余計なことをしてくれたわね。アナタ、自分が何をしたのか分かっているの？」

私が、何をしたか、分かっているだって？ まるで灰田の話を聞いているように、右から左に言葉が抜けていく。意味が分からない。こいつは何故、自分のことを棚に上げているんだ。

「あの子は今まで私たちの言い付けをしっかり守って、この世の汚らしい人間共と関らないようにしてきたのに、アナタが、アナタが誑かすからあの子はおかしくなっちゃったのよ！」

ぶっ。

私は知らないうちに笑っていた。これを笑わずに何を笑えっというんだ。可笑しい可笑しい、腹の底から笑える。ああもう、腹が立つくらいに。

「前々から思っていたのだけれど」

ポケットから拳銃を取り出し、その銃口を女に向けた。片手で支えられそうに無かったので、両手でしっかり狙うように構えた。

「日本人ほど、同じ母国語で喋ってるのに通じない種族もないわよね」

「なっ、何を……」

男も同時にうろたえ始め、降参するように手を挙げた。滑稽だ。自分がやられそうな立場になったら、結局こうなるのか。

「貴女たちのことをおかしい人間なんて言わないわ。貴方たちには貴方たちの常識がある。私が口を出せることじゃない。そのくらいは弁えてあげる。ただね、これだけは撤回しなさい」

「な、何よ？」

「白椿さんがおかしくなっただってことよ！」

引き金を引く。直後、轟音、そして閃光。予想以上の反動が腕に響き、拳銃は私の手を離れて後方へ大きく飛んだ。痺れる腕を押さえながら着弾地を探すと、狙いとは大きく外れて部屋の天井に穴を開けていた。

白椿夫妻は怯えて腰を抜かしていた。ガクガクと身を震わせて、死体の山に尻を付いていた。自分がやられて嫌なことは人にやらな。い。こんなの小学校で習うような常識だっていうのに、この大人は良い歳こいてそんなことも知らなかったようだ。

「無様ね本当に。まるでこの世の汚らしい人間みたいな顔をしているわよ」

飛んで行った拳銃を拾う。初めて撃ったが、こんなものは使うもんじゃない。ポケットに戻し、黒住に向き直る。

「悪かったわ。白椿さんを入れないって頼まれたのに。私がしっか

りしていればこんなことにはならなかったかもしれない」

「気にするな。俺が死ななかつただけでした。それに、貴様が白椿菊乃を入れてしまった原因も何となくだが予想がついている」

「そうなの？」

「灰田純一だろう？」

何事も無かつたかのようにその名前を出したことに驚いた。なんだあいつ、なんだかんだ言つて知り合いが多いじゃない。

「まあ、今回はあいつにも感謝せねばならんがな」

「感謝？ 文句は言つても感謝はしないでしょ」

「そのうち分かることだ」

黒住は私に近づいていくと、ケータイを取り出して私のほうに差し出してきた。そして端で怯えている二人を指差した。

「こいつらの安否、伝えた方が良いだろう？」

「……気が利くじゃない」

私のケータイから黒住へメアドと電話番号を赤外線で送信する。そこでふと思う。灰田はケータイなんて持っているんだろうか。

持っていてどうせ一件も登録されてないんだろうけれど。白椿さんのケータイも、もしかしたらそうだったのかもしれない。アドレス帳を見たら私以外の名前が無い。それは嬉しいような、寂しいような。黒住はどうせ百件をゆうに越えているだろう。無駄に知り合いが多そうだし、ケータイが使い古されている感じがした。

「行つて来い優等生。ここは俺が処理しておく」

それに頷く。だが、行く前に一つ聞きたいことがあった。

「ねえ黒住、貴方は何故こいつらを追っていたの？」

「そうだな……色々あった気がするが、貴様に全て取られてしまったかもしれない」

「……なんだか悪かつたわね」

「ふん。さつさと行け」

その言葉に背を押されて、私はこの狂った家を出た。真っ赤な世界。ここから白椿さんを出してやるために。

何だかんだ言って、多分黒住がいなかったら私は何も出来なかったかもしれない。白椿さんとの付き合い方を考えていた私を無理矢理こちらに持ってきた彼。それがわざとなのか、ある種の因果なのかは分からない。ただ、後悔はしていないし、むしろ彼女を助けてやりたいという想いを持たせてくれた黒住には感謝したい。あいつのでかい身体と黒い風貌、そして決して嘘をつかない言動は確かなものだった。白椿さんは嫌っているみたいだったが、私は少なくとも好きになれそうだ。

さて、私は私の仕事を全うしよう。きっと彼女は迷子になっている。手を引いてやるのも、友達の仕事だろう。

\*

彼女との最終舞台は、皮肉にも彼女と出会った場所だった。森野医院だ。相当探し回った。まさか××区を出て、こんなに遠くまで来ているとは思わなかったのだ。気付けば夕刻を過ぎて、日は落ちてかけていた。いつかの灰田の言葉を思い出す。曙光とは常にラストに相応しいと。何故彼女がここに来たのかは分からない。電車乗り継いで、ここまで彼女は帰ってきた。その意味を私は考えなければならぬかもしれない。

森野医院の裏には花壇がある。サナトリウムのような場所を目指しているというのは伊達じゃない。花の名前は一つも分からないが、良い香りがする。今まで私がいた場所とはまるで対極。むしろ、私がここに血の匂いを持ってきたことに申し訳なさすら覚える。それは白椿さん、彼女も同じだろう。いや、彼女はここに染み付いた匂いを消しに来たのかもしれない。まるで、浄化されるようにだ。

白椿さんの小さい背中後ろに立つ。看護師や入院者が周りにいるのに、誰も彼女に気付かない。いや、本当は気付いているのかもしれない。ただ、誰も声をかけないし、視線を向けようとしらない。白椿さんからの強い拒絶。真後ろに立つ私だからこそ良く分かる。血で汚れた服や、可愛らしいポニーテールが寂しく風に揺れる。

「運命からって、どうやって逃れれば良いんでしょうかね」

白椿さんが、自分に似合わないと言っていた運命という言葉を使った。声のトーンは沈みきっていて、目の前に咲いている深い青色の花を思わせた。

「生まれた時から普通じゃないなんて、どうしようもないじゃないですか。物事の因果には原因と結果があるんですよ。なのに、運命はそんなもの無視してくる。子どもは、生まれてくる親を選べない。あたしたちは、生まれてくる世界を選べない」

「そうね。それは、私たちにはどうしようも出来ないことだわ」

「でもそんなの納得出来るわけじゃないじゃないですか。他の人たちは楽しそうに遊んでいて、あたしは家で一人おままごと。何が異常者ですか、何が孤立した人間ですか。あたしは普通の女の子ですよ。お買い物に行ったりとか、誰かと食事に行ったりとか、そういうことをして楽しくなる、普通の女の子なんですよ」

口数が多いのは誰とも話してこなかったから。私にこれだけ依存したのは誰とも遊んで来なかったから。あの日、白椿さんが私と接触してきた時、本当に、本当にどれほどの勇気が必要だったのか、もう私の想像出来る範囲ではないだろう。彼女は、自分の運命に喧嘩を売ったのだ。狂った親から生まれて、狂った生活をしてきた彼女は、狂った運命に唾を吐いた。

「白椿さん、貴女はちよつと考えすぎなのよ」

「考えすぎ……？」

振り返らない。それでも構わない。どうせ時間の問題だ。

「肌を切れば血が出るのは因果。血が出ればかさぶたが出来て治まるのもある意味因果。ただ、人生における人との出会いの因果は、

その枠内に収まらない。百や二百に枝分かれする樹みたいにな、その原因からどの枝へ伸びていくのかは誰にも分からない。例えば私と貴女がこうして出会った因果。その結果に、貴女が救われる未来があったとする。それは、因果？」

「有り得ませんよ。あたしはもう人殺しなんですから」

「いいえ。そんなことはないわ。ただ、私はこれを因果とは呼びたくない。因果はもっと閉鎖的、どうやっても変えられないある種の物理現象みたいなもの。変わってしまうことがある因果なんて、存在しない」

「じゃあなんだって言うんですか」

「運命よ。貴女と私は、出会い、そして貴女は救われる運命なの」

ひつ、と途切れ途切れの泣き声が聞こえる。微かな肩の震えが視界に映る。何故、こうなるまで誰も彼女を助けてやらなかったのだろうか、なんてことは考えない。きっとこれは私にしか出来ないことだった。彼女の世界に招待されたのは、私だけだったんだから。

「運命はね、私たちが後から決めて良いものなのよ。私たち人間の都合によって簡単に書き換えられてしまう、とても脆いもの。逃げる方法なんて、星の数ほどあるわ」

「でも、でもあたしは今までっ」

「そうよ。貴女は今まで何もしてこなかった。運命という因果の鎖に縛られているだなんて変な勘違いをして、ずっとね。でも大丈夫。貴女は私に出会った。それはもしかしたら私じゃなくても良かったのかもしれない。けれど、確かに貴女は運命を上書きしたのよ」

「運命を、上書きした……？」

ついにこちらを向いてくれた。泣き腫らした顔が、柔らかな赤色でぐちゃぐちゃになっていた。私は膝を追って、白椿さんの前に座った。

「貴女は確かに、酷い親の元に生まれてきたわ。それも確かに運命よ。私たちにはどうしようも出来ない運命。ただ、それで人生一つ全部が決まってしまうわけじゃないでしょう？」

例えばその髪型。ポニーテールにするのは、親の意志とは何も関係が無い。例えばマシングンのような口調。親の意志とは、何も関係が無い。

「酷い運命に出会ってしまったのなら、酷くない運命を手繰り寄せなさい。運命なんてものは、そこら中にごろごろ転がってるのよ」

「でもつ、あたしはその運命を殺してしまうかもしれないんです。それでも、それでも先輩はあたしにそうしろって言うんですか？」

「言うわ。実際、貴女は私をそうして手繰り寄せたのだから」

因果なんて無かった。理不尽なまでに強制力のある糸が、私を掴んだのだ。

「あたしは、その先輩を殺そうと……」

「私は死ななかつたわ。それが、結果よ」

殺されるわけが無いだろう。私は優等生だ。たかだか一般人に殺されそうになるほど柔じやない。私を殺すつもりなら、拳銃一丁くらは持つて来いつてことだ。

綺麗な頬に手を寄せ、付いた血を払ってやった。

「この世界は確かに生き難いわ。誰かが苦しんでいても誰も気付かない時もあれば、どうでも良いところで誰かが助かったりもする。たまに、理不尽なまでに救いが無かったりもする。でもね、少なくともあいつらが生きてる世界よりは、可能性があるってもんよ」

「誰もいない世界、ですか？」

「そう。助けを求める相手もない世界なんか、最初から全部狂ってる。だから、私がこつちの世界に引きずり込んでやるのよ」

「な、なんですかそれ？」

「黒住が言ってたわ。人が殺し殺される世界に、悲しみが無いのは幻想だつて。貴女の両親が住んでいたのは幻想の世界よ。まあ、もうそこにはいないかもしれないけどね」

「あたしの親は……」

「最後、酷い顔をしていたわ。あの人たちの言う、醜い人間みたいだつた」

信じられないのか、白椿さんの表情は浮かない。

今納得する必要は無い。いつか彼女がもう一度両親と向き合えるとき、それまでに知っていれば良いことだ。

「自分のことは、自分にしか変えられない。私たちはそのきつかけを与えてやるのか、貴女が変わろうとするのを手助けするだけ」

それはまるで灰田の言う『自己殺害』と同じように。自分のことを生かすも殺すも、全部自分で決めなければならない。ただ、異常者と呼ばれる不幸な奴らは、他の人よりちょっとだけ手助けが少なかった。だから私はその隙間を埋めるようにちよつとだけ手を貸してやる。それだけの話だ。

「先輩、あたしは、変わったんでしょうか」

「貴女は助けを呼べた。それは、今までと違うことでしょう？ 私や黒住みたいな、微妙な外れクジを引いたみたいだけどね。でも――

――

白椿さんの手を取った。彼女の手はどうすればいいのかわからないように私の手の上を彷徨う。私はそれをしっかりと取ってやり、きちんと手を繋いでやった。

「白椿さん」

「何ですか？」

「私を選んでくれてありがとう。貴女と友達になれて、良かったわ」  
本心でそう思う。それはもしかしたら私の自己満足かもしれない。彼女を助けられたという、ある種のエゴかもしれない。ただ、私は確かに今まで感じたことの無い感情を得ていた。誰かに必要とされた。他の誰かではなく、私が彼女の一番に選ばれた。それが嬉しかった。だから私は、こんなに必死になったのかもしれない。もしかしたら、私の友達も、彼女が初めてだったかもしれないかった。

「……う、うううううう！」

突然、白椿さんの臉から大粒の涙がぼろぼろ零れ落ちた。私は慌てて彼女の肩を抱く。何？ 私が何かしただろうか。彼女にける言葉を間違えたかと思って、柄にも無く頭の中がごっちゃになった。

「え、ちよつと、何で泣くのよ？」

「うっうう、ふえ、あ、あれですよ。ほんと、なんていうか」

「な、何よ……？」

「——因果ですよ、因果」

無理矢理作った笑顔。鼻水とか涙とか、色々なものでちよつと見るに耐えなかった。けれど……。

それがあまりにも綺麗で、不覚にももらい泣きしそうになったのは秘密である。

\*

後日談だが、あの殺人事件は何故か闇の奥に葬り去られていた。なにやら灰田の作った世界がどうのこうのと黒住が言っていたが、良く覚えていない。ただ、白椿さんの両親が起こした事件はしっかりと裁かれ、彼らは牢獄へと移住することになった。あの規模の殺人事件だ、死刑を宣告されても文句は言えない。とりあえず勾留されているが、判決など目に見えている。白椿さんは、黒住の知り合いが預かることになったらしい。どんな知り合いかは聞かされていないが、その後の白椿さんの話によれば、とても良い人たちらしい。ただし、風貌は何かかんとか。

黒住はあの事件の後、私に一度だけ白椿さんの両親のことを電話してきて、それ以来全く姿を見ていない。その時の電話曰く、「二ヶ月ほど音信普通になる」とのことだったが、本当に一ヶ月以上連絡が無い。電話をかけても電源が入ってないと通知されるので、何か仕事をしているのだろうと決め付けて諦めた。

初めは学校を休んでいた白椿さんも一ヶ月もすればきちんと戻ってきた。学校で彼女の元気な声を聞いたとき、なんて強い子だと思っただ。きつと色々和我慢しているだろう。ただ、それを全く見せない。わざわざ穿り出そうとも思わないので、私はそのままの彼女を受け入れて、学校生活を謳歌していた。

「委員長ー！」

クラスのドア側のほうから男子生徒の声がした。委員長というのは私のことだ。昼ごはんを同席していた友人たちが行ってらっしゃいと私を催促した。ドア側にいる男子生徒に用件を聞くと、廊下で誰かが私を呼んだらしい。ニヤニヤとしながらそう言う様が気持ち悪くて思わず引いた顔をしてしまったかもしれない。

「で、誰が呼んでるって？」

「ああ、灰田って奴が呼んでる」

「……そう」

どうやら、ついに彼からの出演要請が来たようだ。

## 6話

おままごとは続いている。

ずっと、続いている。

彼女はそれが凄く楽しそうで、人形を前にして色んなことを話している女の子はいつも笑顔だった。ただ、どうしても私にはそれが笑っているように見えなかった。

どれだけページを捲っても終わらないおままごとと同じように、この夢もいつも同じ。見ているこつちがつまらなくなってくる。この世界のエンターテインメントは既に死滅していた。

白と黒のモノクロ世界だったものは、次第にそれが融合し、色をなした。色、そう呼んで良いものなのかは些か疑問だが。

私がすっかり認知出来た時、その色は『灰色』と呼ばれる色になっていた。黒でも白でもない。なんだか中途半端な色。そこで女の子は、永遠におままごを続けている。

そう、私はこの世界を見ていた。

世界は灰色で、言ってしまうえば壊れた人間の、壊れた世界だった。おままごとは続いている。ずっと、続いている。

\*

「全く横暴だと思いませんか先輩！ 課題やってこなかったからって宿題三倍増しにされました。高校生になってまで宿題宿題って、あたしももう子どもじゃないんですから。あー、あの教師の髪の毛何かの因果で禿げないですかねえ、思いつきり笑ってやるのに」

あれからもう二ヶ月の時が流れようとしていた。灰田は相変わら

ず何かとちよつかいを出してくるものの、特別おかしな出来事があったわけでもなく、私はこうして白椿さんと放課後の談笑を楽しむだけの坦々とした毎日を送っている。

超特急で走っていた電車が急停車してしまったような感じ。別に不満は無いが、ほんの少しだけ肩透かしを食らった気分だった。あの日々は何だったのだろう。実は夢だったんじゃないかと考えることもある。しかし、白椿さんがこうして隣で歩く度、それが夢じゃないことを思い知らされる。確かに覚えている、白椿さんの手を握った瞬間のことを。少し気に入られ過ぎたのか、白椿さんはたまに自分から手を繋いでくるときがある。嬉しくはあるが、正直恥ずかしい。男は勿論だが、女の子と手を繋いで歩いたことも無かったのだ。慣れないことはするもんじゃない。

「というわけで、ハンヴァーガー食べに行きましょう。ハンヴァーガー」

変な発音。白椿さんは言いながら私の腕を取った。

「いや、どういうわけよ……」

「立ち話もなんですしってことです」

「何？ 私に愚痴を聞かせるつもり？」

「え、あ、いやー。先輩のことももっと知りたいというかですね、いえこれでももう結構知ってるつもりなんです、やはり会話だけでは分からない未知の部分が。ああごめんなさいなんでもないです殴らないで」

手の平をグーにして見せ付けてやると、白椿さんは大人しく引いた。

「ん。まあ良いわよ。六時くらいには帰らせてもらうけど、それでも良い？」

「流石です先輩。感動したのでハンヴァーガー奢らせてください」

「その変な発音はもういいわよ……」

歩いて数分のところにあるファストフード店。私たちはそこに向かうことにした。

町並みの中を歩いていて、思い出したことがある。二ヶ月前の×区が封鎖されるまでに至ったあの事件。××区の住民は何事も無かったかのようにそこに戻っていた。殺人犯が徘徊しているということで立ち入り禁止になったあの地域に住んでいた人は、誰一人帰ってこなかった人はいなかった。警察も首をかしげたように、私も疑問に思えてしかたが無かった。あの日、白椿さんの家で見大量の死体は何だったのか。確かな匂いと、その存在感を持っていたというのに、あれらは全て街の住民ではなかったということになる。そりゃ、死後どのくらいの死体だったのが分かるほど私も状況に順応していなかったし、そもそもそんな知識も無い。だからあれが昔殺した奴が転がっていたと言われても否定は出来ないが、納得も出来なかった。

こればかりは、その手の事情に詳しい黒住に聞くしかないのだが、彼は今どこかへ仕事に行っていない。真相は解明されていない。「あ……」

ファストフード店の前まで着いた時、白椿さんが間抜けな声を上げた。

「先輩、あたしんちで紅茶でも飲みましょう。今日は凄く込んでるみたいです」

「いやどう見ても込んでないわよ」

「やばいっす。二酸化炭素が席を占領し尽くしています。入ったら死ぬかもしれません」

「意味分らないこと言っていないで行くわよ」

「ああー。死ぬー」

帰ろうとした白椿さんを引っ張って、自動ドアを潜った。店員の「いらっしやいませー」という掛け声が続く。客が数人並んでいた。その一番後ろについた。一つ前の奴がやたらと背が高くて、前が見えない。横で白椿さんが「あわあわ」と到底意識的に出せるものじゃないことを言っている。

「や、やっぱりどこかのファミレスにしましょう先輩！ あー、ハ

ンヴァーガーじゃなくてハンヴァーグが食べたくなってきたな！。  
そういえばもうご飯の時間です。因果ですな因果」

「まだ昼の四時半よ。こんな時間に夕飯を取るの貴女」

「一日六食生活のあたしには常識です。嘘じゃありません、でも、  
主に悪意で出来ているみたいな」

語尾の勢いがどんどん下がった。あいつの真似かと思った瞬間、  
正面から聞き覚えのある声がした。

「俺を真似るとは良い度胸だ白椿菊乃。久しぶりの顔だったからハ  
ンバーガーの一つでも奢ってやろうかと思っていたが、無しだな」  
黒住儀軋。あの日以来全く顔を合わせなかった人物が、そこにい  
た。

相変わらずの黒ずくめにサングラス。ただ、ミラーサングラスだ  
ったものは、普通の黒いサングラスになっていた。元々黒かったの  
にもっと黒くなっていた。

「なんで帰って来てるんですか！ いきなり前触れも無くこんなと  
ころに出てこないで下さいよ！ っていうかなんでこんなとこにい  
るんですか！」

「気紛れだ。ここの味が恋しくなったから帰ってきたとも言える。  
無論、これに嘘は無いが主に悪意で出来ている」

「……なんか怪しいっすね」

「心外だな。俺にだって好きな食い物くらいある」

「ハンヴァーガーがですか？」

発音を直す気は無いのだろうか。そろそろネタとしても聞き飽き  
てきたが。

「そつだ。何か悪いかな？」

「前にゴミだのなんだの言ってたくせに。ゴミが好きな食べ物です  
か」

「ゴミが好きな食べ物ですか、か。表現は的を射ているな。まるで  
俺が好いてゴミと相手をしているように聞こえるが、まさにそれは  
間違いじゃない。この世の腐りきった屑共を片っ端から片付けて行

くのが俺の仕事だ。そう考えれば、俺がゴミ好きなのも頷ける」

「あーあー。もう何でも良いですよ。とりあえずハンヴァーガー奢ってください。それで許します」

「現金な奴だな」

「正直者って言うてください」

謙虚さが無いのと正直なのは少し違う気がする。というかこのくだり、前にも見たような気がする。

少し前までは考えられない談笑の光景。黒住と白椿さんがまともに会話を成立させている姿を初めて見た気がする。あの日以来、白椿さんはなんとなくだが丸まったような気がする。私にも時折見せていた据えた目は、あれから一度も目にしていない。まあ、丸くなったと言っても黒住に対しては色々と思うところがあるみたいだが、そのまま口を挟まずに彼らの下らない話を聞いていると、どこからかケータイの振動音がした。どうやら白椿さんのものだったらしく、彼女は学生鞆の小さなポケットからケータイを取り出した。

「すいません。並んでおいてくれませんか？」

「良いわよ。いつてらっしゃい」

電話を取りながら彼女は店から出て行こうとした。微妙に声が聞こえる。語尾が不自然な敬語になっていることから、目上の人と会話しているようだ。その様子を見て、私は思わず頬を緩めた。以前までたったの一度たりとも鳴らなかった電話。今ではこうして、私以外の人も話をしている。彼女が確かに変わった証拠を見せ付けられているようで、何だか嬉しくなった。

「ねえ、彼女、変わったわよね」

喧嘩相手のいなくなった黒住に、今度は私が話しかけた。

「俺にやたらと刺々しいのは変わっていないがな」

「それは変わらなくて良かったじゃない」

「貴様、本気でそう思っているなら考え直した方が良い。正直に言っつて、やたらと突っかかるのは面倒だぞ」

「私は見ていて楽しいから良いのよ」

「サドだな貴様」

「今更気付いたの？」

「……」

表情が一変もしないから黒住は面白くない。せめてサングラスさえ外してくれば反応がちよつとは分かり易いの。ただ、言葉を失っているのは素直に私の勝ちということで受け取っておこう。何に勝ったのかは全く分からないが。

「その、白椿さんが帰ってくる前に聞きたいことがあるのだけど」

少しだけ黒住に寄って、声を潜めた。

「何だ？」

「××区の人たち、誰一人とも死んでなかったじゃない。あれはどういうことなの？」

さっきまで考えていたことを、タイミングが良かったので黒住に訊いておきたかった。黒住もそれには反応を見せ、ゆっくりとこちらに顔を向けた。真面目に話を聞いてくれるようだ。

「あの一件、どうやって事件を処理したかは聞かないわ。そっちのほうが私にも都合が良いし。ただ、死んだ人が帰ってきたなんてことはあまりに腑に落ちなさ過ぎて」

「貴様が何を言っているのか一瞬分からなかったが、そういうことか。あの場、白椿の家にあった大量の死体は××区の住民ではないどころか、この世界の人間でもない。それは固定観念だな優等生」

「どういうことよ？」

「あの時、灰田には感謝したいと言ったのを覚えているか？」

それに頷く。あの場は急いでいたので気にしていなかったが、今こうしてその名前が出ると、どうしても身構えてしまう。

「貴様も色々ともう知っているだろうから前提の話はしないぞ。あそこに転がっていた死体、白椿が『浄化』したと思っていた死体は全て灰田の用意した人形のようなものだ。命こそあれど、俺たちの知っている人間とは遠く離れたものだ」

「灰田が用意したって……随分と気の遠くなるような想像をしなき

やならないわね。何、あいつ人も作れるの？」

「らしいな。流石自称神と言ったところか。非日常も限度を越えろとファンタジーだな」

「いや、なんか淒く納得してるみたいだけど冷静になりなさいよ。ちよつと頭がついていかないわ」

「言葉通りに受け取らないと、混乱するだけだぞ。『そういう奴もいる』程度で考えておけ。有り得ないことなんて世の中に存在しないのだ。だったら目の前を受け入れた方が楽だぞ」

「極論ね……」

「とは言え、深く考えても答えは出なさそうだ。ここは黒住の言うとおりにした方が懸命だろう。固定観念がどうか言われたが、誰がどう想像したらそんな答えが出てくるのやら。少くくは固定されて欲しい。」

「俺からも貴様に聞きたいことがある」

「何よ？ スリーサイズなら教えないわよ」

「そんなもの後からどうとでも調べられる。俺が聞きたいのは、貴様は灰田にも、白椿と同じように節介を焼くのかどうかということだ」

「冗談を軽くスルーされた挙句、とてつもないカウンターが飛んできた。ただ、私はそれによるめく事は無い。初めから答えは決まっている。」

「当たり前でしょう。乗りかかった船よ。私が嫌がったってどうせ向こうから来るわ」

「貴様は変な奴ばかりに好かれてるな。類は友を呼んでいるのか」

「次、私と灰田を同じように扱ったら殴るわ。貴方が年上だろうが何だろうが関係なく殴るわ」

「以後、気をつけよう」

「……で、何でそんなこと聞いたのよ」

「本当にその時になったら、俺は前回のようには手助けは出来んぞ。それでもやるのか」

「何度も言わせないで。私はやると言ったら全部やり切るわ。別に貴方の力を借りようとは思ってなかったら大丈夫よ」

「そうか。それならそれでいい」

随分と簡単に引き下がられた。てっきり止めてくるのかと思った。こちらこそ、それならそれで言うことは何も無い。

「……この頃、××区に起きたようなことが世界各地で多発している」

相変わらず全く変化を見せない表情で、ぼつりと呟くように言った。

「——逃げるなら今の内だぞ、優等生」

「貴方、まさかここに帰って来たのって……」

そこで店の自動ドアが開き、私は口を閉ざした。白椿さんが電話を終えて帰ってきた。何やら浮かない顔をしている。

「バイトのシフト無理矢理入れられました……。しかも今すぐですよ？ 意味分かりません。今日は先輩と沢山遊ぶ予定だったのに！！」

「無理矢理って……断れなかったの？」

「はい……なんかバイトの子が二人くらい無断欠席してるらしくて、人手が足りないらしいんです」

「最悪ねそれは。んまあ、承諾しちゃったなら早く行きなさい。次の無断欠席した子に仕事押し付ければ良いわ」

「りょーかいしました。んじゃ、また明日会いましょう！」

風が通り過ぎるように素早く白椿さんは走り去っていた。相変わらずの構成材料十割が元気な子である。見ていて微笑ましい以外の何ものでもない。

黒住と二人になった。さっきと同じ状況ではあるが、白椿さんはもう戻ってこないだろう。それに、注文の順番が回ってきている。黒住がレジの前に立ち、メニューを見ていた。しかも、結構長く悩んでいる。店員が注文はまだかと痺れを切らしそうな顔で待っていた。私も見ていて苛々する。図体がでかいので、後ろから蹴ってや

りたくなつた。

「なあ、優等生。ハンバーガーを一つ奢ってやろう」

「……どういう風の吹き回しよ」

「気紛れだ。無論、これに嘘は無いが、主に悪意で出来ている」

「良いわ。受け取ってあげる。ただし、チーズバーガーにしろさい」

「貴様、本当に優等生か？」

「そんなの私が決めることじゃないわ」

「それもそうだ」

言いつつ、律儀にチーズバーガーを頼んでいた。

何だか、負けた気分がして淒く嫌だった。

\*

店から帰り、親への挨拶も適当にして私はベッドの中に飛び込んだ。ふかふかの布団が眠気を誘うが、ここで寝てしまうと夜辛くなる。ポケットのケータイ電話を放り投げ、うつ伏せになっていたのを仰向けにし、蛍光灯からの光に目を細めた。

『逃げるなら今の内だぞ、優等生』

さつきからこの言葉が何度も頭の中でバウンドしている。どこからどこへ逃げるといふのだ。この街からか。それともこの国からか。もつと言つてこの世界からか。どうやって逃げろつていふんだ。地面に穴でも掘ればいいのか。ロケットに乗って宇宙にでも行けばいいのか。どうせ逃げられないっていうのに、黒住がわざわざそう言った理由が見えなかった。

灰田純一。略して馬鹿。

あの粘着質ストーリーカーみたいな奴に、私が気をかけている理由。それこそ、もつと分らない。もはや義務感というか、自分の使命みたいに考えている節がある。個人的な感情に基づく理由じゃない。

白椿さんの時は彼女を助けてやりたかったと思うのに、灰田を助けてやりたいなんてことは微塵も思わない。有り得ない。あいつを救ってやりたいと思うくらいなら、全財産をコンビ二募金にでも放り込んで偽善に酔うほうがましだ。どちらかという嫌いなタイプだ。引つ越せるなら、あいつのいない所へ行きたいくらい嫌いだ。ぶっちゃけて言えば、無茶苦茶嫌いだ。

だけど、何故私があいつをそんなにまで嫌っているのか、その原因が掴めない。自分のことなのに良く分からない。これがまた、恋心とかだったら良かった。流行の属性だとか、そういうのなら良かった。でも違う。会う度に嫌悪感と苛立ちを覚える相手を好きだ何て話はどこにもないだろう。長く話すつもりならエチケット袋とか必要かもしれない。物凄く酷いことを思っているような気がしたが、全部が全部ありのままだった。

「そういえば……」

灰田と言えば、もう一つ考えるべきことがある。というか、こっちのほうที่สำคัญだ。

黒住が最後に言っていたこと。××区で起きた出来事と同じことが、世界各地に起きている。世界というのがどういう単位なのか段々分からなくなってきたが、きっと全国単位だろう。黒住が二ヶ月姿を消していたわけがなんとなく想像出来る。

混ざり合い始めた腐った水が、斑模様を作るように表に出てきている。黒住はこれを隠すのに必死だったのだろう。想像の範囲を出ないが、多分間違いない。

空の上から降りてきたのか、地底から湧き出てきたのかは知らない。しかし、確かにあの時黒住の表現した腐った水は色を持って出てきている。それももう、足どころか腰元くらいまで。視線を落として見てみるだけじゃ分からない。実際にそこに潜って、息をしてみないと分からない。

その水の蛇口を捻っているのは誰か。自分はそこで泳げないからって、自分の住みやすい水を流しているのはどこの馬鹿か。

腹が立つのだ。そう、あいつに対しては頭の上から足の先まで、全部が全部腹が立つ。出来の悪い子どもなんて騒ぎじゃない。空気の読めないがり勉男。そんな感じ。でしゃばって無いで黙ってれば良いのに、やたらと自己主張したがる奴。今ままでそんなこと出来なかったのに、急にやろうとして、それも他の奴の意見なんて何も聞かないで自分だけでやろうとする奴。

「むっかつくわね……」

ベッドのスプリングを使って飛び上がる。むかむかした時には何かを食べるのが一番だ。私は部屋を出ると、リビングまで降りて行った。キッチンには誰もいない。リビングのテレビもついていない。父親と母親は何処に行ったのだろう。夕飯の買出しだろうか。とりあえず私は冷蔵庫を開いて、中にあったハムをそのまま頬張った。

そういえばと思って、新聞紙を探した。確かりビングの端のほうに纏めて置いてあったはずだ。それを見つけて、今日の分を取り出す。机の上で開く。紙の感触が妙に懐かしい。テレビ欄を裏に向けて、見出しが一番大きい順に見ていく。政治経済から下らない話まで、マスコミは何でもネタにしたがる。これを疎ましいと思う人が多いようだが、向こうも仕事なのだと言ひ切るべきだと私は思う。実際にやってきたら私も嫌がるだろうが。

ページをめくっていく。すべてのページを見終わった。無駄にテレビ欄まで見てしまった。しかし、それでも私の望んだ結果は得られなかった。

黒住の言っていたことが本当かどうか確かめたかったのだが、新聞には何も書かれていない。まあ、××区の事件も同様にニュースにはなったものの、私たちが解決した後は何事も無かったように一切触れなかったのだ。どうせどこで起きても黒住が処理してしまっているのなら、新聞の一面に載る事は無いのだろう。

——なんてことが、本当に有り得るのか？

ぶつり、と疑問の腫瘍が脳味噌に出来た。

たかだか一人の男の力で、世界中の事件を闇に葬るだって？ そ

んなことが可能なのか？

常識的に考える。ここはどこだ。小説三百ページの中身じゃない。現実だ。固く閉ざされた因果と、気紛れな風のような運命が支配する世界だ。それ以外のことは、何も起きはしないだろう。

「何を……考えているの」

深刻な自己嫌悪に陥りそうになり、思わず頭を抱えた。何故か歯軋りの音も聞こえる。まさか私のものなのか。それに混じった荒い呼吸が、やけに耳につく。

……おかしいのはどっちだ？

私か？

それとも世界か？

一度湧き出した疑問の水は留まることを知らない。許容できる範囲をゆうに超え、頭を侵食していく。何が起きているのかまったく分からない。目の前の光景が回っているはず無いのに、ぐるぐると回転しているように見えた。

まるで、壊れた世界のようなだった。

「人はどうしても曖昧なものだ。例えば、千人の自分が目の前にいたら、君はどれが本物の自分か当てることが出来るかい？ 僕には無理だ。自分の正体すらまともに分かってない。それが自己ってもんだよ」

いつも通り、音は無かった。

「ただ、どうしたって人は自分を見極めようとする。それは自分の運命だったり、はたまた人間の質だったりする。ただ、これはある意味消去法。自分の中にある可能性という自分をひたすらに殺していく作業。普通の人はずっとこれを上手く行えたり、互いに許容し合えたり出来るんだろう。でも、僕らみたいな持って生まれた天才は、それが出来ない」

だから、自分が満足するまで徹底的に殺しつくした。

それを――。

「それを、僕の灰色の世界では、『セルフディストラクション』、

つまり『自己殺害』と呼ぶんだ」

「あんたは、私がそういう人間だって、思っているのね？」

「まだ気付いていないのかい？ 君は立派な異常者だ。もう変えられない事実だよ」

「まさか。私はただの優等生よ」

「これでもまだ自分を優等生と呼ぶのか。まあ、君がそういう人だつてのは分かってたことだけだね」

傍から聞いたらこいつらは何を話しているんだと馬鹿にされそう  
だ。そんな誰にも伝わらない会話が、こいつと話していたら永遠と  
続く。

「ホームラン三十本は打てたかい？」

「随分と昔の話を持ち出すのね。どう答えたら良いのか全く分からないわ」

「いや答えなくても良いさ。君は立派に打てただろう。三十本ジャスト、きつとやり切ったさ」

喜ばれてはいても、褒められてはいない。

灰田は図々しくリビングのソファー、つまり私の横に腰掛けた。  
尻の下に灰田の体重で沈んだ分の隙間が開く。なんだこいつ、幽霊  
とかじゃなかったのかと本気で思ったりした。

「今一度問おう。君にとって優等生とは何だい？」

その問いは、いつもと同じく唐突で意味不明で、ほんの少しの違  
いがあった。

「そうね……」

だから、私も今ばかりは少し違った。まるで、自分が優等生で無  
くなったみたいだった。

「例えば、あんたの言う天才と比べるならば、勇者と魔王、世界と  
神、そして何より私とあんたのことよ」

案の定彼は笑った。大きく、顎が外れるんじゃないかと思うほど  
にその整った顔をゆがめた。嘲笑しているんじゃないとすぐに分か  
る。彼は、喜んでいる。

いつだっただろうか、私は彼といふ時間にたまに映画の舞台に巻き込まれたような感覚がすると思ったことがある。それは、彼に感じる比喻でもあったのだが、今分かった。これは紛れもなく、彼の世界に巻き込まれていたのだと。比喻じゃない。ここは今、ちよつとしたファンタジーなのだ。

「たまごとにわとりという話があるだろう」

「またも唐突に話を切り出してきた。もう慣れっこである。私はそれに静かに頷いた。

「たまごが先なのか、にわとりが先なのか……。その問いは簡単だ、にわとりが先だ。何故なら神がその前に存在し、神は生物を創造したからだ。それはたまごではなかった。

——では、問題だ。『世界と神はどちらが先に生まれたのか』」  
私はその問いに答えることを延期する。

「それは私への挑戦状と受け取って置くわ。次会つときの手土産にしておいてあげる。覚悟しておきなさい」

「どうせ僕の望む結果になる。君こそ引越しの準備を済ませておいたほうが良いよ」

「言つてなさい」

彼の望む結果とは一体どのようなものだろうか。彼の表情からは全く察せ無い。何か物寂しげな笑顔を浮かべるだけで、まるでほかの顔を知らないかのように一切崩れる気配が無い。

——物寂しげ。

そんな感想を抱いたのは初めてだったから、少し驚いた。でも、どうしてなのかは分かっている。私はようやくこいつと同じ檀上に立ったのだ。今まで操り人形のように上から操作されるだけだった私は、彼の前まで来てようやく話することが出来るようになったのだ。

準備はもう終わったのだろう。待たせ過ぎだ。待ちくたびれて、こちらから出向くところだった。

「灰田純一。答えなさい」

「良いだろう。何だい？」

「この物語は、一体どういう話なの？」

脈絡の無い、自分で言っていてわけの分からない問いだった。しかし、勿論彼には通じた。何故なら彼は――。

「世界の始まりの話だよ」

――神だから。

だからこそ、彼は忘れている。その言葉には、一言足りない。仕方が無いので、私が付け加えてやるとする。

「世界の終わりの話が、抜けてるわよ」

## 7話

おままごとは続いている。

ずっと、続いている。

もうそろそろうざくなってきたので、女の子から人形を取り上げることにした。そうしたら女の子は大きな声で泣き出してしまった。なんというか、物凄く五月蠅かった。

仕方が無いので、私はほんの少しだけ女の子と遊んでやることにした。

遊んでみると、全然可愛くない子だった。でも、そのまま放っておいたらまたおままごを始めそうだったので、私は我慢して付き合ってたことにした――。

\*

もう何が起きても動じない自信があつた。灰田純一が現れ、白椿さんの家で大量の死体を目の当たりにし、黒住から拳銃を渡されてそれを撃った。私の日常観における様々なものが壊されていったのだ。これ以上怖いことは何も無い。そう思っていた。

灰田は消え、就寝し、思いの他良く眠れたその翌日。意識を覚醒させた私は眠気眼を擦りながらリビングへと降りた。朝八時のニュース番組がテレビで流れていて、母親がキッチンで包丁を振るっている。父親はテレビの前のソファで新聞を読み、私は二人に「おはよう」と挨拶をする。なんてことはない日常のページ。洗面台で顔を洗って歯を磨く。戻ってくると、キッチンから湯気が上がっていた。御飯が出来る頃だろう。私は二人の背中を見つつ、椅子に座った。

「……」

一言も無しに、目の前に料理が置かれた。目玉焼きとベーコンが  
良い香りを立てている。ありがとう、と礼を言おうとしたとき、私  
はそれに気付いた。

なんだ、この微妙にずれた感覚は。

回っている。確かに歯車は回っている。ただし、噛みあっては  
ない。荒削りで無理矢理合わせたような歯車が合わさって、耳障り  
な音を立てながら回っている。時計の針がチクタク。フライパンの  
上がジュージュー。テレビの音声は聞きなれた人の声。なら、どこ  
からこの音は聞こえてくるのか。

父親が私の正面の席に座った。そこにも同じ料理が置かれ、いた  
だきますも言わずにそれに手を付け始めた。ギチギチと、胸の奥が  
ざわめく。テレビは電波を受信してきちんと放映しているというの  
に、私の中では砂嵐が吹き荒れている。

心拍数が一気に上がっていく。瞬きが出来なくなる。突然、この  
空間には私一人しかないんじゃないかと、訳の分からない錯覚に  
陥った。父親は私のことが見えているのだろうか。料理を目の前に  
置いた母親はそれが私のためだと分かって置いたのだろうか。自分  
でも理解不能な疑心の芽が顔を覗かせ、時間が高速回転するかのよ  
うに成長していく。

「お、お父さん……？」

「……」

返事が無い。黙々と料理を食べ続け、皿の上にもものが無くなつた  
らソファーに帰っていった。

途端、私は箸をテーブルの上に投げ出してリビングから逃げるよ  
うに出た。足がもつれて転びそうになったのを食い止め、玄関から  
続く廊下に出て息を整えた。

「……だれ？」

違う。あれは父親でありながら父親じゃない。哲学とかそういう  
意味じゃなくて、正真正銘、違うという意味で違う。なら母親も同

じだ。私の家族は基本的に行儀が良い。いただきますも無ければ、ごちそうさまも無い。そんな家に育った覚えは無い。あそこは私が普段いた空間じゃない。扉の向こうには別世界が広がっている。

二階の自室に飛び込み、クローゼットから適当な私服を取り出して着替える。机の上にあるケータイを手にして、ついでに引き出しに入っていたものも意識せずに手に取った。駆け足で階段を降り、玄関を殴るように開けた。

人通りに人はいる。当たり前だ。言葉を考える。ただ、私の目に見えているのは人形の行進。魂も入っていれば、きっと感情もあるのだろう。しかし、歪に作られたそれらでは人の器に合わなかった。そんな感じにぐらぐらした人が通りを普段通りに歩いていった。

舞台だ。

訓練し、洗練された動きがそこにはある。観客から見れば芝居染みでいてもそれは物語の中のキャラクター。自分の世界のものではないと知っていても、見ているのは人間。投影したのはそれらしく表情と動き。本物じゃない以上、本物と同じにはなれない。

つまり、ここには誰もいない。私以外誰もいない。世界がどうなってしまったのか、それを受け入れるのに時間をやりたい。頭の中がぐるぐる回る。どこかへ逃げたい。一時一分一秒でもここにいたくない。

こんな世界で私は生きていけるのか？ 絶対に無理だ。ここじゃあ、私は私でいられない。

行く当ても無く彷徨っていると、ポケットに微振動が伝わった。ケータイ電話が鳴っている。取り出そうとしたとき、微かに自分の手が震えていることに気付いた。私としたことが、現状に恐怖を抱いているらしい。笑ってしまう。あれだけの出来事を目の前にしてきた私が、まだ未だにこんな感情を持ち合わせていたとは。

「……はい」

電話番号と送信者はあえて確認しなかった。

『……学校だ』

「黒住ね。これは一体どうということなの」

『ここで語ることは無い』

「そう……体育館裏にでも行けばいいのかしら？」

『素直に学校の前にいる』

問答無用に電話が切れる。勝手な奴だ。

平日なので学校は普段通りなら学生に溢れているはずだった。ただ、私が到着したとき、人の気配はほとんど無かった。虚しい校舎。廃屋が何故怖いのかの理由と直結する虚しさ。本来そこは人が集まる場所だというのに、自分の身体の一部を無くしてしまつて呆然としているように佇む建物。隙間だらけの空間に風が通り抜け、ひゅうひゅうと音を立てていた。

人の気配がほとんど無い。つまり、ほんの少しはある。

校門の前、まるで番犬のように立っている黒住儀軌。加えて、彼に抱えられている白椿菊乃。相変わらず、この二人との因果は尽きないらしい。

「逃げないで来ちゃったわ。何か言うことはある？」

「無い」

刻むような短文で黒住は答えた。いつもと違う雰囲気、少しだけ気圧された。

「白椿さんはどうしたの？ 寝ているみたいだけど、まさかまたあの人たちが……」

「……」

何をしている。私はそこで起こっていることに目を疑った。

黒住が言葉に答える代わり、白椿さんを私の前に放り投げた。確かな体重がアスファルトに落ちると、彼女の身体から見慣れてしまつた赤い液体が流れ出していることに気付いた。そうなれば因果は繋がり、鼻腔には血生臭い香りが。私の身体は自動的に彼女へ。

「……さけないでよ」

搾りだすような声だった。自分でも信じられないくらいの憤りを感じていた。何を、どうというふうに日常を過ごせばここまで理不尽

な光景に出くわせるだろうか。

しかしそこで私は自分自身の思考のおろかさに気付いて舌打ちした。もう、シヨックよりも憤慨のほうが勝っている。そんな自分が一番おろかなんじゃないかとも思う。一度深呼吸をする。こんな状況で落ち着けというほうが無理だが、目の前の男はそれを催促しているように思えた。

「……これは、流石の私も貴方に向けて殺意を覚えかねないわよ……黒住」

銃口から微かな煙が上がった拳銃を持って毅然と佇む黒住は普段と変わらない。何故黒住にはこんななまで変化が無いのか、今更ながら気持ち悪く思えてきた。曲がりなりにもここ一ヶ月の間、行動を共にしてきた白椿さんがこんな目にあっていて、何故冷静でいられる。こいつは一体、何を考えている。

「灰田が昨日現れて、きつと私の世界は変わってしまったんだとは思ったわ。日常なんか、もうどこにも無いんじゃないかって。思えば、白椿さんと一緒にいることすら日常とは違うんだから。でも、でもね、流石にこれは無いんじゃない？」

「……貴様は、悲しんでいるのか？」

「……なんですって？」

まるで哀しんでいなさそうな奴に、そう言われた。

「貴様が白椿菊乃が死んだことによって腹を立てているのは確かだろう。だが、そこに彼女の死への悲しみはあるのか？」

「そんなの……当たり前じゃない」

苦し紛れにも聞こえただろう。だが、私自身どう答えて良いか分からなかった。悲しいのか、悲しくないのか分からなかった。でも、多分悲しいと思った。それはどういう意味での悲しいなのか、やはり分からなかったが。

黒住は見れば異常な冷静さをかもしだしている。どこか遠くを見ているような視線に、拳銃を持った手は人形のように動かない。自分の犯した行為がまるでその腕の最後の仕事のように、終わった無

機物のような雰囲気が出ていた。それでも彼が拳銃を床に落とさないのは何故だろうか。彼は首だけこちらに向けて言った。

「この世界は壊れている。壊れた人間しか住めない、壊れた世界になっちゃった」

諦観したような声。虚しい校舎に虚しく響く。

「結局、貴様も俺も壊れているということだ」

「どういうことよ……？」

「この世界の住民で、まともに『人間』をしているのは、元々この世界に順応出来る奴だけだ。それは俺や貴様であって、白椿菊乃ではない。貴様もここに来るまで、世界の有様を見てきただろう。白椿菊乃もそういう存在だ」

あの微妙に噛み合っていない存在を思い出す。白椿さんは今、その状態にあるということか。でも、だからと言って殺した理由にはならない。

「何故、彼女を殺したの」

「貴様はいいつのそんな姿を見たかったのか？」

「だからって殺すの？」

「貴様は何故そんなに憤っている。自分が助けた『結果』が壊されたからか？ それとも、偽物だと分かっているても白椿菊乃の姿をしているこれが壊れているからか？」

「貴方はどうしても私が狂っていることを前提にして話したいみたいね」

「貴様こそ、いつまで自分の仮面に嘘をつき続けるつもりだ。自分がまともな奴だと思っているのか？」

嘘を一度もついたことの無い奴が、そう言ってくる。私の胸にその言葉は全く痛くない。私は虚実を述べているつもりは毛頭も無いのだ。ただ、まともかと聞かれれば、言葉を濁さずにはいられないが。

「自分がまともだと思うなら、何故今ここで、先日のように救急車を呼ぼうとしない。何故うるたえない。何故泣き出さない。何故呆

然としない。……何故、順応しようとする」

彼が言った事。最後の一つを除いて全て身に覚えが無い。シヨックではあった。ただ、そうなることに対して非現実的だとは思わなかった。

「曲がりなりにも人が死んだのを目の前にして、俺たちは何故こんなにも坦々と話を続けている。俺はいい。俺にはそもそもそんな感情は無い。だが貴様はどうだ。死に慣れたとでも？」

「私は……」

「——優等生だから、とでも言うつもりか？ 優等生だから常に冷静であるべきだ、とでも思っているのか？ そうだ。それこそが貴様の異常性。他の人間と異なった、異常者である部分だ」

撃たれていないのに、私はぐっと押される感覚を覚えた。逃げ出したい気持ちを白椿さんを強く抱えることで抑えた。黒住の黒い体が、数倍大きく見えた。

「自分でも分かっているんだろう？ 貴様の優等生は、とつくに破綻している」

「……」

そうよ。そんなこと、ずっと前から分かっていたわよ。言葉を飲み込む。

分かっていた。私は私自身物分かりが良いのを分かっているように、自分が破綻していることにはとつくに気付いている。しかしそれを隠す。それを人のペルソナと言う。

世の中で言う優等生は、まるで自分の欲を抑えて人当たりのいいようにしているようなイメージがある。何枚もの仮面を使って、他人とのコミュニケーションを円滑に進める。勉強が出来るのはその一環。努力するのはその一環。優等生はそういうイメージがあるから、何だか計算高くて悪質なもののように思われる。八方美人で、それが全てみたいなの。

いつからだっただろうか。それが普通、『不可能』なんだと気付いたのは。そして、なのに自分には『可能』なのだと思付いたのは。

一番を取ることが出来ない。だから取らない。

あの子とは馬が合わないと思う。だから関らない。

私の『全部』とはそうして減っていく。最終的には私の出来ることしか残らない。当たり前だ。出来ないことをやろうとして他が疎かになつたらどうする。それこそ私の優等生としての破綻を指す。

しかし、その取捨選択の技術が他人に難しいことだったということに気付かず、私は常に優等生を気取った。そのうち私は、他人が真似ることの出来ない優等生になっていた。

——その幻想を抱いた。

だから私は一層優等生であろうとした。そのうち、優等生になっていた。ここだろう、灰田が私に目をつけたのは。

自分が異常者かと聞かれれば、今なら異常者だと答えるだろう。天才と世間から呼ばれる分類は例外なく異常者なのだ。他と違って桁違いの能力を持つ人間は異常者に違いないのだから。

ならば、私は何なのか。言われるまでも無い。

「貴様は、『優等生の天才』だ」

その言葉には、異様なくらいしつくり来た。

「他人と順応することを常に吉とし、そうあるべくして行動する異常者だ」

「まるで悪口みたいに言うわね。ちょっと傷つくわ」

「そのくせ貴様はエゴの塊だ。貴様は模範であろうとするから、自分の居場所に模範以外のものがあると徹底的に矯正しようとする。だから、ここに来たのだろう？ だから灰田に関ろうとするのだろう？」

「そう……そうだったわね。貴方に言われて初めて気付いたわ。どうして私が灰田に関ろうとするのか」

灰田があまりに異常だったから、私は放っておけなかったのだ。あいつがあのみまでいたら、五月蠅くて眠れやしない。放っておいたら拗ねて暴れだし、周りのものを壊してしまうかもしれない。だから私は仕方なく、あいつと遊んでやるのだ。

でももう終わりだ。そんな甘ったれた教育みたいなことをするつもりはない。私はどちらかというとスパルタ気質なんだ。馬鹿は殴って矯正するタイプなんだ。それだけは、どうしよもなく変えられない『私』である。

「自分がどんなに異常だったか理解したか優等生？」

「ええ。本当の自分にデビューした感じだわ」

「そうか。なら——」

黒住は腕を上げ、今だ熱を持つてゐるだろうそれを私に向けた。

「ここで死ぬ。異常者」

発砲。左側の頬を何かが掠めて行つた。私が撃たれたと認識する前に、鋭い痛みが走る。耳鳴りが治まった頃、頬に生温いものが伝わった。それを指でなぞり、悄然と確認しながら私は言った。

「そういえば初めに聞いておくべきだったわ。貴方、どうしてここにいるの？」

「異常者は俺の敵だ。殺すべき仇だ。貴様がたまたまそれだったから、こうして前に現れた。そこに因果らしきものがあるのかどうなのかは、俺には分からないがな」

「自分が異常者なのに、異常者を殺すのね。同属嫌悪って奴かしら」  
「まさに言い得て妙だな」

ふん、と鼻を鳴らした。灰田と一緒にたにされるのも嫌だが、黒住と同属に扱われるのも正直良い気分じゃない。むしろ嫌だ。こんなごついおっさんと一緒にされてたまるか。

「貴方、私よりお節介なんじゃないの？」

「何だと？」

「貴方のことだから、きっと異常者を敵だと呼んでいるのには嘘は無いんでしょうし、多分その理由にも整合性があるのだと思うわ。ただ、その言動は悪意で出来ている。違う？」

黒住の台詞を丸パクリして、そう言った。

彼は目を丸くして——多分だけど——それを聞いていたが、私と同じように鼻を鳴らすと、拳銃の檄鉄を起こして再び私に照準を合

わせてきた。

「……自分が認められないんでしょう、貴方」  
「――」

黒住の反応が確かに変わったのを見た。とりあえず銃口から鉛球が飛び出すことは防いだみたいだ。内心ほっとため息をつき、言葉を続ける。

「私は貴方に自分を認識させられた。その報復として、ちょっと受け取りなさい」

「言ってみろ」

「自分を必要以上に殺し天才と化す。それをこの世界で『セルフデストラクション』って言うらしいのだけど、貴方はそれを間違いないで行っているわ。貴方が言う通りここでもとでいられるのだから、貴方も何らかしらの天才であるわけよね」

「……」

前に、黒住は自分は天才でも神でも無いと言っていた。それは、私から聞けば嘘だ。ただ、黒住は嘘をついたつもりは無いんだろう。彼は自身を天才だと認めていない。いや、自分が何の天才なのか分からなくて、認められなかったんだろう。

「白椿さんの両親を仮に『人殺しの天才』とするわ。他人の命を奪うことを全く厭わない。そもそもそれに悪の意識すらない。今、貴方が白椿さんを殺したようにね」

例えばそれが灰田の作った人形だろうが、確かに白椿さんなのだ。

黒住は、それを殺した。

「そういう意味で言えば、貴方もある意味『人殺しの天才』。でも、貴方はまたこう言った。人を殺し、人が殺される世界に悲しみが無いのは幻想だって。つまり貴方は、この世界においての人殺しの意味を知っている。知っててなお、貴方は人を殺せるのよ」

「そうだ。俺は人を殺すことが悲しみを伴うと知っている。だが俺はこうして悲しんでいない。それは何故か？ この世界が幻想だからだ。俺の住んでいる場所が、幻想世界だからだ」

「違うわ」

全然違う。灰田も馬鹿だし白椿さんの両親も大概だったけど、こいつも同じだ。異常者ってやつは、やっぱり不便な存在らしい。何故、どうしてこいつらは皆して、自分のことに目を向けようとしなのか。どうして世界の方がおかしいんだと認識しようとするのか。それもまた、『自己殺害』というのかもしれない。

「貴方はね……『嘘つきの天才』なのよ。それも、自分に対して、異常なまでに徹底的にね」

確かに黒住は嘘をつかない。そう、他人に対しては。

だから黒住が人を殺しても悲しくないというのなら悲しくないのだろう。ただし、本当に悲しくないのかと言えば、きっとそれは違う。黒住は確かに悲しんでいる。自分がどう足掻いても気付けないくらい綺麗な嘘に纏められているが。

「貴方の中身が幻想なのよ。こつも考えられてくるわ。貴方は実は天才じゃない。貴方は自分が一般人であることに対して自分で嘘をついている。実は普通なのに、普通じゃないと嘘をついている。そんなこと普通は出来ないのだから、やっぱり天才なのでしょうけどね」

「俺が、嘘つきだと貴様は言うか」

「そうよ。何が『死ぬ』よ。どうせ殺すつもりなんか無いくせに」  
黒住は言葉を吟味している。それでも銃口がこちらから外れないのは、まだ彼が嘘を続けている証拠だろう。

「お節介なのよ。自分に正直になれない奴が、他人に正直でいてどうするのよ」

はっ、と鼻で笑ってやった。

その瞬間。二発目の発砲音。今度は予想外過ぎて、心臓が口から飛び出すんじゃないかってくらい跳ね上がった。キーンという耳鳴りがただだけで、弾は彼方へと飛んで行ったみたいだ。ただ、銃弾は当たっていいなくとも、心臓発作で死ぬかと思った。まだ心拍数は治まらない。

「俺は貴様を殺したい。無論これに嘘は無いが、主に悪意で出来ている」

「つまり、ただの脅しなんですよ」

精一杯の虚勢。力の無い私は、言葉で対抗するほか無いのだ。口を失ったら負けだろう。

「教えて。何故貴方がここに私を呼んだのか。どうせ白椿さんの死体を見せ付けるためだけじゃないんですよ。そして、貴方はこれ以上私に踏み込んで欲しくないと思っている。違う？」

「聡明な奴は探偵小説には必要ないと、これほどまでに強く思ったことは無い」

黒住が拳銃をついに下げた。グリップを握りこんでいるのは意地だろうか。どちらにせよ、私は死への緊張感からようやく開放されたことになる。知らずの間に肩に力を入れていたせいか、やけに凝っていた。

「これは、ほんのちょっとした嫉妬心の話だ」

「へえ、貴方が」

黒住にそんな可愛らしい感情があったなんて意外だった。黒住はそのまま坦々と語る。

「異常者を殺す。それが俺の全てだった。そもそういう世界で生きてきたのだ。俺は嫌気が差すほど異常者を見てきた。時に同情心も芽生えたが、何よりも目障りだったというのが一番だ。誰かを殺すことしか脳に無かった俺のようで、激しい嫌悪感を持っていた」

黒住にどんな過去があったのかは分からない。ただ、彼もまた、『そういう場所』で生きてきた人間なのだと知った。

「自分が死んでも誰も気付かないし、誰も悲しまない。それなら、俺と同じあいつらも死んで構わない存在なのだと俺は気付いた。だから俺は奴らを殺した。それが奴等に対する救いであり、何より『自分を殺している』ようで俺の満足をも得られたのだ。だが……」

黒住は空を仰いだ。

「俺の前で泣いた奴がいた。信じられなかった。俺と同属の人間が

泣くことが信じられなかった。あまりに混乱した拳句、やはりそいつを殺したんだ。そうしたらどうだ、何故か俺が泣いていたんだ」  
黒住のサングラスは嘘をついた。俺は泣いてなんかいないぞと、嘘をついていた。

「知ったのだ。まだ、救いようはあるのだと。だが、俺がそれを実践できたことはただの一度も無い。そう、嘘だったのだ、俺が泣いたのは」

初めての嘘。誰につくでもない、自分自身への嘘だった。

「結局救えない。異常者は異常者で、どうやっても変わることが出来ない。そう、思っていたのに……貴様が現れた」

「私……？」

「貴様が、俺が白椿を殺すのを、止めてしまった」

黒住があの日、置いて行った拳銃。私の手に渡ったことによって、黒住は白椿さんの両親を殺すことが出来なかった。いや、この巨体にこのキャラだ。殺そうと思えば殺せただろう。

だが――。

「一縷の望みを、持った」

「それが、私？」

「そうだ。そして結果として、貴様は白椿を救った。俺に出来ないことを、貴様はやったのけた」

「嫉妬をしているっていうのは、そういうことなの？」

「ああ。だからこそ、貴様をこれ以上先に行かせたくない」

虚しい校舎。黒住が塞いでいるその先には、誰もいない校舎がある。そうか、ここにいいのか。あいつが、あの男が。

「優等生、今一度聞こう。本気で行く気なのか」

「行くわ。誓ったもの。必ず殴るってね」

「俺がここを通さないと言ったらどうする」

「その時は……」

今朝、何気なく持ってきたそれを、後ろ手に取り出した。

「無理矢理通らせてもらっわ」

今度は私の番。銃口は私から黒住へと移る。

白椿さんの家の前で渡された拳銃。すっかり返しそびれていたもの。人の手には余る重量と、破壊力を備えた人殺しの道具だ。

なんとか威圧したつもりだったが、何かが足りない。何だろうと考えていたら、そうだ、重要なものを忘れていた。ごほんっ、と一度咳払いをして、私は言つてやった。

「無論、これに嘘は無いが——主に悪意で出来ている」

「ふん。何だ、ただの脅しか」

「そうよ。だからそこを退きなさい」

黒住は動かない。ただ、逆転した立場上、彼には言葉があつた。

「誓え」

それは、ある意味銃弾よりも重い一言だった。

「灰田を救うと誓え」

あの馬鹿野郎を救えと、黒住は言った。

「この先にいるのは自称神だ。貴様に奴が救えるか。俺に出来なかつた全てのことを、貴様はやり切れるのか？——逃げるなら今の内だぞ、優等生」

彼の中にどんな本心があつて口にした言葉なのかは計り知れない。ただ、今更になつてそんなことを言い出す辺り、彼も心配性らしい。そんなこと、言われなくても分かっている。私は、優等生だから。

「任せなさい。やり切つてみせるわ」

「そうか。それなら良い」

ドンッ——。

「え……？」

再三の銃声。ただ、今度ばかりは私も啞然とした。

いや、嘘だ。私は引き金を引いていない。じゃあ誰が……。

言うまでも無い。黒住だ。証拠に、黒住は膝を折つてその巨軀をアスファルトの上に打ちつけた。

「何をして……っ！」

駆け寄ると、太股の部分から大量の血が流れ出しているのが見え

た。足を自分で撃つたらしい。苦しそうな呻き声を上げながらも、決してその傷口を押さえようとはせず、私の方をサングラス越しに見た。

「嘘つきは泥棒になる前に殺したいくらい嫌いなんだ」

「だからって、自害をしようとするなんて……」

「だが出来なかった。いや、全くもって情けない話だが、やはり死ぬのは怖いな。胸や頭を撃とうと考えていたのに、妥協してしまっ  
た」

「貴方、もしかして……」

黒住はそれ以上先を否定するように、首を横に振った。

「貴様はどうして、俺に銃口を向けられて怖気づかなかった。俺は撃つぞ」

「私よりも貴方のほうが優れた人間に見えなかったからよ」

「くっ、ははっ。言ってくれる……」

冗談だったのだけど、黒住はそれを笑い飛ばした。

「俺はもう動けない。行きたいのなら行け。貴様にしか出来ないことを貴様がやるんだ、優等生」

「……分かったわ。ただ、止血だけはさせて。このまま放置したら本気で死ぬわよ」

「それも無しではないな」

「無しよ」

私は自分のハンカチを出して、黒住の太股に巻きつけようとするが、その図太い足を一周するだけの面積がハンカチ一枚には無い。

「何か布を持ってない？」

「人殺しの道具以外は持たない主義だったんだ」

「仕方ないわね。上着借りるわよ」

「……おい」

無理矢理上着を脱がして、その袖の部分で黒住の太股を強く縛った。応急処置にもならないだろうが、無いよりはましだろう。ぼつり。

空から一滴の雫が落ちてきた。それに続くようにして水滴が落ち、次第に雨になっていった。黒住のように仰いで見れば、そこには無限の曇天が広がっていた。本来あったはずの青い空が、灰色に満たされていた。閉じてしまったはずなのに、私には開いたように見えた。

「黒住……」

どさりと音がして視線を落とすと、黒住が仰向けで倒れていた。それで格好つけたつもりなのか。私は彼の横で中腰になると、そのサングラスの奥に向かってこう言ってやった。

「貴方、泣いてるわよ」

「馬鹿か。これは雨だ」

## 8話

負傷した黒住と白椿さんの死体を校内に運んだ。その二回の往復作業だけですっかり体力を使い果たしてしまった気がする。人とはこんなに重いものだったのかと初めて知った。片足を打ち抜いただけの黒住を運ぶのは肩を貸すだけでよかったが、白椿さんは負ぶっていくことになった。体温が失われた肉体。それが例え偽の存在だとしても、身体に密着させれば分かる確かな死の感触。こんなものが救いになるなんて考える奴はどうかしている。改めて私はそう思う。

「拳銃は借りていくわよ」

「好きにしる」

玄関前の廊下に身体をぐったりと横たえた黒住。彼から渡された拳銃は、まだ使えそうだ。

雨が窓を叩いていた。この校舎に確かに存在しているものの一つ。雑音ながらも雨音は静寂を掻き消してくれている。

そういえば、灰田と出会ったあの日もこんな雨だった。嫌になるくらいの大雨。そこであいつは自分のことを「とある世界の神さま」と名乗った。冗談じゃなかったらしい。証拠として、私は彼の世界を歩いている。信じられない話だが、現実だからどうしようもない。灰田の姿を探して校内を練り歩いた。階段を上り、まず自分の教室へやってきた。並べられた椅子と机。総勢四十個のそれらには、誰の姿も無い。黒板の端には近日の予定やら、次回のテスト範囲が白いチョークで書かれている。窓際にある自分の席へ座った。変わらない。私が普段生活している風景と何も変わらない。何も無いというただ一点を除けばだが。

思えば、灰田は学生だったのだろうか。学校で度々顔を合わせたか、そんな生徒がいるという話は聞いたことがない。灰色の髪をしていれば自然と目立つだろうし、あの美形だ。きっと女子たちの噂

にもなっただろう。でもそれは無かった。誰にも気付かれなかったのか、そもそもいなかったのか。あの日、購買部の前で会った灰田は何故そこにいたのだろう。私と同じく昼食を買いに来たのか、それとも私のような人間を探していたのか。はたまた、何もすることが無かったから徘徊していただけなのか。どれも有り得そうで、想像に困った。

一つ一つの教室をしらみ潰しに回る。そうして辿り着いたのが、図書室だった。

学校の中で、音楽室や理科室よりも特異な雰囲気を放っているのが図書室だと思う。蔵書に埋め尽くされた世界。そこでは様々な物語が混在し、奇妙な渦を作り上げている。音楽室ならば演奏することを目的とした空間があり、理科室ならば実験を目的とした空間がある。だが図書室はどうだ。勤勉に励む生徒がいれば、寝ている生徒もいる。漫画を読んでいる生徒もいれば、哲学書を開いている生徒もいる。各々の異なった世界観が、蔵書という基盤たる世界に繋がって混沌を生み出しているように思える。だから、私はここが好きだった。

ここには世界の扉が沢山開かれている。約二時間弱の旅を、いつでも与えてくれる。私の知らない世界、知っている世界、知ることの無い世界、それらが手を伸ばして待っている。

そうだ。私が二年生に上がった直後、ここに訪れたのもそんなものを求めていたからだ。新学期、年齢も学年も上がったというのに何も変わり映えしない世界。変わったのは教科書と数十名のクラスメイトだけ。別に不満は無かった。だってそれは当然のことだから。ただ、だからと言って刺激も無しに過ごせるほど暇な世界に生きたくもない。

だから私は、ついその本を手にとってしまったんだと思う。

図書室に入ると、ただっ広い部屋に一人、見覚えのある灰色の髪を携えた男が座っていた。その手元には一冊の本。皮肉にもどこかで見たことがある背表紙だった。

「この本に貸出記録がついたのは、これが最初で最後みたいだ」

「『これわたにんげんの、こわれたせかい』ね。作者は一体何を考えてそんな本を書いたんでしょうね。私の人生の中でもトップクラスに詰まらない本だったわ」

「へえ、最後まで読みきったのかい？」

「やり切らないと気がすまない性質なのよ。例えばどんな詰まらない話だろうと、読み切るまで真相は分からないじゃない」

「君らしいね」

灰田は立ち上がり、今度は机の上に座って私と向き合った。しかし、そこにいる灰田はまるで灰田ではないように思えるほどに衰弱している。元々おかしい人間ではあったが、まだハツラツとした青年らしき容姿は持ち合わせていたはずだ。だが、今はやつれて、傍から見れば死人のようにも見える。やつとのことで身体を起こし、ぐったりと首をうなだれている。視界が定まっていないのか、意識が無いのか、魂の無い人形かのごとく瞳には生気が感じられなかった。

「世界は完成したよ。僕ら異常者の生きる世界だ。黒も白も霞む、灰色の世界だ」

出来上がった作品を披露するように、両手を広げて世界の光景を見せた。外観を私の世界に似せたのは、彼なりの心遣いだろうか。それとも、それしか知らなかったからだろうか。私が立っている場所はやけにリアリティに満ちている。私がいつも図書室で感じていたもの、それがここにもしっかりとある。灰田の世界の再現率は高い。人間の形をした異常者が住みやすいように造られている。

だが、殻だけが似ていて、中身はとんだパラレルワールドだ。灰田の努力は認める。彼がどれだけの苦労と苦悩を超えてこの世界を構成してきたのかは私の知りえる部分ではないだろうし、別段知ったところでどうでもいい話だ。重要なのは『そんな世界を作ってしまったこと』だ。

私が今立っているこの場所が、空想のものなのか現実のものなの

か判断する材料はどこにもない。もしかしたら地球は壊滅的なまでに温暖化が進んでいるかもしれないし、形だけ現代で氷河期に突入する前なのかもしれない。何にせよ、今までの場所と違う場所、違う世界を作ってしまったことがこいつの最大の間違いであり、私がただしてやるべき部分。

「神気取りね。胸糞悪いナルシストなんかよりもっと悪質に気持ち悪いわ。今の一言に三度『悪』って入ってたくらいに最悪にね」

「酷い言われようだなあ。僕は真実を語っているだけだ。僕がこの世界を作り、そして人を作ったんだ」

嘘だ。この世界に人なんてものは一人もいない。世界に順応した私や黒住のような異常者が、もしくは順応出来なかった歪な壊れ物か。どちらにせよ、まともじゃないものしか存在しない。

「頬っ面をしばいてやりたいわね」

ため息と同時に、考えていたことが思わず口に出てしまった。灰

田はそれに怪訝な表情を仕向けた。

「僕のかい？ 何故？ この世界は君も望んでいた世界のはず。同属のみが集まる世界。何ものも自分と異なる生物はいない。白椿なんかは飛び跳ねて喜ぶだろう」

「……待つて、頭が痛くなってきたわ。何、あんたは私がこんな世界を望んでいると思ってたの？」

「そうさ。君のためというわけではないが、異常者は皆、こういう世界を望んでいる」

「有り得ない……何が有り得ないって、あんたの勘違いの仕方が有り得ない。どうしてあんたはこんな世界を創生したの？」

すると灰田は突然自慢げに表情を綻ばせた。それは今まで見てきた灰田のものではない。まるで初めて作ったものを褒められた子どものような無垢なものだ。

「この世界は『世界初』だ。誰にも作って来れなかった完璧な世界。善にも悪にも傾かない。全ての人間は争わず、喧騒は存在せず、それでいて何もかもをさらけ出す事が出来る世界。多少急ぎ足で綻び

はあるだろうけれど、そんなものは後で修繕すれば良い。そうだろう？」

訳の分からない問いを私に投げかけてくる。そうだろう？ とか聞かれても答えようが無い。

「そんな叶いもしない理想の前に、その人間とやらはどこにいるの？ 残念ながら、私がここに来るまでの間、出会ったのは黒住と空っぽの白椿さん。それと話かける価値も無さそうなモブくらいよ。これらを人間と呼ぶの？」

「君の知っている人間とは違うだけさ。この世界に彼らは順応したんだ」

「異常者に、順応したってこと？」

「そつだよ」

順応しなかったから壊れてしまった人間を、灰田はそう言った。馬鹿らしい。本当にこの界限にはとんだ勘違い野郎しかいないらしい。私は図書室の床を蹴った。つま先に鈍い衝撃が伝わる。ほとんど八つ当たりだった。

「こんな、こんな詰まらない世界があんたの望んだ世界？ 異常者ばかりで味気ない世界が、あんたの望みなのか？ 知ってるかしら。理想郷ほどつまらない世界は無いわ」

灰田が瞠目する。私が何を言っているのか理解が出来ないようだ。私はそこで一冊の本の名前を挙げた。

「『こわれたにんげんの、こわれたせかい』。あの物語の中の女の子が求めた世界。ずっとおままごとばかりをしていた女の子。彼女が求めた理想郷こそ、こんなじゃないの？」

孤独に生きる彼女は、何をしていたのだろうか。あのおままごとは何だったのだろうか。それを考えた時がある。

単純だ。遊んでいたのだ彼女は。一人で死ぬことに飽きた彼女は、遊び相手を求めた。そして生まれたのが黒い人形と、白い人形。それは例えば人の善と悪を表していたのかもしれない。だとすれば、彼女は自分と違うそれらと遊んでいた。ただし、向こう側に意志こ

そ無かったが。

物語には続きがある。勿論、おままごとだけをして終わる話ではない。

おままごとを続けていると言っても、彼女は時間を追うことにまるで人間のように成長していく。身体の肉付きは良くなり、それなりに頭で考えることも出来るようになった。その時、ようやく彼女は気付いたのだ。少し別の世界を覗けば、そこには溢れんばかりの人がいるというのに、自分はただ一人で遊んでいることに。一体何の恨みがあつて自分をこのような世界に閉じ込めたのかと、毎日枕を濡らしながら神を呪ったくらいに。女の子は世界の理不尽さに気が始めていた。

だから、女の子は他の人が来やすい様にホームパーティの準備をした。私自身、その考え自体は否定しない。だが、女の子はホームパーティーの準備をただだけで、招待状など一通も出さなかった。それでは勿論人など集まるわけがない。人と触れ合わない女の子の知能はもはや幼児以下だ。

しかし、そんな日々を長くは続けていられない。女の子は不特定多数の人に招待状を送りつけることに成功した。送った人物がどのような人物かも知らずに、とにかく沢山の人に来てもらおうと思つたのだ。だが、身元も分からない招待状には人々は目もくれず、ゴミ箱の中に全て消え去っていった。

女の子は諦めない。ぞつとするような努力の量をこなし、本を読み、人の世界を知った。そうして彼女は『自分に合いそうな人物だけ』を招待することに決めた。そうすれば無下に断ることもないだろうと予想したのだ。

集まつたのは、女の子と同じ、『おままごとしか遊びを知らない人たち』だった。招待状には「一緒におままごとをしましょう」とだけ書いた。それだけの文で人が集まるとは思えないが、物語ではかなりの人数が集まつたようだった。

ただ、そのパーティでは、各々がおままごとをするだけだった。

これじゃあ何のために人を集めたのか分からない。結局女の子はおままごとを楽しんだようだった。凄く、物凄く満足したようにおままごとを楽しんだ。

「ここに集まったのはあんたと同じ、どうしようもない馬鹿の異常者と、そして適当に作り上げたおままごとのための人形だけ。まるで同じね」

「何が言いたい」

私は灰田を睨みつける。死んだ魚のような目が痛々しく私を見返してきた。

「この物語のエンディングは、それだったわ。ふざけてんじゃないわよ。なに女の子がハッピーになりました、とでも言いたげに終わらしてるのよ。全然幸せじゃないわ。何も解決してないわ。折角自己満足していたことに気付けたのに、結局自己満足して終わった」

「良いじゃないか。彼女が幸せだと思うのなら、それで」

「おままごとしかないんだったら一人でやってなさい。呼ばれた方は傍迷惑だわ」

「彼女は寂しかったんだよ。例えおままごとしかなくとも、彼女には仲間が必要だったのさ」  
はっ。

あまりにも偽善めいた言葉に思わず吐き気がした。疲労しているから思考が鈍っているのか知らないが、安直めいた返答に灰田を見損ないそうになる。

「下らないわね。千差万別十人十色。差別もあれば偏見もあるように、自分と相容れない人間なんて星の数ほどいるわ。それを選別して世界を作ろうだなんて、自分勝手にもほどがあるわ」

「自分勝手か。確かに君の言い分が分からないでもない。でも、それはそういう世界に生きてきた人に対する慈愛が足りて無いんじゃないかい？」

「慈愛……？」

思わず吹き出しそうになった。

「あんだ、本当に頭がおかしくなっちゃったんじゃないの？ どうしたのよ？」

「完成した作品を否定されるのは、僕だって正気じゃいられないさ」「ふうん。まあ、私にはどうでもいいことだけどね」

すると、灰田が心底憤慨したかのように額に青筋を立てて、私の胸倉を掴み上げた。突然のことに驚いたが、私は負けじと気概に振舞った。

「――何が、不満だ」

こいつのこんな表情は初めて見た。なんだ、笑う以外に表情があるじゃない。

「何もかもが不満よ。狂った人間も狂った世界も、私が狂っていると思われていることも。そんなあんだも勿論ね」

「自覚が無いのか？ 君は大いに狂っている。僕らと何ら変わりがないくらいにね」

私はそれに首を横に振った。

でも、分かっている。私がこの界限で言うところの異常者だつてことは、さつき黒住に認識させられた。でも、かといってそれを全面的に認めるわけにはいかない。加えて灰田と同類などとは、死んでも頷かない。

「私とあんたは違うわ。そりやもう、銀河系レベルで違う」

「それはこの世界に対する皮肉っぽいダジャレかい？」

「そうとも言っわね。けれど、あんだだって気付いてるでしょう？ だからあんな問いを私に何度も投げかけてきた。そう認識させるためと、そう認識させないために」

胸倉を掴まれている手を叩く。話すのには邪魔で邪魔で仕方が無い。灰田はその手を呆気なく離し、私は数秒ぶりに床の感触にありつく。

「まったく。女性の胸倉掴むなんて失礼極まりないわね」

ゴミくずなんてついてもいないのに、払う仕草をしてそう言った。しかし、灰田からは返答は返ってこない。何かに呆然となっている

ようだ。

「どうしたのよ黙り込んで、気持ち悪いわね……」

「僕は、人選を誤ったようだ。どうやら僕の世界では計れない人物を引き入れてしまったらしい。まさか、そこまで聡明だとは思わなかった」

灰田は私を憎らしいものでも見るかのように睨んできた。不快だ。なんて不快な視線なのだろうか。物欲しそうな目をする餓鬼と同じだ。もはや『天才』と呼ぶに相応しい人物はこの世界から消え去った。

「君は……本当の意味で優等生だったんだね」

「当たり前よ」

灰田は私に認識させようとした。私が、優等生の天才であると。黒住が私に直接言葉にしたみたいには無く、彼は彼の言葉によって私が自覚するのを待った。私が日常を疑い、自分を疑ったのはこいつのせいだったわけだ。私が少しずつ自己を殺していくのを、こいつは笑って見ていた。胸糞悪い話だ。

そして、灰田は私に認識させないようにした。私が優等生であることを。

「今ならあなたの問いに答えられる気がするわ。知りたい？」

「聞こうじゃないか」

優等生とは何か。灰田が終始投げかけてきた問い。それは彼が私を壊すために用いた言葉の暴力。優等生とは辞書に並べられた言葉の意味を答える存在じゃない。それは国語の学士がやれば良いことだ。

優等生、そして天才との違い。こういうことだ。

私は大きく腕を振りかぶり、灰田の頬に向かって思いっきりそれを放った。一瞬、廊下に物凄い大きな破裂音が鳴り響く。手がじんと熱を持つてくる。この痛みが優等生の仕事であり、その痛みが天才が受けるべきものだ。

灰田は自分が何をされたのかいまいち理解出来なかったようで、

頬を押さえることもなく無為に空中を見つめて呆けている。無理もない、あれだけの強さで叩かれたことなど無かっただろうに。

「これが……答えかい？」

「ええ。私があんたと違う理由。そして、優等生である私がしなければならぬことよ」

「分からないな。今ばかりは君の思考が読めないよ」

当然だ。この程度で理解出来たなら灰田はこんなにも狂わなかったはずだ。

「外に出ましょう。お互い、頭を冷やした方が良いわ」

踵を返し、図書室を出る。灰田の足音が私の後ろに続く。

昇降口には黒住がいる。職員用の裏口から出て、強い雨音の世界に入った。濡れることも厭わず直進する。前髪から雫が滴り落ちる。今はその感触すらやけに気持ちが良い。雨に濡れた服がべったりと肌にくっつき、気温も低いことから身体が冷えてくる。しかし、身震いすることすら忘れてしまうほどの使命感が私を突き動かしている。自然と歩幅は大きくなった。

この雨は何なのだろう。灰色の世界で、唯一本物だと思えるもの。きつと、灰田が用意したものじゃない。本来灰田が持っていたものだ。今、この空に広がっている曇天が彼の中にかかった曇り空なのだとしたら、そこから降りだす大量の雨粒は……。

校庭の真ん中。私はそこを最終戦の決闘場を選んだ。狭い都会だ。ある意味こんな場所こそが、一番世界を見渡せるのかもしれない。空を見上げた。晴れる予定はないようだった。手の平の中で、冷たい鉄の重みだけが私に決断を迫っている。

\*\*\*

神は世界を作った。星でもない。銀河でもない。世界を作った。

では、何故神は世界を作ったのだろうか。これは、意外に知られていないことである。いや、知ることが出来ないのだから、誰も知らなくて当然だ。例えば人が植物や動物を育てるような感覚。箱庭を上から眺めて楽しむような感覚。はたまた、学者のように生物の多様性の確認。説だけ挙げていけば、それこそ人の数ほど存在してしまうかもしれない。だが、どんな理由であれ神は合理的で全知全能で無ければならない。間違っても、寂しいからなんて理由で世界は作らない。

しかし、そんな理由で世界を作ってしまった神がここにいる。

依然として灰田は死んだ魚のような目をしている。宿っていた子どものような瞳の輝きも瞬く間ということか。名残惜しくも無いが、囚人を引導しているようで気分は良くない。力なくぶら下がる装飾と化した腕は何も掴もうとなどしていない。雨と一緒に排水溝に流れ落ちてしまいそうだった。

「……どうしたのよ。落胆しているのか疲れてるのか知らないけど、さつきからあんた何か変よ？」

「むしろ君のほうが変だよ。こんな状況になって表情一つ変えない。流石選ばれた異常者というところか」

「別に混乱しなかったわけじゃないわ。ただ、夢か何かだと思って片付けることにしただけよ」

「樂觀的なのか、冷静なのか分からないね」

「優等生だもの。冷静じゃなきゃやってられないわ」

実際は口だけだ。夢だなんて思っていないし、夢であつては困る。この世界は間違いなく現実だ。白椿さんが死んだのも、黒住が自害しようとしたのも現実なんだ。私がこいつを救わない限り、全部現実になってしまう。そんなこと絶対に許さない。

「さて、優等生と天才の話だったかしら。あんた、何か言いたいことはある？」

私はそう灰田に催促した。灰田の考えていることなど手に取るように分かるが、あえて聞いておくことにする。

「僕は……君が同じ人間だと思ったんだ」

「カテゴリーはきっと変わらないのでしょうね。でも、はっきりと言  
ってやるわ。私とあんたは違う。これは何度でも声を大にして言う  
わ」

「はは……もう否定しないさ」

「随分ね。何、私に惚れでもしたの？」

微笑を浮かべて、冗談めかして言うてみる。

「そこまで固執していた、という意味で言えば間違っていないだろう  
ね。最初に言った通り、僕は君が欲しかった。僕とまともに会話が  
出来た人間は少ない。例え出来たとしても、それは自己を完全に殺  
してしまった異常者。会話することより己が天才たる理由を追う人  
間になってしまう。でも、君はいつまで経っても自分を見失いはし  
なかった」

神は、人類を選別した。それは普通の神の話。

しかし、実際にここで起きたことは、人が神を選別したことだ。  
お前の世界には生きてやれないと、灰田の誘いを頑なに断ってきた  
人間たち。当たり前だ。私だってこんな世界願い下げである。そん  
な時、私が現れたのだろう。

「あんた、もう人と話さなくなつてどのくらい？」

「さあね。忘れてしまったよそんなことは」

「白椿さんがストーカーしていた日、あんたは突然姿を消した。で  
も、夜に現れた。用件なんか一度に全部伝えれば良いのに、どうし  
て戻ってきたのか。白椿さんに姿を見られたくなかった、もしくは、  
彼女が話しかけてくることを恐れた。そうでしょう」

「……」

「黒住が白椿さんの家に入った直後にあんたは現れた。もっと前か  
ら出てきて良かったのに、出てこなかった。それは、黒住にも姿を  
見られなくなかったことと、そして黒住が話しかけてくるのを恐れ  
た。とんだヘタレね、あんた」

凶星か。灰田は俯いたままそれを肯定も否定もしない。あまりに

も習性化しすぎたせいで、自分でも良く分かってないんだろう。可哀想だとは思わなかったが、哀れな奴だとは思った。

「世界と神、どちらが先に生まれたのか。あんたはそう聞いてきたわね」

「ああ。知っているのかい？」

「答えは、分らない、よ。ただ、推測を述べることは出来る」

「へえ、どんなのだい」

言葉に力は無い。興味があるのか無いのかすら、私に判断を任せている。もっと狂気に満ちた奴だと思っていたが、とんだ腑抜け野郎だった。ずぶ濡れになったその姿がお似合いだ。

「——世界が寂しいから、神が生まれたのよ」

そして、神が寂しいから、世界が生まれた。

「この世にある全てのものは一つでは存在出来ないわ。それは世界も同じ。収縮と爆発を繰り返すことに飽きた世界が神を作り、世の中を面白くしようとしたのよ。まるで、あの本の女の子と同じようにね」

灰田純一は、その神の一人だったのかもしれない。彼の望んだ世界は自分が寂しくない世界。箱庭を上から眺める神は常に一人。その横には誰もいない。いや、誰も来てくれない。地獄の上から蜘蛛の糸を垂らすように誰かを招きいれようとしたが、そんな割に合わないことをやろうとする奴は誰もいなかった。でも、灰田と同じ感性を持つ人間ならどうだろう。物語の女の子のように、自分と共に無意味なおままごとをしてくれる友達ばかりを望んだ。

彼は天才だ。もはや誰も否定しようの無い天災。

『創生の天才』。それが灰田純一。

だが、その天才は世界を作ることしか与えられなかった。数式を編み出し、それを解くにおいての天才がいたとしても、その人物が日本の古語や石版に記された謎の言語を解釈する天才にはなれないように、世界を作り出すという偉業を成しえる灰田純一には、他人と関りあう才能が一切与えられなかった。それはどの天才でも同じ

こと。何かに長けるといふことは、代償として何かを失うということ。神は二物を与えずとは良く言うが、神自身すらも世界から二物を与えられなかったということだ。

「あんたが人の子だったのか、それとも何か違うところからやってきた奴なのかは知らないわ。そして、きつとあんた自身も覚えてないんでしょうね。あんたは道化のようで、いつでも本気だったようだから」

「そうだね。自分の出生なんてとうに忘れたよ。灰田純一という名前が真のものなのかすら、僕には確証が無いんだから」

「いいえ、それはあんたのもので間違いないわ」

「どうしてそう言いきれんのだい？」

「名前を覚えているつてのは、そういうことだからよ」

髪を掻き上げる。そろそろ雨が邪魔になってきた。演出としては十分だけど、灰田の言葉らしく夕焼けをバックのほうがそれらしいというものだ。

「君はいつだって自信満々だね。僕と同じ異常者のはずなのに、何故こうまで差が出たのやら」

「あんたとは違うつて何度言えば……」

「茶化さないで聞けよ。君は優等生だ。常にペルソナを被り、他人との距離を測って生きる計算高い人間だ。それはつまり、君も常に孤独であったことを指すはずだ。君と対等に話せる人間なんてこの世界にはいない。そうだろう？」

言い返そうとは思わなかった。凶星でもあったからだ。

両親にすら気を遣う人間。それが私だ。白椿さんに頼られた時のような、人と繋がっている感覚は今まで感じたことが無かった。いわば、全部敵だった。全ての人間は私の競争相手であり、私は一部の決して勝利出来ない相手を除いて対戦相手。そんな風に考えてきた人間に、対等も何も無い。

「……そうね。あんたの言うとおり、私は真の意味では孤独だったのかもしれないわ。心を許せるなんて時も相手も無かった気がする。

でも、私はそれでも孤独を感じたことは無いわ」

「それはどうしてだ」

「まあ、運が良かったのかもしれないわ」

「運、だって？」

ようやく灰田は顔を上げた。水も滴る良い男とは程遠い、酷くやつれた顔をしていた。

「そうよ。私もあんたたちみたいな世界に生まれていたら自分がどうなっていたかは分からない。例えば人殺しが当然のように行われていたり、例えば自分の価値観を育ててくれる人がいなかったり、例えば自分の周りには誰もいなかったりした、そんな世界」

私は、天才とはかけ離れた世界に生まれた。どこの誰が生み出した世界なのかは知らない。ただ、平穏で、時に残酷で、日常や非日常が混ざり合って、時に何も無くて、ほぼ全てが揃っていた世界だ。

その世界で、私は異常者だったらしい。喜ぶことも出来れば、悲しむことも出来る。日常を過ごすことも、狂気の世界に踏み込むことも自由だった。ただ、自分の世界は作れなかった。

「私は、あんたたちみたいに変な思想も無ければ、望みも無い。だって全部揃ってるんですもの。ただね、私があえてあんたたちみたいな欠陥を抱えているのだとすれば、私は他人がいなくてきつと存在出来ない」

「どうということだい」

「私は常にどこかのコミュニティに属しているわ。時には複数属していることもある。私はそこで誰かと競い合ったり、私っていう存在を高く見せようと気張ってる。でも、この相手いなかったらどうなるのか、考えただけでも寒気がする」

それは、今朝父親と母親がおかしくなっていたと気付いた時もそうだった。私が優等生を振舞わなければならない空間が、一つ消失していた。あそこには、優等生である私が必要ない。それが、とても恐ろしい。

「でも、私は幸いそんな世界には生まれなかった。これは、きっと幸運なのだと思うわ」

「すると、僕は不幸ということになるのかい？」

「そうね。あんたは不幸だわ。馬鹿でどうしようもない奴だけど、それだけは同情してあげる」

「ははっ、理不尽だね。そんな運の差で、僕は不幸になり、君は幸運を手に入れたのか？」

「幸せな所に生まれた私が言えることじゃないかもしれない。でも、世界はそういうものよ。それを受け入れなければ、どうしようも出ない」

「君は何も分かってない。僕ら異常者がどんな気持ちで過ごしてきたのか、僕がどんなに苦労してこの世界を作り上げたのか。何も分かってない」

「だから、あんたたちが分からない私が、わざわざここまで来てやったんでしょ。あんたがいつまで経ってもこっちに来ようとしなから、私が出張しに来たんじゃない」

「僕らを知るために？」

「いいえ。私たちを知って貰うために」

いまや世界は黙りこくっている。灰色の雨を降らすのみで、それ以外が死んでいた。灰田は濡れた髪を払おうともせず、そうか、と小さく呟いて俯いてしまった。

「一つ言わせてもらえば、あんたは神になんか向いてないわ。さっさと止めて人間にでもなっちやいなさい」

「——は？」

ふっ、と目の中に光が戻る。ようやく生き返ったか、このヘタレ野郎。

「だから、あんたには神なんて向いてないって言ったの。全知全能であらせられる神が、寂しいとかそんな下らない理由で、世界一つ作ってんじゃないわよってこと」

「馬鹿にしているのか君は？」

「馬鹿にしている？ そうじゃなくて馬鹿でしょ、あんた。天才と馬鹿は紙一重……変態だったかしら。まあ、どちらにせよ同じよね。おままごとで遊んでる青年なんて変態そのものじゃない」

「君って人は……一体何をしにきたんだ」

怒りをあらわにして灰田が吐く。実に人間らしい表情と声色だ。そっちのほうが好みだった。

私はそれに返答する変わりに、黒住から譲り受けた鉄塊を胸の高さまで上げて、檄鉄を起こした。まだ弾はあるらしい。両手でもないものを、あえて片手で構えて灰田に銃口を向けた。

「……僕を、殺しに来た、ということかい？」

怖れている様子は微塵も無かった。覚悟を決めた、ということだろう。

「殺しても良い、とは思ってるわ。私が元の世界に帰れるならね」

「保障は無いよ。少なくとも、この世界からは出られるだろうけど。異次元の話なんて所詮人の形をしている僕には予想も付かないことさ」

「ま、だろうと思ったわ。だから、ここであんたに選択肢を与えることにした」

雨脚が弱くなった。ポツポツと、誰かの涙のように私の頬に雨粒が落ちる。灰色の空は段々と青色を取り戻しつつある。日差しはまだでない。

「ここで死ぬか、扉をくぐるか。この二択よ」

引き金を絞る。逃げはしないだろうが、私は灰田に選択を迫るために、そうせざるを得ない。

「扉をくぐるというのは、どういう未来の話だい？」

「私は、全ての世界に対して扉を作ることが出来るわ。どのコミュニケーションにだって属せる優等生である私が、唯一出来ること。あんたの閉鎖されたこの世界に、私が扉を作ってあげる」

「意味が分からないな、要領を得なさ過ぎる」

「あんたみたいな寂しい奴のために、私が特別に招待状を送ってや

るって言ってるのよ。普遍的で、残酷で、とても楽しい世界へのね。勿論条件があつて、あんたはきつと神を止めなきゃいけないわ。人間の世界に神なんて場違いな生物じゃないもの」

灰田は黙る。頭の中の細胞という細胞をフル活動させてさぞかし悩んでいることだろう。そのさまがやけに面白くて、私は不意に笑えてきた。

「こつちに来なさい。灰田純一」

それに釣られたのか、灰田も似合わない笑みを浮かべて言った。

「どうやったら、神を止められるんだい？」

「それは、あんたの本領じゃない。自分を殺すこと。大得意でしょ？」

セルフディストラクション。そう呼ばれていたもの。

殺したのは自分。それは悪い自分だったり、そうでない自分だったり。人間らしい自分だったり、そうでない自分だったり。灰田に残った『自分』とは、一体どんな自分だったのだろう。

黒住に残った自分とは、嘘つきの自分だった。

私に残った自分とは、全てのことをやり切ろうとする優等生の自分だった。

灰田の世界創生の理由は、馬鹿らしいけど理に適っている。寂しいから世界を作った。彼の方から歩んでこなかったことには流石としか言えないが、私はその求める気持ちを否定することは出来ない。そこに至った時の自分とは、もしかしたら一番まともな灰田だったのかも知れない。ただ単純に、理論も理屈もクソも無い純粹なものであるで、子どもみたいなもの。

「そうだね……これは僕が僕自身でやることだった。君に頼むことじゃなかったね」

「ええ。でも、馬鹿なあんたのために、私も少しでも手伝ってやることにするわ。一応あんたに了承を取っておきたいんだけど、良い？」

灰田は静かに頷いた。私もそれに返すように頷く。

空から日差しが覗いた。雨に濡れた路地が光を反射して輝く。とても眩しい。私は思わず目を背けて、手で影を作った。灰田の姿が見える。だらしのない、びしょびしょに濡れた服で立っている。その背後には美しい世界があった。

握ったものに力を込める。

「私は自分を殺しはしなかった。でも、例えばあんなたちみたいに  
セルフディストラクション  
『自己殺害』と呼ばれるようなものが私にもあったとしたら、こう呼ばれていたかもしれないわ」

灰色の空を切裂くように、銃弾が飛び出す。

「――『セルフディストラクション世界破壊』、とかね」

世界に亀裂が入る。灰色の空はどんどん青空へと変わっていく。孤独に餓え死にしそうになっていた神。

血みどろの世界で一人、自分を殺すことだけをしていた女の子。彼らが住んでいた世界は、私たちの住んでいる世界と違って刺激と狂気に満ち溢れている。ただ、びっくりするくらい何も無くて、詰まらない。

そんな世界に縛られるように生きているなんて、可哀想だと思わない？

だから私は架け橋を作る。私に出来ないことは無い。何故なら私は優等生だからだ。

まとめて全員に招待状を送ってやる。狂った世界も狂った人間も、白椿も黒住も。そうしてまた一つ、私たちの世界は面白くなっているのかもしれない。

灰田がこちらに歩み寄ってくる。相変わらずの綺麗な顔に、紅葉模様が一つ。滑稽な様だった。

「君に、聞きたいことがあったんだ」

「何？ スリーサイズなんて教えてやらないわよ」

「安心してくれ。そんなもの後から何度でも調べてやるさ」

「変態ね……で、何？」

「ずっと前に、君に聞かずに聞いたことがあるだろう。僕はそれに

意味を持たないと考えていたけれど、君たちの世界に行くのならば話は別かもしれない。だから……」

彼は手を差し出した。私は迷わずその手を取った。

それで、世界は繋がった。

「——君の名前を、聞かせてくれないか？」

## エピソード

夏の日差しが降り注ぐ。蝉の声が五月蠅い季節になった。たまに部屋の窓に突撃してくるのはご勘弁願いたいところだ。夏という季節はこれだから、正直好きじゃない。

道路の中から吹き上げるようにして陽炎がゆらゆらと街を歪めている。夏休みに入り、町並みには人が溢れていた。親子連れから制服姿まで多種多様。強いて言うなら背広姿の男性やスーツをキチッと着込んだOLの方々には敬意を払わざるを得ない。この暑い中、お勤めご苦労様である。

「先輩聞いてますかー？ 陽炎なんて見つめたって何も見つかりませんよ？」

横から少女の声が割り込んできた。名前は白椿菊乃。可愛らしいポニーテールが特徴だったが、夏場は暑いということでは今はショートになっている。

私たちは某ファストフード店、というかいつもの場所で昼食を取っていた。相変わらず白椿さんのトレイの上には身の毛もよだつ量の食べ物顔が顔を並べている。これだけ食べて全く太らないというのはから感心する。運動をしているわけではなく、体質の問題なのだろうけど。それはそれで羨ましい。

「それ、毎度思うのだけど少しは抑えようって気はないの。見ていて私が胃もたれしそうなんだけど」

「え？ あ、あれですか。このなんとも言えない香りがダメなんですか。分かります、あたしもピクルスとか食べないほうの人種なんです。漬物だかなんだか知りませんが、ジャンクフードなんだからジャンクで良いじゃないですか。いえ、レタスは大歓迎ですけど」

「単なる我儘じゃないそれ……」

「いいーえ！ これは日本の国民調査によって出された統計ですよ先輩。『ピクルスは必要か否か』という質問に対して、約八割の人

が『いらない』と答えています。美味しくないものには人気は出ない。因果ですね因果」

「絶対嘘でしょう。少なくとも私はピクルスいる派よ」

「先輩……ご愁傷様です。あとごちそうさまです」

「早い……」

何度見ても慣れない。胃袋が宇宙というよりも、口内が宇宙だろう。どれだけ詰め込めばそんなことになるのか全く理解が出来ない。先日体験した異世界旅行よりもこちらのほうが大いに深い謎に包まれている気がする。

「……で、何の話だったかしら」

下らないことに頭を使っても仕方が無い。白椿さんに視線を戻す。

「ああそうでした。なんとですね、黒住がこの夏休みを利用して一週間程度無人島生活を体験させてくれるらしいんですよ。離れ孤島

……バカンスですよバカンス！」

「白椿さん。それはバカンスじゃなくてサバイバルって言うのよ。

ていうか黒住もどこにそんなコネを作ってるのか、いい加減怪しくなってきたわね」

「なんか知り合いの人が島一個買い取ったらしいですよ」

「どんな知り合いよそれ……」

黒住に預けられた白椿さんは、良く彼と一緒に行動するようになったらしい。決して懐いているわけではないと思うが、昔と比べれば両極端になっただくらいには柔らかくなった。一度学校に黒住のあの黒塗りの車で登校してきた時は思わず叩いてしまったが、仕方ないことだろう。黒住も黒住で、何かと白椿さんに懐柔されている。なんだかんだ言っ、お互い気が合うのかもしれない。

「黒住、無駄に資金と権力だけはありますからね。利用しない手は無いですよ」

「般若がいるわ……」

いつひっひ、と下品に白椿さんは笑う。手元にあったジュースを

取って一口飲んだ。どうやらむせたらしい。

「ごぼつごぼつ……。んまあしかし、つい数ヶ月前の出来事が嘘みたいですね。先輩の前で号泣したのが今更恥ずかしく思えてきました」

「そうね。本当に夢のようだったわ」

つい数ヶ月前。

私は色々な出会いを果たした。白椿菊乃、黒住儀軌、そして灰田純一。

そして、私は全てをやり切った。灰田純一と手を繋いだあと、あいつから連絡は一切無い。どこかで作業着を着ているかもしれないし、黒塗りの車を取り回しているかもしれない、橋の下で震えているかもしれない。彼が拒んでいるのか単純に見つけられないのか分からないが、せめて生死の確認くらいはしたいものだ。

「ほんと、どこに行つたのやら……」

白椿さんに聞こえないくらい小さな声で、私は自然と呟いていた。空は余計なくらいに青く晴れ渡っている。あの日以来、一度も雨は降っていない。梅雨の時期が過ぎてしまったというのもあるが、どうにも世界は私を祝福したいらしい。正直暑いだけだから、今すぐに止めて欲しかった。

「灰田純一……」

白椿さんが唐突にその名を口にした。呆けていた私はどこかに灰田の姿が見えたのかと思い、急いで辺りを見回した。しかし、あの目立つ銀色の髪の毛は見当たらない。

「あ、いえいえ。違うんです。あたし、結局彼と一度も話さなかったなあって思いました」

「確かに。今度あいつを見つけたら紹介してあげるわ」

「ははっ、凄く厄介な感じがしますね。心の準備はしておきましょう」

昔だったら考えられない。私が灰田をほかの人に紹介するだって。自分で言つて笑つてしまう。実は、今この時が夢なんじゃないだ

ろうか。まだ私はあの壊れた世界にいて、灰田と口論を交わしてるのかもしれない。そう考えると、幾分か灰田を近くに感じることが出来た。

「……先輩。人と、繋がれるっていうのはとても素晴らしいことですよね」

「急に何？ そりや良いことでしょう。それとも性的な意味で？」

「そんなセクハラ発言求めてませんよあたしは！ その、なんていうか……いつまでも、一緒にいられるっていうことですよ」

赤面することも無かったので、きつと良い意味で言ったのだろう。

「あー、あたしもそういう人欲しいなー」

なんだか棒読みで白椿さんが物欲しそうに言った。ちらちらとこちらを盗み見ているのは気のせいではないだろう。

「私になつてあげてもいいわよ？」

「え？ マジっすか！」

「勿論冗談よ」

「うわっ、今の結構ショック受けましたよあたし。一瞬涙腺緩みましたもん」

「白椿さんにも良い人見つかるわよ。……と、私も人のこと言ってられないんだけどね……」

「あーあ、あたしたちの中でそういう幸せモンは一人だけですか。悔しいですねー」

「一人？ 誰？」

「んにゃ、なんでもありませんよ。それはそうと、無人島の件ですけど……——」

あの日、降っていた雨が、誰かさんの涙だとすれば、こうして雨が降らないのも良いかな、と私は思った。

きつとまた、誰かが雨を降らす。その日まで、どうかこの平穏が続きますように。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0806k/>

---

セルフ・ディストラクション（改稿版）

2010年10月8日12時04分発行